

川柳塔

昭和十一年一月九日 第三刷
平成二年二月十五日 印刷
平成二年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七五四号



日川協加盟

No. 754

女性同人特集・花と私

三月号

追悼 土居耕花

ユ一モア川柳大会

日時 四月十五日(日) 午前九時開場
会場 大原町総合センター
お話し 兼題

「どさくさ」 本田 恵二朗氏
「手ぶら」 西尾 葉選
「美人」 大森 風来子選
「音痴」 大野 連山選
「極楽」 貞岡 信太郎選
「金策」 長尾 恒心選
「妙薬」 小川 かおる選
「善人」 神原 日出夫選
小林 妻子 謝選

出句 各題二句(午前十一時締切) 欠席投句拝辞
会費 二、〇〇〇円(昼食・発表誌呈)
賞 総合点十位まで(一句一点方式)

連絡先 岡山県英田郡大原町下庄町 小林 妻子
★ 武蔵の里研修センターへの宿泊希望者は、小林妻子までご連絡ください。

主催 大原川柳社

麻生路郎先生句碑 建立募金のお願い

かねてから麻生路郎先生の句碑が地元大阪にな
いことを、私たちとして寂しく思っていました
が、今回、「夕桜とんぼがへりがしてました」の
句碑を左記により建立することになりました。同
人・誌友のみなさまのご支援をお願いします。

一、建立地 大阪市阿倍野区北畠

阿部野神社境内

一、募金 一口 二、〇〇〇円

一、除幕式 平成二年四月一日

★送金は、川柳塔社会計室(高杉鬼遊方)へ

〒581 八尾市中田二一三〇二

振替口座 大阪8―三三三六八

川柳塔社

旅の誘い

西尾 葉

平成二年一月五日の日経新聞に、日経トラベルが入っていた。

例によって、九時近くまで寝ている自分はガバととび起きた。というのは……百若爛熳^{シヤンパンナ} 春の西双版纳十日間という見出しで、中国の貴州の風光と多民族世界を訪ねてという心踊る記事を見たからである。

満八十一歳の新春を迎えた自分は、有難いことに内臓その他の歯車が順調で、先日成人病センターでの血液その他の検査は言うことなしの太鼓判を押されたのである。この歳まで無病息災で生かされた歓びを、一つこの旅行にアレンジしてみようと冒険心が起ったのである。家の者に話すと、もうその歳でと大反対で

あったが、最近、川柳も壁に突きあたって、回転が悪く、エンジンも仲々からな焦燥を感じていたので、この際、異国の旅の十日を思い立ったのである。

さあ、そう心が決まると、朝は一時間早く起きて、快食・快便・快眠の三要素の励行に努めると共に、三月出発に大いなる希望の湧いたことが身体中に漲ってきて、何とも言えぬ一日一日となってきた。

遠大な希望も悪くないが、自分のような老人になると、二月三月位の先の希望が大いなる刺激となつて細胞の若返りになるのではないか、老境に入った者の唯一の老化防止は、旅に出る希望位が心境打開と健康増進になるものと思つて、愈々決行する肚をきめて、川柳塔杜の人々の参加を募ったのである。

目的地は中国南部の雲南、貴州両省の名所と多民族の豊かな文化や生活風俗を訪ねるが、この地方は年中温暖で春の町

を意味する春城と呼ばれる昆明、貴陽、景洪、思茅地区を巡る楽しいツアーである。

私はキンキラキンの西洋文化よりも、少数民族がもっている伝統文化のカラフルな衣装や工芸品、建築物、又永く伝えられた民話や民謡、舞踊等の方が性にあっていよう、この度の旅行をこよなく楽しみに待っている。

若しご賛成の方があれば、連絡次第早々にパンフレットをお送りする。出発は三月十九日(月)から十日間で、二十八日帰国の予定である。費用は二七八、〇〇〇円で、ホテル・食事は最高である。何時も誘われていたが、今度誘う身になって、自分は十歳位若くなって元氣もりりである。

旅に出て我れ忘れんとする愚か禁煙者が煙草やめたやめたと宣伝するように、私も巻頭言に書いて意志の強固を図りました。

座右の句

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ (葭乃)

私の句

門前を掃いて米寿の朝があげ

西尾美与子

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

旅の誘い

西尾 栞 (1)

男性諸君へ

藤村 女 (2)

川柳塔(同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

(32)

■川柳太平記 (142) 川柳の群像 稲吉佳晶

東野 大八 (36)

■連載 柳籠裏三編研究 (二丁―三丁)

(38)

水煙抄

黒川紫香選 (40)

秀句鑑賞 同人吟

小出 智子 (60)

水煙抄

西口 いわゑ (61)

銀河系

河内天笑選 (62)

■女性コーナー 茴香の花

八木千代選 (66)

「花と私」―女性同人アンケート

(68)

宮西弥生・栗谷春子・奥田みつ子・淡路ゆり子・岸野あやめ

男性諸君へ

藤村 女



何か書けという注文が私に回ってきましたが、川柳のことは若い方へお任せしましょう。おっとり型の私は、いつものん

がりとした好きで、見たこと思ふたことをつづつて行くと決めた。思えば三十余年前になりますね。月一回の例会に出席し、あの人の人といささつを交わし、お互いに逢えたことを喜び合つて、その日の成績を語り合つ。路郎先生の選に入選した時は特別に喜びが大きく、いま当時のことが懐かしく思い出されます。

私はただ忠実に句を作り、ついでにただのことですが、今さらながら「歳月は人を待たず」の感懐も新たに、はや花の季節を迎えんとしている今日このごろです。私が詩を忘れたら何が残るでしょうか。いや、忘れてはいけないうちに反語が生まれてきます。駄作をいくら読んだり、作つても、決して身につかないし、秀吟であつても、鑑賞眼のない人には「猫に小判」だと言われ、心細くも悲しく思ひます。年とともに、たつた一つの詩情

木本朱夏・澤田千春・丁坪さわ子・西出楓楽

■川柳こぼれ話 辞典あれこれ……………

■ずいそう ひな祭り……………

「入る」……………

一路集「耳」……………

「緑」……………

初歩教室「微笑」……………

新春おめでとう会……………

本社二月句会……………

菊田いさむさんを悼む……………

■各地句会日より 川柳塔きやらばく……………

各地柳壇（佳句地十選／羽津川公乃）……………

柳界展望……………

三月各地句会案内……………

■編集後記……………

田中正坊……………(73)

布施幸子……………(74)

吉川寿美選……………(76)

天正千梢選……………(76)

河内月子選……………(77)

辻白溪子……………(78)

……………(80)

……………(82)

黒川紫香……………(86)

林瑞枝……………(87)

……………(88)

……………(98)

……………(99)

……………(100)

座右の句

美しい心の人と立ち話

私の句

出発へ夢と現実詰めて行く

（操子）

高橋操 漕

すらややもすれば忘れがちですが、はたしてこれから、どこまでついて行けるかというこ
とです。

まあおきはこれくらいで、それよりも楽しい娘たちの話を聞いてください。これは彼女の受売りですが、なるほどと思います。男性諸君に申し上げます。

女性を国に例えると、まず三十歳代の女性は東南アジア、それは開発途上だということです。四十歳台はアメリカ、まだまだ開発の余地があるという。五十歳・六十歳台はイギリスで、過去の栄光に頼り、あるいは伝統にどっかりと腰が座りすぎているとか。そして七十歳台はシベリア、それは誰でも知っているが、行きたくはないということだそうです。そういう女性についてのたとえ話が、娘たちの口からこぼれてきました。さて世の六十歳・七十歳の男性諸君が、いちばん好ましく思う女性はい。

また、自分の年齢を二で割って十歳をプラスする。もし七十歳の方なら四十五歳ということになる。こんな話も彼女たちから聞かされました。男性諸君、七十歳・八十歳はまだ壮年です。恋も結婚もあきらめることなくどしどしと、一度きりの人生、元気を出してください。そして、詩も忘れずに楽しくと申し上げます。

八十歳になっても嬉しいラブレター
老いらくの恋もときめく胸を持ち



西尾 葉選

岸和田市 原 さよ子

手造りの味を賞め合う老姉妹

賀状だけでつなぐ友だが温かい

小春日を友の書展に足運ぶ

子も凧も親も走ってお正月

どうでもよいつまらぬ事を覚えてる

幸せは夫と遍路の鈴の音

大阪市 北 勝美

机上一杯並べることがはかどらず

灰皿を催促される友が来て

泡盛の無色透明にある恐さ

未だ少し惚けに間のある好奇心

病妻の肩を流すも老夫婦

千両より俺には好きな藪柑子

西宮市 門谷 たず子

手になじむ夫婦湯吞があたたかい

真剣に生きて喜劇の種ばかり

平均的な暮しに湯豆腐が煮える

まだすこし女を残す訪問着

身内の話する時夫が他人めき

大嵐ひいて二人の夜が戻る

伊丹市 樫谷 寿馬

元日の電話のベルにあるスリル

若松を真似て元日の背を伸ばす

男でも女でもない性が欲し

温泉で駄馬は末路を模索する

ルーマニアの記事が関白脅かす

午歳へ戌歳の妻よく吠える

松原市 谷垣 史好

胡散臭い男がいつも視野にいる

連れ立っていそいそどこへ葬式へ

お賽銭 春夏秋冬さむい音

冬眠はしてもアンテナだけは出し

まだ病後一步一步が地につかず

春の野の霞の如く暮らさんか

和歌山市 西山 幸

花暦 分相応な春を待つ

靴を光らせてわたしを出直そう

下手だった今日の素面と語ろうか

出遅れたので留守番に甘んじる

荷の重さ不意にさみしいなと思う

本音しか言えぬこころの振り子です

倉敷市 小野 克 枝

人生と言う名の始発駅に佇つ

投げられた石をにつこり受けておく

いつ動き始めたのだらう花時計

墓に詫び墓に甘える花すみれ

戦列を離れて探す青い空

還暦が迷惑そうにやってきた

米子市 林 荒 介

生きてしがらみ壁壁壁に囲まれる

夢からも遠い櫓の音を抱く

旅枕 昨日と違う風に逢う

わたくしを笑って縛る指という

千羽目の鶴もあなたに届けます

ローソクの礼儀正しく炎え尽きる

大阪市 江城 修 史

目覚めては命を思う腎不全

遊び球もたぬ夫婦で日銭追う

楯となる妻よ君こそわが命

駄馬なりの半生路傍の石でよし

灰色の自画像ばかり腎不全

ちぎれ雲旅のひと日を何想う

八尾市 高 杉 鬼 遊

雪を見た人と訣れる季の移り

おんなひとりどう言われても生きのびる

活作り何か言いたい面構え

物価高三途の川を渡りかね

退屈な人を横目に風ぐるま

折込みに妻のしるしのうすいテキ

松江市 舟 木 与 根 一

思いつきりペースを崩す三ヶ日

芯はまだふっ切れてない昼の月

劇中劇はやっぱり妻と組む

われなべの蓋が美人で不思議がり

長生きの国で共済揉めはじめ

ポリープを軽うく言われて気をまわし

竹原市 小 島 蘭 幸

扉開けるといつでも愛があるように

燃えている男遠くで見ているさ

許したり忘れたりして笑うのさ

今度生まれるときも女と妻が言う

自分には甘い男と握手する

わたくしが一番好きになる鏡

米子市 林 瑞 枝

満ち足りて神のジョークが降ってくる
平仮名ふうに生きてリズムに乗っている

春うらら恋のポストへ続く道

ひと声を掛け合う丁度よい距離に

新刊書ひらいて青い風に逢う

コメディ一家 自転車五台漕いで出る

松原市 佐 藤 奏 月

やんわりと返す手ごわい相手だな

電話一本愛を確認しておこう

マドンナの靴は踵がすぐに減る

最後までめんどろをみる別れ下手

写真モノクロびたりと止まる風車

神様をあまり信用していない

大阪市 西 出 楓 楽

菩提寺が近すぎ薄いありがた味

カタカナに社名をかえる人不足

白菊の存在感に負けている

齢を言う自分をガードするため

越冬のゴキブリに会う冴えない日

底冷えへついで打ち過ぎる句読点

堺 市 河 内 月 子

おもしろい話が好きな茶の間の灯

ややこしいこと後回しティータム

歯車をすこし息子へ合わせよう
褒められておっちょこちょいのクセが出る

心だけいつも豊かにしておこう
友達が来ると息子はよう動く

米子市 小 西 雄 々

鈍行に乗り換え古希を生き抜かん

目の毒といわれる方へ向きたがり

万華鏡の視界で論議せぬように

了見の狭さを風に見おろされ

パンの耳捨てて孤独が溜る朝

ひいふうみい趣味を数える妻若し
奈良市 宮 口 笛 生

何よりの幸せ元氣にお元日

特級酒の酔い有難い三ヶ日

常夜灯の温みをもらう初詣

正月の声神棚に仏壇に

晴耕雨読えんどうの花咲いてくる

温泉へ二月の旅の予定表

高槻市 辻 白 溪 子

無駄使いたとは思わないデート

その辺の事情は友情喋らない

信号にふつと殺意を感じ取り

似た者の夫婦で金に縁が無い

早合点したばかりにボロが出る

肩凝ったおんなの愚痴がひつこすぎ
大阪市 津 守 柳 伸

健康のよさしみじみと闘病記

おみくじは凶であしたに賭ける夢

それなりの理由待ってるプレゼント

万全を期した装備も雪の山

点滴に託す希望のうらおもて

涙もうい女にさせる9度3分

羽曳野市

吉川寿美

千六本刻むリズムに亡母がいる

組の疵は女の賛歌かな

消ゴムで消せぬ人生誤字脱字

言わでもの悔いへ枕を裏返す

土一升高値に狂う風の街

子離れの帽子が中々戻らない

竹原市

岩本笑子

風知草よむらさきよ恋知りそめし

行平の丸さよ冬になりました

おでんだね一本追加する雪よ

正月を活けて花の名を知らず

寒の水こうじの唄に酒になる

十二歳そのかしましきこと双生児

豊中市

田中正坊

カレンダーめくればバツと蓮華草

あちこちの部品がいたむ春の鬱

失いしもののひとつに銀の匙

一日のドラマ ヒロインは私

脇役に徹しきりたい紅生姜

淀川の水ぬるみたり月斗の忌

松原市

玉置重人

辞めろとは言わず左遷ばかりされ

妻の留守食べる手順も書いてある

戎さんの雨が気になる小市民

ありがたいことに一日短すぎ

さあはたち少年Aで済まされぬ

どんと焼きあつと言う間の松の内

奈良県

長谷川春蘭

非常階段落ち葉遊ぶにまかせおり

健やかに余生大事と冬至粥

かさこそと句作の怪 落ち葉の譜

初春の集うことのみ心足る

絵馬堂は人影絶えず明けの春

賀状来てたぐる追慕の糸車

鳥取県

新家完司

なにごとくも無く新しい年になる

真つ暗な村を通って初詣

食べたくはないが縁起のおぜんざい

元日の夜も救急車は走る

野良猫よ逃げるな今日はお元日

朝起きて首が回るか確かめる

五所川原市

加藤彩人

ジャムリンゴ敗者復活の夢にのる

青リンゴ噛んで少女の顔に逢う

リンゴの皮切れずにむいて嫁かず後家

老母の手を握れば五個のタコがある

妻子背に針千本の座に耐える

ラッシユアワー五百羅漢のモデルたち

京都市 松川 杜 的

風邪ひいてまんねん去年と同じコマーシャル
鶴二匹画いて夫婦の祝い箸

郵便番号五桁の便りにある温み

頭付はごまめとえびがあればよい
終章の余白は充分とつてある

京都市 山 本 規不風

平成二年男が持つてゐる初鏡

ふるさとの初東雲を絵に遺す

躰いて大胆になる寒牡丹

還暦の寡婦が愛する福寿草

映画館男はつらいよに酔うて出る

下関市 石 川 侃流洞

動物愛護の話スキ焼食いながら

一日一善今日何しよう眼鏡拭く

疑心暗鬼真直ぐ行けぬ蝸牛

ブラックコーヒー固い話が好きならしい

桜花爛漫マンネリズムは酒だろう

笠岡市 松 本 忠 三

叱られているいいちゃんがばあちゃんに

女房の台詞時代がそうさすの

断つておくがの後がおそろしい

新年の抱負何にもありません

爪楊枝くわえたままのお勘定

倉吉市 奥 谷 弘 朗

七十年輪廻重ねた業に生き

損得を越えた男のおつき合い

いい妻に巡り会ったと思う日々

知恵と金無いから汗を出すと言う

悪知恵が無いと政治家には向かず

豊中市 安 藤 寿美子

おせち料理だんだん嫁の味になる

達筆の手紙返事は電話にする

家計簿も日記もあんなに上げますわ

暗算の必要なくてほけそうで

気に入らぬ時には老女のポーズとる

倉敷市 稲 田 豊 作

事勿れ主義に左も右もない

友みんな以下同文の顔ばかり

忍の字を抱いて人生七曲り

公益に繋がる汗は惜しまない

親離れした子を思う不眠症

美禰市 安平次 弘 道

良心が内気で悪が裁けない

夢ばかり追つて見落とすキーワード

思い当ることあり怖い聴診器

貧乏神と知らずに外すドアチェーン

遣伝子にも落丁があり落ちこぼれ

奈良市 天 正 千 梢

きらわれる原因説明くどすぎる

情熱のスペイン太陽まぶしすぎ

人生の楽しみ方スペインで学び

地中海の日の出まなうらに焼きつけて
コロンブスの船出の川はとうとうと

森井菁居

二女(紀) 成人式

紀子様似た名でよろし娘ははたちは
たちの酒に酔わせて貰う父の椅子
成人の日だ晴れやかに行くが良し
二女はたち一対一で語らんか
目度度を増幅させるレタックス

榎田英詩

過去になる今日だ悔いなど残すまい
ライバルの目線が高い身構える
腹巻の財布あたりで本を読み
妬きながら諫めてくれる女癖
その先は言わせぬ軽い咳払い

林野甦光

好きな絵が描けそう島で娘に出合い
消費税通過うちの嫁さん手を叩き
左手はぎこちないねえ箸枕
映画鑑賞 一時未来を模索する
手の出ない土地でペンペン草狂う

辻文平

兵庫県

つまりいた弾みに読めてくる未来
春を咲く芽が土を割る冬を割る
春夏秋冬老いのいのちが夢をみる

足して二で割って片棒担がせる

逢うて来た画布が真つ赤な彩になる

越智一水

酒とろり心もとろり三ヶ日

赤ちゃんのうんち嬉しいもののうち

借金返済水田を売ると決め

傷心が土耕せば土へ消え

ふる里は消えて氏神だけ残り

矢野佳雲

一と昔前だったたと口惜しがり

先生が好き分校へ馳けてくる

虫干しに今でも好きな柄があり

ライスカレーおはこの姉が嫁にゆき

恋愛結婚当り外れは天気かも

片上明水

踏み台を下りると恩を忘れられ

踏切も足踏みをする忙しさ

矢印はみんな港へ向いた街

遮断機の向こうも大根提げて待ち

どこかしら磁石のようなお人柄

吉岡美房

国中の鳩眠らせて銃を向け

本年もよろしく頼むくされ縁

頼りないあんだ離婚も出来まへん

一月の神様欠伸噛みころし

出稼ぎの戻る夫の背が憎い

富山市 舟渡杏花

花ことば知って孤独がつのります
もて過ぎたお伽話を聞き飽きる

面棚の素顔の面が売れ残り

ヒゲを描き足してご先祖よろこばす

しこしことラーメン屋で育つ愛

名古屋市 越村枯梢

宝石より漬物石がよく似合い

開けっ広げの女でカラオケ好きという

福耳の娘を嫁にとせがまれる

蹟いた小石よお前も痛からう

人情に触れると脆くなる椿

名古屋市 大林曲ん手

咲きかけた花は問い詰めてはならぬ

仲直り節目通りにチョコが割れ

予定表いつも夫婦で書いてます

正義感左の耳に栓をして

子煩悩どこまで続く肩車

和歌山市 若宮武雄

三りんばだが日曜で日本晴れ

このケーキよりもあの日のコッペパン

初恋もまだ生きのびて年賀状

スタートは横に一直だったのに

和歌山市 堀端三男

そんな筈ないとわめいている悲惨

先生冥利叱った子供が来る年賀

揉み手する手で算盤を弾いてる

窓開くと飛び立つ位置へ千羽鶴

まだ煙草吸うとげげんな顔をされ

結んで開いて野党連合正念場

和歌山市 福本英子

平成二年幕明けからの多事多難

御神籤凶 神社を替えてまた替えて

転勤をしてから嵩む通話料

正眼に構えマンネリたじろがぬ

奥瀨の奇景へ都会の塵つもる

和歌山市 内芝登志代

虫よけのつもりの彼へ本気となる

居るものがないと淋し妻の留守

太陽へ恥じぬ野良着の朝のうた

いつもより弾む足音母の勤

針の尻押しておされて今日を生き

和歌山市 牛尾緑良

笑い合って同じ痛みを持つている

天あおぐ頃に仲間が駆けつける

旅に出る何か無くしたものがあ

脇役を納得させる酒の数

握手してみんな仲間にしてしま

和歌山市 垂井千寿子

人間不信カードをたんと持ち歩き

般若心経書く指先に明日がある

鍋磨く母真直ぐに世を渡り

登りつめ孤独な椅子が待っていた
消しゴムで消えぬ汚職と知りながら

和歌山市

桜井千秀

曳きずられそうで秤にかける愛
鞭打ってあげたテンポに合わされる
責められる側にも言い分たんとある
お見事なおとぼけ素敵だと思ふ
身の振り方は他人任せの冬の蠅

和歌山市

山川克子

大切にしたいあなたのキャラクター
良いように考え直しケリ付ける
耐えて待つおんなの庭の寒椿
渡れない子供の頃の丸木橋
影法師お前泣かんでいてほしい

和歌山市

福井桂香

罪ひとつ花盗人をしてしまふ
小包みを開く不安とときめきと
石段をいくつ登れば母の歳
議員みな黒いベールがお似合いか
紫のパジャマあなたを寄せつけぬ

米子市

石垣花子

散り敷いて山茶花誇りまだ捨てぬ
波風の立つのが嫌で黙ってる
老父の背が時々淋しいポーズする
嘘ついてくれる医者喉仏
眉上げて振り向きもせぬ門出の子

逃げ道を見つけ安心して眠る
うれしくて仏に話し子に話し
落ちて尚椿は次の世を思い
堀越えたボールに罪はないけれど
笑い袋母によう似た声がする

米子市

野坂なみ

矢つぎ早に紅白の荷がおしよせる
掌を合わす一つの芸を温める
石の旅 川の流れに身をまかす
叱られてうれしい師弟の仲である
わたしが笑う鏡もわらう

米子市

菅井とも子

律義にも傘寿今年も豆を撒く
あまさを焼く亡母の齢越して
猫からも苦情が出そう柿を伐る
乗りかえの駅で父への干蛸買う
不遜にも芸術の目で見る仏

米子市

青戸田鶴

おだやかなリズムでよせる今朝の波
しきたりを少し省いたお正月
一面の雪でみそぎの街になる
どの部屋にも灯りつけよう誕生日
傷口をいやしてくれる友の部屋

米子市

政岡日枝子

馬が跳ねてじつくり読んでおれぬ本

自画像にかかせぬ父の古帽子
太陽よせめて峠を越えるまで
ラーメン食べる意見合うのも冬の候
追われてる気がして馬はひた走る

寺 沢 みど里

米子市
的はずれしても若やぐボーリング
ひとつ覚えの芸をときどき陽に晒す
廃校の門を何度も振りかえる
地球儀を退屈させぬ回遊魚
三ヶ日沸かせた後の隙間風

米子市
澤 田 千 春

二枚貝笑い話に口開ける
評判が波紋の舟に乗ってくる
想い出がどの道行けどわく故郷
がむしやらに生きて鏡の白い髪
馴れ馴れしく嘘が私の肩たたく

出雲市
吉 岡 きみえ

果ごもりのように布団へすべり込む
冬苺白のお皿の誕生日
美しい人へ振り向くくせをもつ
くすりにも毒にもならぬ人という
雪しんしん私を浄化させて降れ

出雲市
園 山 多賀子

下手な字で神の目に遭う絵馬もある
蒔いた種よりも意外なこぼれ種
炎える欲望赤いワインを口にする

川柳カレンター单身赴任続く娘に
不本意な妥協も酒が考える

島根県
松 本 文 子

傷口の深さ比べてみたとても
あれからの大阪近く恋う灯り
高野山これで安心して飲める
金少し貯まったらしいベレー帽
天気図の大阪もみる雪ダルマ

出雲市
久 谷 まこと

古里は遠くてもよい宅配便
無人駅訛りを残し発ってゆく
束の間の幸せでよい夢占い
寒月の私の影は泣かさない
隣まで来たのに止まる笑い声

岡山市
時 末 一 灯

開発に月の流れる川がない
乾杯の音頭へやとと辿りつき
年賀状ひと言欲しいのもあつて
ああ無情ベンチに並ぶぬれ落ち葉
飛行雲かき立てるもの胸に抱く

岡山市
川 端 柳 子

平成二年夢のつづきをみていたい
怒ったらそれで負けそうほえもつ
恋というあまりに淡し夢の跡
きびだんご一つ貰うてから動悸
初ごよみ繰らず恩師の逝き給い

(逸見灯竿先生急逝)

岡山県 嘉数 兆代賀

誘い上手な舟がわたしの方へ来る
自作自演の糸がもつれている闇よ
一粒の火種をもらう風の駅
死花を咲かす肥料を買いにいく
雲は流れて人は挽歌をくり返す

岡山県 小林 妻子

初春へ孫が大きくなっただけ
ライバルの背中ばかりが気にかかる
午年へ脛の調子の悪い馬
弁当は同んなじようにもられます
骨董の域で現役勤めてる

岡山県 萩野 鮫虎狼

影法師こころあたりで離れたい
見栄捨てて息子と二人酒美味い
初夢に人妻が出る慌て様
老眼鏡替え孫の初衣裳
喜寿の春童話が段々面白い

岡山県 矢内 寿恵子

知る権利知らぬ自由をいう世代
耳底にまだ鳴り止まぬ亡母の鈴
遍路杖浅いえにしと歩ましむ
捨て切れぬ過疎にみどりのある限り
根性を育てた追い風向かい風

八尾市 内海 幸生

日本海雪が磨いた蟹の味

輪廻とや叱言もそっくり亡父のもの

正月のニュージールランドにて

タズマンの氷河はウォーと言わずだけ
二日前墜ちたセスナと知りながら
逢いたくば深夜と南十字星

八尾市 宮西 弥生

美しく背すじを伸ばす冬の花
大寒の日からあいさつ凍りつく
甥っ子の花嫁探しの舟に乗る
青竹を踏んで春の旅支度
赤いセーターで今日の男運待っている

八尾市 宮崎 シマ子

夏も冬も菊が上がっている仏
雪の峰哀しきまでに光るなり
逢うたとききれいな虹が消えるだろ
仕事場を勝手に片づけたら困る
お雛様娘と同じ年成人式

八尾市 鷺見 章

タクシーにすれば良かったメモの地図
ペーターベンの笑顔を捜す肖像画
うつの日の貴女ヘジヨーク プレゼント
ぐい呑みに万金がつく巨匠の名
老兵が消えて行けない人不足

松江市 恒松 町紅

カタカナに溺れ温い字見失う
張り切ったあとの疲れへ午後の雨

右書きがまだ生きている寺の額
山陰に住み松葉ガニ縁がない
呆けが来たことにして置く物忘れ

松江市 柳 楽 鶴 丸

方言に泣いた過去ありサシスセソ

禁酒禁煙次は人間廃業か

世界中で妻が一番嘘をつく

スケジュールの空白僕の充電日

男を殺す鉛筆を削っている

島根県 堀 江 正 朗

さやさやと茶筌は雪の降る音か

桜咲くよろこび雪は降りしきる

聞き違え笑うでないぞ風の音

デコボコの道の恋しさズック履く

耳だけの世間雀も友として

島根県 西 村 早 苗

十代という人妻の漫画趣味

人の目には気楽お米を研いでます

男だと言われ泣かずに立ち上がる

温室と知らずに咲いた花のバカ

決心がついたら来いと口の先

島根県 小 砂 白 汀

蘇生して(二句)

蘇生してやはり地球は碧かった

身辺の整理うながすシグナルか

星のない男に添うた妻ふびん

すくすくとひこ生え明日を信じます
無花果の葉っぱが落ちてごまかせぬ

島根県 榊 原 秀 子

数の子の歯ざわり初春にちがいない

降る雪のいちずたちまち雪のかさ

柚子の湯もよし油揚げと寒の入り

七草粥無事を祈った塩加減

冷凍山椒一足早い春を煮る

島根県 錦 織 文 子

書初めへ心ひたすら無の一字

つながれし舟に声あり蜆舟

英語話すオウムと向う留守の家

遠い娘はいつも長生きしてと言う

百迄の寿命に触れて笑われる

鳥取県 川 崎 秋 女

笑顔についていナミーンな持っている

山彦になって戻ったアリガトウ

ほかほかの鯛焼がある荒神さん

あの人が好きともしびが一つ灯く

よくしゃべる少女へ炬燵あったかい

鳥取県 松 下 た つ み

生きるための遊びの無駄を笑うまい

世の中が少し分かって拗ねている

手のひらのたこは休みが大嫌い

結論へ少し本音を残しとく

冬の海男の声に嘘がない

鳥取県 林 露 杖

心機一転拳を撫でる老いの新春
ジャンボくじ外れ元日飲み直し
外は雪僧俗鍋をつつき合い
三度喰う飯のうまさよ倅せよ
百姓だせめて喰う米コシヒカリ

鳥取市 両 川 洋 々

絆バラバラきよう落日の章を書く
バンザイへああ英霊よ目を覚ませ
恋のゲームに夢中で出口見失う
老父泣かす愛馬進軍歌が泣かす
候補者のバラもその嘘聞き飽きた

鳥取県 土 橋 螢

この道を行けば女とすれ違ふ
馬乗りになつて按摩をしてくれる
肩に手をおかれて星がすべり落ち
天皇陛下万歳も霧の中
野党から馬を一頭引いてくる

鳥取県 森 山 盛 桜

猿まわし猿を許してから寝つく
太陽に夢中北風たりえない
自意識が過ぎて動かぬ亀の首
寝返りをうって逆夢から抜ける
日曜も休日もないカラス達

堺市 中 川 滋 雀

モーニングコーヒで拾ってきたコント

同舟異夢行き着くところは変らない
もの言えぬ立場で背負う金屏風
都合良う事が運んでくる恐さ
雪の降る町にも町の灯がともり

堺市 高 橋 千万子

挨拶の名刺代りが重たすぎ
おしゃれして暦の年齢をはねのける
初対面馴れなれしさに鎧着る
うっかりとしていた事にしてすませ
話し合い世代の違い風がぬけ

姫路市 丁 坪 サワ子

仕来りを嫁に合わせて初春祝う
初陽溢れ未だ未だ萎えぬ古希の肌
初吟の富士山声は高らかに
懲りもせず三日で消える計を立て
父さんが居ると茶の間の灯が温い

姫路市 中 塚 遊 峰

いいかすれ出して見たくて墨をする
青墨で大字がな書く院二年
朝毎に「頑張れ玄さん」唱え起き
幾万の味方に勝る息子が一人
年新た敬語に戸惑う初笑い

大和高田市 岸 本 豊平次

難民の眼には東方見聞記
レジへ来て一桁上げた消費税
暖かくなつてよかったお会葬

一電車遅れてしまった長電話
節約と浪費の昭和が二世帯

姫路市 人見翠記

帯を解きお湯に浸れば浄土なり

去年今年昨日に変わぬひとり部屋

読初めは大歳時記を繙けり

新春を寿ぎ揃うシクラメン

正月を重ね重ねて傘媼

箕面市 坪田紅葉

平成にまだなじめない七十歳

おじいさんと同じところにあるほくら

アメリカから花束とどくバースデー

湯の宿の女将と話す月明り

大根が一番おいしいおでん煮る

高石市 浅野房子

温泉で対応策を練っている

一時休戦温泉卵たべてます

評判の老舗も裏は火の車

バーゲンで買物をする長者

所詮は一つ穴のむじなと納得し

宝塚市 丸山よし津

見た事が無いのでUFO信じない

効き過ぎる暖房地球も温くなる

ばやいても渋滞の道動かない

辻褄は何時の間にか合っている

板前の修業に励む国訛り

西宮市 林はつ絵
あしあとの温もる村の小学校
落人を眠らせ島の昼の月

距離置いて無難だと言う淋しい目

パチンコで届く程度へのを置く

風に逢うたんびにずるくなってゆく

西宮市 奥田みつ子

島幻想

ひとり占めしようとすれば島かすむ

遠い島あれは確かに蟹気楼

島の岬にときどき灯るゴーサイン

残照にむらさきとなる遠い島

今もなお懂れている遠い島

尼崎市 春城武庫坊

關病三月涙と座る車椅子

スプーンより箸が使えて春近し

立候補します賀状でない賀状

越年の蠅が人間馬鹿にする

遺跡掘りあて道路工事が狂い出し

尼崎市 春城年代

ゴム風船萎んだままで年明けける

音沙汰があれば消化が悪くなる

初明り起き伏し長き夫婦なり

わが恋は褪せずあかねの炎ゆる中

休肝日松の内だけ忘れよう

尼崎市 奥山美智子

あるときは自分らしさへ憧れる

相槌をうつてしまった軽い嘘

馬の耳軽いジョークを聞き流す

ふんぎりがついてお腹が空いてくる

不器用に生きた大きな亡父の靴

東大阪市 森下愛論

感情の起伏俎の音にみせ

三面鏡化身の術を覚えさせ

笑いから始まるは女の闘い

生命線眺めて無為の日が続き

脳軟化恐れて仕事に精を出し

東大阪市 崎山美子

花時計甘い話を聞きあきる

親と子の心の橋がくちている

本当の弱者救えぬ歩道橋

橋一つ渡ってみたが同じ風

味方にもなれず敵にもなりきれず

唐津市 田口虹汀

指切りを果せなかった掌がうずく

弥次馬が喜ぶ話消費税

紅白を聞きつつ傘寿過ぎていく

道場の鏡開きに子は燥ぎ

正月だけは白いご飯が出た昔

唐津市 久保正敏
バルトからペレストロイカの世が明ける

誘惑と闘う職場の灯を点す

無器用に蟹を喰ってる発明家

牡丹散る今朝は牛乳あたためる

ブランドに優る和製の美女の群れ

唐津市 仁部四郎

法律に負けて校長椅子を捨て

法律の鎧時には夫婦にも

青春は六法全書も尻の下

法律に頼り会議に波を立て

天井が会議の相手月給日

唐津市 筒井朴竜

妻見舞う肥前路日向峠越し

看に行つた夫を世話焼く妻ならん

陽の目みる妻の笑顔や千羽鶴

東下り孫来る快気遠からず

早耳の婆さん近所触れ歩き

寝屋川市 江口度

まだ脈があるらし社長に叱られる

猫に鈴つける役目を買って出る

まっすぐに帰ると妻があわてます

クラブ振る女王へからす温和しい

昔から必要悪の袖の下

寝屋川市 稲葉冬葉

街を出る話入歯が浮いてくる

愛のある内は潤うおとこ雛
こっくりさんの割箸を信じきる

頼む顔作りが冬になっている
奇人変人私の子供たち

寝屋川市 岸野 あやめ

成金になって系図を書き変える

妹を巻き添えにした兄の意地

お隣もお大根炊いてはるらしい

苦い酒甘くなる日もきつと来る

女あるじの哀しみを知る白い皿

岸和田市 福浦 勝晴

いざこざを丸く納めて春はそこ

遠回しにやんわり言うて探る腹

税食らうカマトト振りのお役人

町内の狸で面倒見はよくて

同窓会しやしやり出ましたオバタリアン

岸和田市 島崎 富志子

箱根路をタスキに託す若い足

還暦の足もと小石がころんでた

俗名でまだまだ頑張る老い二人

賽銭を倍額にした願いごと

いつか又逢えますですすね高野山

岸和田市 岩佐 ダン吉

肩書がやけに凄んでいる名刺

嫌いではないとわからぬことを言い

民衆が今日も世界の地図をかえ

頑固まで評判となるお店です

ドクターの風邪移されたみたいです

日章旗雲一つなく金も無し

靴が鳴る痛い痛いと言子泣く

寿という字に似たる路地の奥

三ヶ日過ぎてまた来る集金屋

出ませいの声がまだ来ぬ控え室

大阪市 河井 庸佑

運不運事故の列車に乗り遅れ

外面の良さにままとひっかかる

勇気ある撤退他人は何と見る

雪吊りが冬の風情を盛り上げる

神様もこれは聞けぬと思う絵馬

大阪市 吐田 公一

あの橋を渡ると違う虹がある

ゴボー抜きされてた味方とは知らず

ゆっくりと重荷載っている父の駄馬

めでたさも中流というマイホーム

運命の曲を静かに聞く夜明け

大阪市 本間 満津子

お蔭さま達者で暮す子孝行

親友と笑って頑固認め合い

アメツチの恵みに生きる捨て育ち

行間を読めぬ世代とすれ違い

補聴器つけて聞いて下さい戎さん

初詣 白い心に還す雪

大阪市 神夏 磯典子

大阪市 西森 花村

水仙が咲き始めるとしゃんとする
蛇口全開嬉しさに顔洗う

姿見の中で牡丹は散ってゆく
春の服まずはおなかをへっこめて

大阪府 藤田 頂留子

店開くをまつてる眼医者パチンコ屋
空いていて駅名一コマずれたまま

同じよに見えてて違うアマとプロ
彼岸までノルマを守る冬將軍

早買いを笑うバーゲン風二月

大阪府 坂口 公子

仲良しに成りたい鏡に諭される
仲良しの土へ光らす鉄の先

鍋磨く時の真面目な妻の顔
仲良しになりたい長い豆の蔓

晴れ着着て女が匂う子が二人

大阪府 大塚 節子

温泉や温泉やとて寝正月
円高も株価も関りなしの初春

皮ジャンももう男だけのものでなし
大判のスカーフ角巻の様袈裟の様

じゃじゃ馬の娘可愛い孫と来る

大阪府 富上 光代

裸木は春の支度を怠らず

テレビから貰う笑いで独りの夜
子等の夢編み込む針はよく動く

気遣いの温さ身に滲む家族の輪
乗り継ぎも一緒に会釈して降りる

軌道修正すれば世間が広く見え
あの人はどうしてと絶句する計報

遭難者出ても雪山讚美する
革命劇相次ぐ地球の大舞台

コードレス電話抱えて炬燵守り

他人から見ればやさしい嫁しゅうと
新年会来る約束の友が逝き

若いねと許す立場になって姑
雑魚でいい人のお世話の出来る幸

真ん中に母の嬉しい顔があり

宇部市 平田 実男

初詣自分のことは忘れて居
割箸を割るたび酸素薄くなる

喉元で詰まる言葉が増える老い
妻へ気を使っています体重計

ポケットのベルが酔わしてくれませんか

高知県 赤川 菊野

その先を言えば私が裁かれる
残すものないので献体考える

指切りへ命をかけるのも女
独走へ亡夫が伴走してくれる

桜便りあげる鬼にも仏にも

大阪府 板東 倫子

七尾市 松高 秀峰

高槻市 川 島 諷云児

腹臣に噛まれた傷が治らない
反省をしろと遮断機下りてくる

老妻と余生の彩を探す旅

秒針に今日も自由を奪われる

ぬるま湯が好きで出世に遠くいる

有田市 松 井 かなめ

去年今年病院通いの席きまり

入院で雑煮おせちで賄われ

欲しいなと見れば値札に六桁つき

千匹の鬼牙抜けてまたくなり

ライバルにばったり出合う蜜柑山

熊本市 永 田 俊 子

母またその母が生きている蕎粥

おでんの串抜いて信頼深くする

いろいろ言いたい事がある返り花

結局はひとりですよと言うこけし

御意のままの休耕田に立つ霜柱

茨木市 堀 良 江

待たされて待つていないと彼は言う

お隣の犬の過保護が気にかかる

人悲し罪にまた罪重ねけり

鼓動のようにセコンドが夜を刻む

水仙の香に染まりそう島に来て

倉吉市 野 中 御 前

ころころと毬が弾んだ鼻葉

気にいらぬ嫁がてきばき仕事する

九官鳥がニャアオニャアオと啼きだした

猫はびっくり両手で顔を洗いだし

おぼろ月姫が病んでる湖の底

境港市 細 木 歳 栄

過労死が経済大国支えてた

情報の浪 浪 浪におぼれかけ

人間が天へツバする排気ガス

自慢の孫だがだんだん朱に染まり

障子貼るたった一人の障子貼る

羽曳野市 田 中 透 太

振り向かぬ女は美人だと思っ

もう少し温めていたい返事

終章を書ける余白を取ってある

もう少し背筋伸ばせと影法師

吹雪く夜は人恋しさがつきまとい

富田林市 松 本 今日子

正月元旦相変りなく洗濯機

正月三日実家の母は健なりし

ひと息をつくと待ってた風邪の神

雪の中赤い鳥居がポーズする

人間不信真っ赤になったかにの爪

神戸市 山 口 美 穂

終章に来て青春の傷いとおしむ

わたしは私反芻しながら書く日記

鏡の中の私が疲れていると言う

ワープロの賀状に言いたいこと少し
ふるさとの言葉はやさしい風となる

河内長野市

井上喜醉

ライバルの意地が雪どけ縄のれん
握手するだけの笑顔を見破れず

倅せに酔うた女の洗髪

とぼけてる方が楽です風見鶏

素人に符丁は解けぬ河岸の朝

京都市

都倉求芽

元旦の鏡が決意を問い返す
輸入品やっぱり舶来という顔をする

夕映えに今日は歩道橋渡ろ

根や幹の言うこと聞かぬ枝もある

柳井市

弘津柳慶

仮面の裏で若さの爪を研いでいる
飲む話皆異議なしの時間外

運転の手真似で酒をこわって

娘等が来てガラクタみんな捨ててくれ

大田市

藤田軒太楼

高齢の苦楽を皺に老い並び
高飛車になっても折れる時考える

入知恵があつたと解る話しぶり

さしがねの出所愚妻と察しられ

仙台市

川村映輝

快眠快食快便やる気満々
平等に停年になる不公平等

先頭は好きではないが押し出され
興奮もなく人工受精する

松原市

小池しげお

根性を男結びにしておこう
落し穴タラップ外すのを忘れ

看護婦が美人で困る心電図

補聴器の中に残っている侮辱

諫早市

原田メイシユン

こだわりを流す酒とはなさけない
雑草でもいい孫よまっすぐ伸びてくれ

孫と娘が来て正月らしくする

腹立てて押してもチャイムあわてない

神戸市

仲どんたく

カレンダー疲れ果てたり百八つ

自画像がゆらゆらと行く初詣

潮引いて翁と媼の松の内

水新た成人式の娘をうつす

寝屋川市

柴田英千子

小豆がゆ老母とむかしの話する
刈り込んだ松は魅力がない美学

新しい郵便受けに来た手紙

もう一つの顔に華やぐ名をもらう

町田市

竹内紫鏑

留守電話にも財テクは布石打つ

朗読の勅語一節女声にて

免許得て夫人水すましの如し

後ろから伯父の賛美歌よどみなし

静岡市 渥美弧秀

風邪に寝て詩とFMの小半日
俱会一処高野の塔へ心急く

誌友山中竹野氏への献句

突然な柳友の計を知る寒椿
酒とろり饒舌な夜の故郷訛り

岡山市 井上柳五郎

気がかりを安堵に変える賀状来る

三ヶ日寝正月からなまけ癖

時効とせぬ妻の抜群記憶力

反省は年甲斐もなく二日酔い

岡山市 花田たけ志

拾いものの嫁さんですとは言わぬもの

拾いものの命で無欲に生きる幸

ひと月分帰省の家族飲んで去に

歳ですと逃げてても未練が顔に出る

岡山市 千原理瑛

真実も押し流される過疎寒し

絆ひとすじあなたとならばどこまでも

無口な夫に男らしさを垣間見る

又明日も来ますと亡師の墓前で

大阪市 中西兼治郎

祖父が居てうちの家族に風呂の順

イヤリングお顔の皺が承知せず

ジングルベル面を外した鬼が来る
つくしても盲導犬は求めない

大阪市 井上白峰

妻の愚痴酒の肴に聞いている

ストレスを溜めて待ってるゴーサイン

緊張が解けて話題が下を向く

銭単位まだ生きている円相場

大阪市 塩田新一郎

許せ釈迦色即是色俺は俺

天馬未だ馬屋を出でず雪しきり

脇役だから懐かしい顔残ってる

正月の空が昔を取り戻し

大阪市 北山悟郎

グネ得の味を覚えた横車

親孝行恐ろしいことに死語となる

度が過ぎる謙譲の美德嫌われる

十字架を弱者にだけ負わせられ

大阪市 渡部さと美

スニーカー遍路で巡る奈良の春

そのうちに遊べる端切れたんと貯め

六甲の猪と出会った初歩き

話にはすぐ乗ってくる淋しがり

島根県 堀江芳子

見つめれば般若の面もあたたかい

苛立ちをもどして悔いはかえらない

はめられて酌ぎ足す妻の弱さかも
てのひらの錠剤ころころ効いてくれ

島根県

石田 清泉

お手本に真のわたしが出てこない

能書家の手腕小指が主役です

七十の夢も明日を信じたし

お医者にも癌がとりつくとは不遜

島根県

松本 はるみ

あの話もう時効です春うらら

背信を雪割草はさりげなく

自信などないが二本の足がある

紫煙ゆらゆら不遜な事など考えて

島根県

藤原 鈴江

亡き人のウインクだろうか流れ星

第三の人生ひたすら炎えに炎え

孫抱けば子の温もりがよみがえる

欲ばって未だまだ生きてやるつもり

島根県

北川 民子

父さんに頼みを頼むタイミン

ピーポーを遠くに聞いて鉢いじり

噂にも丸に三角四角など

和服には和服に似あうカーネーション

寝屋川市

宮尾 あいき

乙な事病院で年賀書いてはる

エンゼルにも吸血鬼にもなるナース

旧師と病名同じとはうれしけれ
やせなはれ言う先生は肥ってはる

寝屋川市

平松 かすみ

胎教がよかった歌好き踊り好き

この孫もいつか私を邪魔にする

おしゃべりが原稿用紙もて余し

塩かげん母の手先はマジシャンで

西宮市

西口 いわゑ

絵の中の島へと舟をこいでいる

波の音と遠い記憶の中にいる

シャガールの絵からメロディー聞えてる

仲なおりケーキ程よい甘さなり

西宮市

瀬尾 六郎太

儂が先いや私が先と黄土談

年の瀬や忠臣蔵で日本人

一番星串ざしされて見えかくれ(金星食)

米ソトツブ東西南北さあ握手(マルタ会談)

出雲市

板垣 夢酔

青信号待つてる鴨の北帰行

失恋の傷の深さと汽車に乗る

肩の凝る話をきらうチョコレート

うまいもの食うと楽しい顔になる

出雲市

石倉 芙佐子

鈴つけて繋ぎとめたい春の駒

古里は母も木馬も雪の中

私がわたしに聞かす子守唄

虹の橋忘れることのむずかしさ

出雲市 小玉満江

救急車又かと誰も騒がない

赤ちゃんが笑い出す迄ナイナイパー

わがままな風が天からおりて来ぬ

一人っ子都会へ出せば虫がつき

唐津市 浜本義美

雪切れて冬陽が覗く老いの背な

肥前路に弥生の薔吉野ヶ里

美人にも才女にもない温か味

松とれて明日の生命へなすな摘む

唐津市 山口高明

カラオケを唄う貴男は吃らない

吸殻の紅が知ってる物語

母ひとり子ひとり嫁が家出した

嫁貰う俺より親父嬉しそう

唐津市 浜本ちよ

独楽の糸念入りに巻き既に勝ち

役人の清潔過ぎるはず消され

針の穴息子も仲々通らない

割算で小さく生きる老いの知恵

米子市 白根ふみ

初詣静かに老いる手を合わす

鬼瓦に初日をたと含ませる

初詣今朝の樹海の明るさよ

打つ手なし予感疑いたくもなり

米子市 光井玲子

平成のリズムに合わせ米を研ぐ

出おくれの駄馬にもゴール近づいた

木洩れ陽を味方ひっそり藪椿

ある予感喉からにわかき出す

米子市 川上より子

貞淑の箒にたまっているマグマ

台所のリズムは母の祈りかと

愁眉ひらいて聖母の絵にもどる

いちごを見ると白いお部屋がほしくなる

岸和田市 清野こう

寒梅が咲いてめぐりきし操子の忌

孫達と老いも貰ったお年玉

ゲートボール老い生き生きと冬帽子

三姉妹揃って心温め合い

岸和田市 古野ひで

あの人もこの人も無事賀状来る

逢うまでは溜息まじりに揺れている

もう意見するのはよそう娘も四十路

他人から見れば素敵なおばあちゃん

鳥取県 羽津川公乃

これも愛禁煙強いる妻でよし

母と子の乾盃ジュースでよく笑い

雪おんな赤い車に乗って来た
マンションの死角で土と共に生き

鳥取県

江原 とみお

新しい水呑み場には顔を出す
秒読みがくるまで鶴を折るつもり
地藏さんのあたりへ小猫捨ててくる
てきばきと物言いすぎる質屋さん

和歌山県

天 満 三千代

昭和平成まだまだ生きる米を磨ぐ
迷信も半分入れた守り札
凍て土へ夫婦の温い鍬がある
勝試合夫の雄弁まだつづく

和歌山市

木 本 朱 夏

逢いたさにふとんかぶって耐えている
忠告の中に嫉妬が見えかくれ
三連休うかうか猫と寝て過ごし
お年玉孫からもちろたおばあちゃん

和歌山市

青 枝 鉄 治

墓塚のぬくみに遠い日の記憶
忘れろと言われて慕情なおつとり
ニセ医者に入れ歯の方が永く持ち
左遷地も良し名水で炊く茶がゆ

和歌山市

田 中 輝 子

聞き上手になって上げましょ酒の席
吹っ切って男に冬の道があり

チャンネル回すどこも紀子様ブームなり
裸木の闘志わたしも見習おう

玉野市 小 谷 仙 山

北が好き南が好きと夫婦もめ
日の丸の過去ばかり責められる
七草粥妻がそろそろ疲れだす
何時までも子供でないと子に言われ

姫路市 大 原 葉 香

沈む陽にききたい事がたとある
ポイ捨ての罪は自販機にだつてある
順を待ついらいら余計歯が痛む
ひと時の栄華に浸る貸衣裳

松山市 谷

真 風
信夫改め

だあまつておろう言いたい人が言う
もう一人の自分と話す夜の独り
独り暮らしは安気なもんじゃええもんじゃ
追いはぎよとぬがせて病衣かえてくれ

貝塚市 行 天 千 代

家族連れ帰った後の広さかな
また一步西へ近づく雑煮もち
やせ馬もしつかりがんばれ当り年
群衆の向うにノッポの孫が居る

羽曳野市 佐 野 白 水

万博に生れ花博のコンパニオン
金婚を迎える今朝の屠蘇の味

新年と金婚の祝詞併せ受け

十日戎へ初デートしてから五十年

羽咋市

三宅ろ亭

露のとうもう約束をして摘ままれる

証書筒乙女の笑い野辺は春

新選良脚とられそう赤じゅうたん

七人の敵に優しいのも混じり

堺市

柿花紀美女

ゲート待つやさしい馬の目が燃える

結論が出ぬまま新春きてしまい

文明の脆さダイヤまた乱れ

その先は聞えてこない老いの耳

広島県

田村新造

でかい夢胸に始発の船に乗る

自分史に雪のシベリア書き残す

うぐいすの聞える墓地を買っておく

芳潤を舌でころがす試飲会

守口市

野呂右近

三猿を守って平和老いの日々

保険皆満期に余命まだ続く

思わずもした勇み足悔ゆる老い

新春に老兵なりにする決意

高知市

北川竹萌

喜寿越えて子にお年玉貰うとは

起居二夜絆固めて新たなり

朝刊を広げめがねを先ず拭いて
足先から温もる寢床に雨の音

弘前市

真喜内 實

北窓の影が美人になって寄る

受験戦争家族みんなが兵隊さん

お詫ならさわやかな顔してなはれ

にぎにぎのまだ多過ぎる老いの坂

十和田市

斉藤 島

手の垢がついて私の辞書になる

りんご一個置いて落ち着く鏡餅

教え子のりんごの方が旨い出来

雪吊りの小枝も肩が凝るだろう

藤井寺市

福元 みのる

一日の抜け殻並ぶ終電車

酔う程に楷行草と崩れ出す

驚馬駄馬と言うな馬にも格がある

日本も海と言う壁払わねば

守口市

結城 君子

初詣地球を憂う絵馬がない

しきたりをカット正月もの足らず

番組が一致してから仲直り

救急で入院出来たと細い声

茨木市

井上 森生

おふくろも達者軒先につるし柿

聞くまいぞ悲観論者の来世紀

ベルリンの壁のかけらに付く值札
新成人二十一世紀への弓矢

竹原市 信本 博子

愛されて路地のタンポポ黄金色
おもちゃ箱愛のかけらも寄せ集め
ステンドグラス大らかな愛包み込む
パイプオルガン眠った愛を揺り起こす

海南市 三宅 保州

辞められぬから辞めたいと繰り返す
休めないだけの無遅刻無欠勤
手拍子に乗って離れた命綱
有名な医者にかかって死にました

福岡県 横地 正好

焼付けてまたもブレてる顔に会う
ワープロを学ばず賀状筆まめに
老馬なり妻の手綱のままに行く
愛の鞭児童に打てば週刊誌

八尾市 山下 美津留

地動説古い頭が受け付けず
丸木橋地元の人と猿の道
汚職組味方にも居て戦えず
歌舞伎座は忠臣蔵で年を越す

富田林市 片岡 智恵子

追い越しの喜び知らぬ馬でいる
ひのえ午優しい叔母がひとり逝く

和解案吞んで希望の立泳ぎ
心配は要らぬと言って気をもたせ

高槻市 竹内 花代子

元旦に茶柱が立つそれだけに
一泊の妹へ譲るチャンネル権
かにしゃばも共に疲れる夜なべの灯
お節料理下げて訪ねる鍋料理

豊中市 吉田 あずき

花よりも花器に驚く華道展
女ひとり未だに白馬は来ませぬか
独り居に日脚の伸びがやさしかり
つぶやきがどよめきとなり渦となる

豊中市 辻川 慶子

平成二年選挙花博即位の礼
七草のあたりで主婦の気がゆるむ
年ごとに回り舞台が早くなり
福笹を買って運とすれ違ふ

川西市 松本 ただし

毒草を薬にして来た人の知恵
究極はゲテモノ素材にするグルメ
四捨五入して悠々の露天風呂
体調も三寒四温の杖の足

和泉市 西岡 洛醉

善ひとつ拾って今日の空高し
還暦の無職よ媚はもう売れぬ

流行を着て一日をスターなり

倉吉市 渡辺 菩句

人間のいのちと背丈のびて行く

トラックの窓あいて「ほんやりするな」

踏んづけられた空箱の絶叫

岸和田市 芳地 狸村

吉兆へ美人揃いの福娘

福餅に名士が並ぶお立ち台

場違いの大阪弁で笑わせる

箕面市 椎江 清芳

初夢の続き枕を裏返す

オークション名画一声円が買う

ご先祖に詫びて少年島を出る

黒石市 相馬 一花

ゆっくりと歩けばゆっくり影法師

昨日見た鏡に今日は叱られる

年始客いるだけ孫を連れて来る

弘前市 小寺 花峯

新年を迎えた口が一級酒

五歳児のキックと本気で喧嘩する

潤滑油が濁り始めた四十坂

大阪市 大野 武太

花博で逢う約束の旧友がいる

老兵に満期除隊のない戦さ

脱サラの小っちゃな窓から見る浮世

睨み鯛自分の位置が気に食わぬ

ジョンウエインも終いには癌に降参し

ちよっとした誤解が生んだハブニング

大阪市 松永 すすむ

黒パンを見ただけシベリア寒かった

白魚の小さい黒の目がかなし

お見合で付き添う女が好きになる

大阪市 神保 拓生

高熱のうわごと秘密ばれました

額縁の方が値打ちの色紙の絵

尾や鰭をつけて拡がる団地風

大阪市 富岡 温子

今日の事今日やりとげて高枕

半分は叱られている電話口

愛してるッ一度も言わず六十路暮れ

大阪市 榊本 落児

良妻を持った男の気鬱症

宝籤買った妻に内証です

初風呂に麻雀疲れの顔が浮き

出雲市 小白金 房子

万札もしかと腹巻く老いの旅

農をつぐ息子に嬉しい嫁ばなし

梅匂う馬頭観音おわす庭

和歌山市 山田 高夫

風の向き変える女の肩バット

空白の日々も太陽出て沈む

家を継ぐさだめを背負う蝸牛

和歌山県 寺田 裕美

繫がれた桜を散らす駄馬の夢

物忘れ自分に責任など持てぬ

決心のさめないうちに杭を打つ

和歌山県 岩崎 瑞穂

適当に言葉を濁す気乗り薄

藪蚊との戦いとなるアユ解禁

駅長の欠伸見てきた山の駅

和歌山県 西口 忠雄

外地から戻った話が大きすぎ

種あかししてはならない向う傷

あの娘あんなに喋っていいかしら

鳥取県 土橋 はるお

ドキドキしない薬逆に効いてきた

乾杯の発声だけで座を外す

監督が一人夢中になっている

倉吉市 淡路 ゆり子

懸命に生きた歳月ありがとう

小刻みに揺れて方向逆を向く

袷力バーわたしの匂い嗅いで寝る

鳥取県 津村 八重子

一線に立てず背後で鈴を振る

ときめきの胸は大事にしまつとく

見舞客あばらの骨にふれて見ず

鳥取県 乾 喜与志

淋しゆうないナムアミダブと言っている

孤独だなタバコにさえも用がない

生野菜好きですねんとツマも食う

鳥取県 さえき やえ

時雨るるや干し大根をなでてみる

風花といっしょに届く母の餅

幸せはけんかの出来る人という

鳥取県 田村 きみ子

盃を受け極楽の顔で飲む

父方の絆たどると女好き

わたくしを狙う狼もういない

鳥取市 小谷 美っ千

ハイレグに男の目線狂わされ

人恋し流れる雲は雪となり

姑をははと慕えるまでのながい道

鳥取県 谷 次男

使い捨て雑巾の顔わが亭主

字名を銀座にしたい過疎の村

本心は息子よ並で十分だ

豊中市 上田 登志実

悔い多し土地がこんなに騰るとは

言わないが妻は空気のようなもの
駅裏におでん屋があり質屋あり

豊中市

一瀬 福一

忍びよる老化を守る舞扇
軽口の中で拾った刺激剤
解散をすれば影武者うろたえる

岡山県

直原 七面山

敬語に戸惑い
香典は妻が決め
善人の顔で座し

岡山県

岩道 博友

気が付いた落し穴あり歳を読む
寒行がもう来る頃と開けて待つ
竹刀振る視野に掟の輪が一つ

岡山県

山本 玉恵

袴を脱ぐ部屋が有る母が在る
仮面一つ脱げば素直な瞳が笑う
アドリブで馬を合わせて旅つづく

岡山県

池田 半仙

正直者出世の遅いお国柄
つべこべと文句並べる出し惜しみ
ロボットは順序をしかと心得る

米子市

金山 夕子

初釜の松風浴びて祈る春
月を見て跳ねる兎が帰らない

高い塀ちよつと覗いて見たくなる

竹原市

石原 淑子

ためらっていた養虫のある決意
七草粥古代ロマンにひたります
代名詞この頃増えて来た二人

出雲市

竹治 ちかし

今日を終え布団一つの幸愛す
良い夢を見よう妻子の良い寝息
今日も又石屋は石と話す

倉敷市

田辺 灸六

美しく老いたし賀状派手に書き
むつかしく考えないで米を研ぐ
ライバルと長生きごっこ馬の年

富田林市

新開 千代女

競争が少なくていい丙午
もうすんだ慌てなさんな結果待ち
無の世界もつれた糸を解きほぐす

河内長野市

植村 喜代

寒々と今夜の月の美しさ
厄年が済んで体を軽くする
寂しさはいつか出て行く娘が二人

広島県

藤解 静風

六十五妻を愛するほかはない
馬の顔どこかで逢うた貌である
走らない馬を一頭飼っている

退院をして祝い箸持ち悩む

守口市 森川 まさお

ガード下曳けばつめたい老女の手
なつかしい売り声通る十二月

吹田市 茂見 よ志子

優雅には遠く切り干し煮る匂い

春帽子買いに妹を見立て役

思いよう取りよで風の向き変わり

寝屋川市 堀江 光子

墨の香の中を筆とる去年今年

新年の先ずかしこまる電話口

来年もありますと妻息長し

出雲市 河原 恵美子

春風は洒落た文句言って去る

昭和の種から平成の芽が出た

うそのない青空見てるえりばくろ

吹田市 栗谷 春子

小梅ひとつかりカリ言わせああ元旦

結構なことです子供を見上げてる

入院はうちだけじゃないこの食器

静岡市 安本 晃 授

他人への気配りばかり母の指

意地通す裏の本音を見てしまふ

善悪を消して山梔子白く咲く

西宮市 秋元 てる

坂越えて又も聞える「まあだだよ」

残業の遠い所で鍋が煮え

配役に不足言わないのは自信

十和田市 阿部 進

雰囲気ががらりとかえた酒の味

均等法明治の母になじめない

世の中は阿呆になれば良く見える

伊丹市 山崎 君子

福寿草つばみのままで年迎う

宝くじ今年も夢を買っただけ

留守番に電話のベルのタイミング

米子市 小村 てい子

他人さまには山ほど言おうほめ言葉

母逝って山茶花が散る今朝の雪

受話器から届いた春にお辞儀する

奈良市 米田 恭 昌

騙されている病人の思いやり

父ちゃんが人柱となる入学期

ぎんなんの香り漂う宝山寺

大阪市 宮下 とし

念仏をきいている様に馬静か

陽が昇る拝む心にあるゆとり

岡山県 松本 元 江

朝の鏡が今日の子診してくれる

この道がどこまで続く雲走る

自選集

八木千代

遙かなるものを目指している跡
二の矢三の矢まだ正体はわからない
どの指も使って冬の菜を洗う
夢の残りどわたくしのいのちの残り
残りの刑へきつちりごはん食べておく

藤村女

この女の伴せらしい文字が跳ね
紅椿ポトリ亡母の忌が近い
枯野にも春待つ花の芽吹きそめ
陽炎を追うて枯野に挑む鎌
麦を踏む老女流れる雲を追ひ

小出智子

大阪の子らにも雪が降りました
振り袖をいまだたんだことがない
それとこれとは別に男が好きになる
大阪を案内をする法善寺
奈落までおちたら道も開けよう

大矢十郎

閨兵へ並ぶグリーンの瞳鼻だち
受験子を起こすエゴかも親心
嫉妬心捨てれば広い世の中よ
嫁姑ほめ過ぎ合うたなれの果て
子はみんな巣立てば孫が来て荒れる

小林由多香

芸のない男がぬるい湯を好む
うれしさが眠ると逃げてしまいう
勝つ馬に育てる癖を知りつくす
飴玉をなめ禁煙と根くらべ
カラオケが始まるまでは隅にいた

遠山可住

かけひきの模範解答集がある
送りバントそんな人生だってある
裏刷りのない折り込みに用がある
逢いたくてコーヒー好きになりました
一巡のラストをもらう母の風邪

正本 水客

天駟ける天馬のつばき風を持つ
いなないて自分の道を確かめる
馬市の栄えた広場に春がくる
馬返し峠をこえた風がくる
馬頭観音街道の朝晴れてくる

黒川 紫香

亡き友の母を尋ねた港町
ゆるやかな坂で鶯鳴いてくれ
駐在へコーヒ届ける霜の朝
よく動く金魚になったぬくい春
太陽が出迎え月と共に去ぬ

山内 静水

組板の鯉にはなかなか昔なら
極楽の切符忘れて引き返す
麻酔から覚めて確かに生きている
寄書きも一枚二枚だいぶん元気になりました
寝返りのコツも覚えて癒えてくる

月原 宵明

諸焼ける匂い焚火を遠ざかる
傷心と得意が並ぶおでんの灯
凧あげる父少年の瞳に戻る
淋しさは糸が切れない糸切歯
高野にも川柳語る俱会一処

藤井 明朗

幸せな余生親友と句を語る
馬跳ねる景気の手綱しかともち
親友の訃報川柳しめりがち
川柳の追風うれしいブラン練る
初句会よろこびみんないい顔で

野村 太茂津

檄飛ばすちよつと肩肘張り過ぎか
言外の意味が通じぬ夜の渴き
ウォッカが効いてツンドラ彷徨す
手綱ゆるめてゆらりゆらりと参らんか
秣たつぷり鞍も外して養おう

久家代 仕男

いつの日か袋叩きにあう日本
焚火から弾き出された銀杏の実
薄氷を踏むから靴も泥を穿く
飄々としたおっさんでもっている
金婚のいまは炭火の温かさ

児島 与呂志

春近し未練を連れた音を聞く
回り道して気まぐれな笑い声
羨まれる誤算噂に負けて居る
人の輪に小さい愛の線を画く
真直ぐな心を持つと騙される

河内天笑

本田恵二朗

ネクタイを締めたらあんだ田舎もん
名前忘れてセンセイと呼んでおく
弱りはじめて嫁さんを可愛がり
農薬の野菜虫なら食べません
恙なきかな騙し合い庇い合い

野田素身郎

金井文秋

寒波きて駆け込み乗車増えてくる
点滴へひそひそ話気にかかる
正月客帰って寒い部屋となる
後遺症の指が痺れる寒に入り
定年退職古い部品が痛みだし

波多野五楽庵

水粉千翁

りんご剥く涙さとられまいとする
設計図一期の家にしてせまし
竹割ったような男に騙される
ペレストロイカ家長の椅子が脆くなり
涙もろくて涙もろくて人ざらい

有働芳仙

阿萬萬的

嫁が来て三角波が立ち始め
嘘のない石焼芋の皮を剥く
鍵叩く指に孫の手伸びてくる
同窓会ニックネームが生きてくる
雪解けのハミングを聞く露の臺

高野山群雄仲良く眠らせる
竹馬で転んだ古傷比べ合い
析る目へ観音さまは目を細め
追いつがる心へドラの音が刺さり
ほどほどの倅で佳し夫婦船
大昔の知恵に驚く考古学
自分より上と思いたい美人
満つるは欠ける初めとみくじ戒める
日々粗食太りはせぬが痩せもせぬ
足を鍛える歩幅は少し大きめに
耳掃除して考える大晦日
につぼんの素顔で拝む初日の出
また歳を忘れて拝む初日の出
元旦の天声人語からも揺れ
あれこれと胸算用になる今年
年甲斐もないファイトを仔犬に見上げられ
ちんばひいてる鳩追いかけて餌やる子
プレセントですとベレーを孫がくれ
千支のことがつい口に出る齢になり
自分でも阿呆らしいほど物忘れ

平成も二年となつて書き馴れる
平和平和犬にも美容室がある
のらくろに死なれ大正淋しがり

亡妻十七年忌

妻の忌へ今や涙も出なくなり
南無阿弥陀ふとん被つて南無阿弥陀

工藤甲吉
岩本雀踊子

老妻に女が残る鏡かけ
てのひらのくぼみに落とす味加減
首筋の冷たい話きいている
人妻のひざのまるさに狂いたい
あれっから無口になつて妻の乱

西田柳宏子

涙涸れましたと寡婦の東ね髪
警策がまた現実へ呼び戻す
手を切つてからの未練が太り出す
電算機検算してる五つ玉
五センチの雪に京阪神の摩痺

橘高薫風

春一番吹き抜け陵のみしずか
茫々五十年醜の御楯は呆け立つ
死にぞこない生きぞこないへ白い雨

柴又帝釈天

これはこれは寅さん陽気草だんご

翠柳吟社創立15周年記念川柳大会

第一部 前夜祭と郡上踊り

とき 7月21日(土) 午後6時
ところ 郡上八幡観光センター

第二部 記念川柳大会

とき 7月22日(日) 午前10時開場
ところ 郡上八幡観光センター大ホール

講演 東野大八先生
兼題

「漁」 青木惜春選
「文」 青木晴風選
「互」 野口初枝選
「信」 加藤翠谷選
「葉」 石森騎久夫選
「光」 寺尾俊平選
「集」 関水華選
「交」 橘高薫風選
「名」 渡辺蓮夫選
事前投句 兼題のうち「漁」のみ、ハガキで
7月10日までに左記へ

岐阜県郡上郡八幡町常盤町 野口 互葉
川柳塔社主催 大会参加ツアー

◎ 7月21日午前9時、大阪出発で全行程貸切り
観光バスによるツアーを行います。
大会・前夜祭参加費とも約45,000円

稲吉佳晶

東野 大八

「稲吉佳晶女史の生れ育ったのは、岡崎五

万石葵の紋所の城下町。昭和二十二年半ば、

偶然がとりもつ縁で、時の東海新聞で、岡崎

に川柳作家佳晶あるを知る。私（杉山多慶朗）

が佳晶居を訪問したのは、句会開催の夜であ

った。雅号からして私は男性とばかり思っ

いたので、口紅を赤くさせた女性とは、初対

面から驚かされたのである。

句会後種々雑談の中に、川柳とは何かをも

知らぬ同好の士の集いであることを聞き、私

なりの川柳談義にその夜を過ごしたのである。

彼女は生花、茶道、三味線と趣味多彩で、近

所でも評判の才女であり、一見、千手観音の

ような知性に満ち、夫君善太郎氏の経営する

「岡崎衛生社」のよき伴侶であることも知り、

尊敬と感動を覚えたものである。

その後、時を経て川柳研究社川上三太郎師

を紹介したが、彼女の天性の文才と統率力の

非凡さは、三太郎門下生として師の心を動か

し、爾来、その指導よろしきを得て、川柳の

芽は岡崎に芽吹き、着実に同好の輪を広げて

いく基盤づくりが出来上りつつあった。

佳晶女史の川柳は力強く、三太郎師を背景

に燃えに燃えたのである。昭和二十六年師の

題字による『川柳おかざき』誌が創刊され、

歳月はめぐること五年、その五周年の秋の川

柳大会を機に師の名句「子供は風の子天の子

地の子」の句碑を佳晶邸の庭に建立したので

ある。

この快挙は、三太郎師を限りなく喜ばせ、

幹事、誌友の羨望の的となったのである。更に全国同好の士に呼びかけて、合同句集『五万石の風』発刊へと踏みきるに至った。

一方、家業後継者要次氏の成長は、川柳作家はま子さんと婚姻成り、媒約人は川研幹事梶川一譚氏によって目出たく相結ばれたのである。その当時の人間直情を吐露する二人の句

母でないノックに本へ眼を戻し 要次

エプロンの白さも妻と呼ばれる日 はま子

家業を夫君と後継者にまかせた佳晶女史の

活躍が更に広がっていったのである。多彩な

趣味を生かした老人ホームの慰問、川柳講話、

川柳指導、柳誌編集、各地大会への参加等に、

佳晶女史の全精力は集中された。

昭和四十一年七月その功績が認められ、岡

崎市文化功労賞を受賞、時を同じくして三太

郎師も紫綬褒章受章。師に勝る佳晶女史の喜

びの笑顔がいまも脳裏を離れない。」（稲吉佳

晶遺句集『五万石』杉山多慶朗）

稲吉佳晶、本名八重子。明治40年10月13日

愛知県岡崎市長。岡崎高女卒業後、「常盤塾」という洋裁塾を開いたが、この塾名をと

って「川柳おかざき」誌上に「常盤塾句語」と題するエッセイを連載していた。

「東海川柳クラブから川上三太郎師の影響を受けて、岡崎川柳研究社になったとき、それまでの遊びの会から本格的な川柳の会になったことで、主張の違う人たちが脱落していたために、句会の出席者がいなくなった。佳晶師と私（會田規世兄）だけのふたりではどうにもならないし、さりとて流会にはたかない。主張を異にして去った人たちへの意地もあって、佳晶師は四人の姉妹を電話で呼びつけて、句会の形をつくった。この日を起点として岡崎の川柳が、新しい芽をのばすことになったのは、全く佳晶師の意地のおかげであつた。

当時、岡崎市外の滝（常盤村）出身の佳晶師は、常盤塾と名付けて、自宅の二階で洋裁を指導していた。名古屋の常盤洋裁学校出身というから、この時代の女性としてはハイカラな人であつた。明日着て行きたいと思つたら型紙もあてがわずに裁断した布で、一夜で縫い上げてしまふという早業であつた。後年、常盤塾佳品と名乗った由来もおわかり頂けると思ふ。

『川柳おかざき』を発行してからは、『川柳おかざき』を自分の名刺とした。知人・友人に限らず、バス、電車の中で言葉を交した

人たちに『川柳おかざき』を差し上げてしまふのである。佳晶師の意識にはいつも宣伝があつたし、自分が川柳を書いていることの自負と、少しばかり自慢でもあつた。それは日本で広島森脇幽香里さんと二人だけの「女性主幹」とつねに話題になった時代でもあつたからである（『五万石』會田規世兄）

佳品は昭和42年4月29日胆石病のため急逝した。享年59歳。法名彰徳院佳品日重大姉。還暦を迎えたらわたしの句集を出したい—とかねがねもらしていた故人の意志を想い、

『稻吉佳品遺句集・五万石』が柳友はじめ、知友身内の人たちの手で発刊されたのは、佳品去つて十八年になる昭和60年6月であつた。この遺句集は、A5判二百八十頁、赤い布張り装幀で佳品のカラー刷り色紙に遺句五百句、三太郎を囲む写真数葉がついた豪華版。

『川柳おかざき』発刊に際しての三太郎師の一文は、痛いところをチクリと刺す反面、愛情のこもる励まし声は、親が子に論している情景を垣間見た思いであつた。

この言葉をうけて燎原の火の如く、佳品女史の川柳熱は燃えさかつて行つた。県内は勿論、新潟・長野・北海道・関東・京阪神へも足を伸ばして交友をひろめ、おかざきをPR

寄稿も誌友も増えていった。また、傘下各支部の面倒見もよく、横の連絡もうまくとれていた。毎年四月、恒例ともなつていて岡崎城と並んで眺望もよい巽岡での桜まつり川柳大会も遠隔地からの出席もあり、盛大になつていた。（中略）うつすらと口紅も引かれた博多人形にも似た佳品さんの顔は、責任と義務を果たした全うした安堵感からか、昇天をしたあんな美しい顔を今まで見たこともなかつた（『五万石』序文・長谷川鮮山）

「微熱また風呂の疲れと信じたし 佳品 第三回目の、許された昼風呂で大喜び。汗びつしよりで帰つたので、一寸また風邪かと思つたらその通り八度二分、早速クロマイのお世話になつた。この熱が果して？だとおとしやるとすると

顧問様方から済まぬ日の見舞い 皆さんから一日も早く快くなって下さいよとほげまして頂いた。市長様と『川柳おかざき』は、長い長い顧問としてお世話になつている。（『五万石』収録常盤塾句語「闘病日記」

佳品・四二・四・八付一絶筆）

それからを夢に見る日の手術台 佳品

五月号はたして軽い手術の日

★次回は「長野文庫」

柳籠裏三篇研究 (二丁、三丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博

岩田秀行・紀内恒久・西原 亮

大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

32 気のわるひものあふのけにねた女

八木―このままでよかう。「気のわるい」は、淫情を催す、ほどの意味である。上向きに寝ている女。

七久保―気のわるいを淫情を催して妙な気分になると解さずに、率直に気をわるくする、「感情を害する」ととり、女にエエイままよ、

如何ともなれ、料理してくれと仰向けになられると、男としては花を手折る風情もなく、興味半減したと解しているが。

西原―七久保説に賛。女は「うつむけ」にこそ風情あり。「気のわるひもの」は、気分

悪いものの意。

青木―「気のわるさ」には、①感情をそこなう義、②淫情を催すの義、の両義があるとすれば、主題句は、①の後に②の感情も湧いた、即ち、つつしみを忘れた行儀の悪い女に対して嫌らしい感情を受けたとともに、性的な妙な感情も走ったと。

佐藤―礎稿に賛。やはり性交体位の連想があつての表現と見るべきで、「気のわるさ」が言い得て妙である。

罪になるとはしらぬ寝すがた 武一八五

鈴木―礎稿に賛。

岡田―江戸時代の「気が悪い」は、用例から

して、どうしても青木氏の②説の方が強い。
①説の場合はきわめて少ないように思います。用例を集めて検討する必要あり。

33 おへた所コ子にみつかりコまりはて

八木―「おへた」は勃起した。「みつかり」は疑問。単にみつかり、の意で良いとすれば解は簡単。

大野―賛。「みつかり」は「目にかかり」「目にとまり」の意であろうが、不明。

佐藤―場所・時など考える必要なしと思う。太く遅しく、その上、びくびく動くのが幼児には珍しくもあり面白いので、玩具にでもするつもりなのであろう。

おかしさひる寝のへのこうき出し 二二五

ばかな事おへたを猫がねらつて 二二五

鈴木―賛。

岡田―「見つかり」は見つけられる意でいいと思うが、なお、これも用例を拾い、検討あるべし。

34 待ぶせをしてぶつちめるけちな恋

八木―ただ口説いたのでは駄目なので、物陰

に隠れて、女の来るのを待ち構えて、ウムを言わせず、半ば腕力づくでやつつけてしまふ。誠に恋と言えるかどうかわからぬが、ケチな恋だ。

西原 贊 現在でも地方に奪い婚がある由。

佐藤 贊 下女などの恋であらう。合意の出会いではあるが、強姦まがいの行動がいかにも下司な恋なのである。

暗がりをこそりこそりと下女がいる

下女が恋みなはりこみのうへで出来

鈴木 贊

岡田 同

35 腎虚したので来にくがる里の母

八木 腎虚は性交過多によるフラフラ病。新
婚家庭であらうが、婿が腎虚と聞いては、嫁
の里の母としては来にくからうというものだ。

なぜ腎虚させたかという嫁をにち

七久保 贊

腎虚した女房いたって無事に見へ

天五宝 3

では、さぞかし里の親も来にくからう。
鈴木 贊
岡田 同

三 丁

36 して居たそふで二階からどふれ也

七久保 眞つ昼間の情交を、「まあ昼間からおさかん事……」などと話しながら覗き見をしている図であらう。

岩田 〓「どつれ」あるいは「どつれい」は「物申う」に対する返事であらう。したがって、「物申う」に対して「どつれ」と返事したという句であらう。

西原 礎稿の「情交」まではよいが、覗きはない。岩田さんの説に賛する。

鈴木 贊

岡田 〓むかしは夜中に人を訪ねるのはまれ、したがって昼取りです。

37 初午にやうく風が式ツ三ツ

七久保 〓この年はどういう訳か天候不順で、風をあげる正月ごろはまるで無風状態で適さず、初午の頃になり、やつと風揚げの出来る

風が吹いて来た。それを「やうやう」という言葉でうまく表現している。

初午に風を上げるはすねたやつ 七 13

岩田 〓礎稿の引用句や、

喧嘩した奴初午に風を上げ 七 22

等の類句からして、これも同様に、喧嘩をして相手にされない子供が風を上げる図と解しています。

佐藤 〓岩田説に賛。二月の初めなら、正月気分もまだ抜けず、私などもこの時分、風揚げをしていた記憶がある。しかも、初午は子供のお祭りである。さすがに風を揚げてる連中もまれであらう。すねたやつか仲間外れか、空に見える風は辛うじて二つ三つ……の意に解している。

八木 〓「ひねくれた子」と解していました。

鈴木 〓岩田さんのお説のとおりと思う。

岡田 〓初午の日は、江戸のどこにもあった稲荷へ子供らは集まり、太鼓をたたいたりして興する。だから風揚げをする子はきわめてまれである。

丸山弓削平氏

弓削川柳社の創始者
丸山弓削平氏は去る
1月21日死去、84歳。久米南町を「日本一の川柳の町」とすることを宣言し、実行した。



黒川紫香選

摂津市 木下道子

赤んぼの写真が無沙汰詫びて来る

連休はここだここだと初暦

八つ橋にソフトとハードおますのえ

坂道で追い抜く余力ためてある

見下ろせばこんなにゆるい坂なのに

徳島市 宮武まつ女

古希過ぎて日増しに炎える命綱

我がままが見えぬわたしの裾さばき

悟ってはみたが背筋に残る悔い

すばらしいバラが気になる雨の午後

長崎の鐘の響きを解く旅情

静岡市 沢田きん

姉が逝くたった一人になる弱さ

空っ風内緒ばなしが通り抜け

若返る記事を何度も読み返す

意地一つ通せば女嫌われる

ちぎれ雲身の上話したくなる

今治市 野村京子

咲き切つて花の一端が地に還る

病葉のあすの命は風任せ

女泣かせた話などして酔っている

湯気はさみ親子の絆たしかめる

外は雪女の午後は詩人めく

八尾市 高杉千歩

誕生歓喜 平成もいて春のどか

晩婚の城に女王様の椅子

無垢の嬰兒と指切りしてきた内緒ごと

未来図に夢は確かに万華鏡

平成元年きれいな小銭は使わずに

尼崎市 児玉歌子

失明の便り手にする掘り炬燵

境遇が似ていて米が借りやすい

あちこちと戎神社の梯子する

反応の無い街にいて爪を研ぐ
御仏のやさしい眉に洗われる

熊本市 宇野昭代

降りしきる雪に耐えてる沈丁花

老いてなお血湧く日のあり生きる幸

学歴が人に差別をつけたがり

危ないところだったと医者におどかさ

春一番 娘の縁談を連れて来た

名古屋市 藤井高子

春はうららに花のささやき花の笑み

白足袋が主役舞台の静と動

なぐさめの嘘がやさしいので困る

鳴る骨がラスト・ダンスの邪魔をする

お茶ばかり替えて閑居もお気の毒

佐賀県 寺中三枝子

順風逆風気にせず雑魚の群れにいる

四季問わず眠い眠いと若い姑

一線を引く三角にならぬよう

愚痴きいてあげるサツパリしたでしょう

いつも笑顔でいよう私の姫鏡

和歌山市 内田結実

口説いたのも訣ればなしも女から

吊り橋でふたりは落ちてみたくなる

ふんざりがつくまで遠いまわりみち

珍しいお客さまで選挙です

高野まで坂は樹氷の真つ盛り

富田林市 池森子

ガキ大将に憧れている塾通い

鬼のいる方角に好きな人がいる

高額の保険掛けてる細い首

ホラ吹いた男自分にけつまずき

集まると遊ぶ話から決まり

広島市 流奈美子

遠景に亡母のきれいな湖がある

昼間から満員ファミリーレストラン

真実の情け受話器から溢れ

一喜一憂まだ人生のと真中

友達の寝息聞いている旅の宿

京都市 松川芳子

聞く耳を持てば何でもない話

一抹の淋しさそれは母の老い

喫茶店ムードでコーヒー飲んでます

虫干しのつもりで日記読み返す

手も口もフル回転の美容師さん

出雲市 金森知恵子

素直になろう素直になろう髪を梳く

手を添える優しさを見た自動ドア

もう少し重みが欲しい羽根ぶとん

効率のキッチン出番のないお鍋

孫の描くメハナはどっか温かい

出雲市 金村 青湖

鈍行の旅が似合いの日本海
白足袋の白さが生きる新春の部屋
ふるさとに海あり海の子が育ち
中流の見栄が時々無駄を買い
高級車丘の団地へ帰る主婦

堺市 桜沢 あかり

みの虫の無聊を風が聞き咎め
毒舌のお笑い計算されている
折鶴がとぶ感動の一シーン
日持ちするお供えばかりとはわびし
通り雨見知らぬ町に灯がともる

鳥取県 石谷 美恵子

ミステリー聞く豪邸が値切られる
喪服脱ぎ真の涙がこみ上げる
隠された長所気長に掘り起こす
父として逃げ腰などは見せられぬ
お守りを持ってスリルに身構える

熊本県 大川 幸子

色んな事女の暦は秘めている
省略しても通じ合う夫婦
鉢合わせ世間はせまいものです
信号待ち誰かが恋を打ち明ける
住家増え店舗がふえて都会めく

尼崎市 尾宮 弘治
ハネムーン土産に姑のバッグ買う

腹立ちは私の不覚髪洗う
帰港日が遅れてばかりカレンダー
無学でも学士を叱る母の指
似顔絵の鼻が高うて恥ずかしい

大阪市 上田 柳影

オクターブ下げて明日へ酒の量
鈍行で漫画読んでる無為無策
雑音の中で不義理を考える
寄りつかぬ娘を案ずる雪しきり
正月の風まで湯のまちのんびりと

久留米市 鶴久 百万両

春の聖廟 風のガイドに背を押され
割り勘で飲める仲間はいいもんだ
プラトニックラブ日記の中に閉じこめる
絵草紙の序章に亡父の亡母のこと
いいじいちゃんになれたら花見でもゆこう

尼崎市 森安 夢之助

泥の中きれいな花が咲いている
野良犬を可愛がっている辻地蔵
雪を除け郵便屋さん待っている
世渡りが上手な人のリズムカル
日溜りへ集まって来る孫の守り

尼崎市 野瀬 昌子

昨年の御礼も言って神詣り
三ヶ日ただ眠りたい山の神
初売りのチラシ集めて見てるだけ

良き目覚め今日一日の飯を焚く
理想には遠いがやさしい子等がいる

吹田市 井上照子

指揮棒の先に余韻の影みえる

逢うてみて話題豊富がひきつける

毒舌でたたかれ素直に従えぬ

白黒の石を並べて妻の留守

口紅を拭いて深い眠りの床に入る

尼崎市 的場十四郎

もう一度たしかめたくて投げる石

投げ縄がとどく辺りで待っている

とも白髪ゆとりのなかで春を待つ

飾るのは娘が嫁ぐときにする

鳥取県 山根八重

切り札につかう笑顔をもっている

長電話 愚痴を聞こうと思わない

緑野とちぎれた雲がよく遊ぶ

初孫とリズム合わせている平和

枚方市 中山おさむ

急がない旅へ踏み出す万歩計

ネクタイを外し本音の旅へ出る

双六の上りへ老妻が待っている

星影のワルツが揺れてふっ切れる

大阪市 今西静子

落葉踏む足の裏側あたたかい

秒針の律儀をにくむ渋滞日

嘘ひとつついて枕が落着かず
天命を待ってるひとの日向ぼこ

和歌山市 森茜

早朝のエレベーターは冷ややかだ

三ヶ日 電話の向うお出かけで

焼芋や通り捨て猫なき止みぬ

さかさまの切手忙しそうに来る

鳥取県 西浦小鹿

喜ばず職人芸を持っている

悪友を資産のなかに入れました

仕事に夢中遊びに夢中夢がある

大の字になって男をさらけ出す

酒田市 永澤裕子

花の野で一期一会の連れが出来

限界をまだよじ登る寺の坂

神様は見るか見ないか掛ける絵馬

仲よしも時に謀叛の矢を放ち

姫路市 松本一郎

妻と居るただそれだけの安堵感

国宝の城のある町孫と住む

杉木立風あり高野亡母憶う

左遷地で運命線を確認する

米子市 足立由美子

思い出が日毎きれいになっていく

変わりなく梅につぼみがきた平和

さっそうと歩くつもり春の靴

雑草も春の準備はもう出来た

米子市

新

正子

遠慮しながら隣の犬を叱ります

うれしいと電話でこだま聞くのです

簡単に煮えてる母のいる厨房

枯野まで花の便りが配られる

京都市

渡

辺

圭

坊

年甲斐も無く度を過ごす春の美酒

世の噂馬耳東風と聞き流す

花博が浪花に向ける世界の目

金余り新築の家軒並みに

吹田市

山

本

希久子

手強いと思わせておく初手の訝え

いつか見た景色に出会う港の絵

子を背なに爪先あがりまだ続く

農政は米のつぶやき聞き洩らし

和歌山市

堀

畑

靖

子

あつさりとしすぎ物足りない賀状

あかぎれの指の多さを知ったレジ

くすり屋に恐ろしいほどある薬

憑きものが落ちて眠りが深くなる

兵庫県

森

脇

和

子

空白へまあるく好きと書いて待ち

反対も賛成も無い野の仏

花好きの友を泣かせる喪に出合う

各駅停車 未練が残る話好き

一言が言えず波風おさまらず

ちっぱけな幸せ孫を抱かされる

正月をロスで迎えた娘のパート

後輩に先を越されていた誤算

東子市

小

山

悠

泉

定年を伺っている冬の月

聞き流すことにも馴れた海の蒼

白毫の光が障子輝やかす

一票の重さ教えた消費税

今治市

渡

邊

伊

津志

エンジン全開いつか自爆となる疲れ

筋書きにない駆引きにうろたえる

山晴れて与作の唄がよく響く

或る日ふと妻も定年考える

藤井寺市

高

田

美

代子

夕焼けのうしろ覗いて見たくなる

いい笑顔だから甘えてみたくなる

世辞言わぬ鏡と住んで老い静か

バイキングより松花堂の齢になり

羽曳野市

芦

田

絢

子

石投げて川ひと幅の中ほどに

採点は仲人がしてくれている

川底に転げ疲れた石がある

新婚の思い出ひとりだけで抱く

鳥取県

太

田

幸

枝

鳥取県 黒田くに子

セールのかばんが疲れきっている
農政不信 農夫の背ながゆれている
許すより外なし孫が笑いかけ
ぼんやりとする間へリンゴうれちゃった

尼崎市 山田保蔵

あと一句トイレの中で考える
飼いだか爺さんヒマだと知っている
札束はいくら持っても重くない
集めてもまた集めても枯葉舞う

尼崎市 吉永伊三郎

木の白でしっかり腰のできた餅
看板に倒産したと書いてない
半分は私のものと妻寝言
待ちくたびれてお月さん今晩は

尼崎市 木下義嗣

裏通り情けの厚い人が住み
やりきれぬ氣持を投げる寒の月
豪邸に住めば集まる人も無く
喜寿祝い老妻の指輪が目にしみる

尼崎市 住谷石舟

無縁墓 老母が添えた春の花
鯉に石投げ少年は自閉症
鼻ぺチャが手間どっているコンパクト
鳩の群れよけてくの字に人流れ

尼崎市 鈴木良征

見本とは似ても似つかぬカレー来る
神の森裸にしてまでゴルフする
神様に無理な願いの絵馬を吊る
年末にたと貰って来たくすり

貝塚市 池田寿美子

エレベーター仲よく止まるもどかしさ
覚えていてくれただけでもうれしい日
ときめきのひと筆のこす箸袋
青空も松も映して池めぐる(養翠園にて)

大阪狭山市 桜井莊次

目の毒へすぐに手を出すクレジット
口先をきれいに拭いた隠し事
母の字にゆさぶられてる里心
登りつめるといつか見えなくなる自分

島根県 高野律子

汗吸うた軍手の語る重い銭
恋文はみんな焼き捨て安堵する
合掌の胸は子のこと孫のこと
あえぎつつ重荷を負うた旅をゆく

鳥取市 松本伊都子

湯けむりの駿馬ひづめに春を乗せ
約束を果す命が一つある
眠らせてあげたいそっと灯り消す
あの星に届く涙は惜しまない

寝屋川市 宮崎 菜月

青青と季語を刻んで七草粥

春光につつましき生活覗かれる

甘根食む遠きふる里遠き日よ

おのおのに話相手がある夜汽車

堺市 宮本 かりん

掘ごたつ永雨の窓でさし向かい

ごきげんな顔に変わって出るのれん

つき合せてみれば案外三枚目

針運ぶ母の影絵が残る部屋

河内長野市 大西 文次

飲んで寝ていただけというバスの旅

花の種播いて毎日にらめっこ

立読みの客で繁昌する本屋

忘れ物駅長室でかしこまる

岐阜市 渡辺 杏村

おみくじに春は近いと書いてある

秘書たちの目が血走ってくる選挙

新時代成人式に子を抱いて

フルムーン富士が見たくて居続ける

尼崎市 新井 泰子

夢だけで済ませぬつもりをつめを研ぐ

夫や子と夢分かち合う初日の出

愛らしいホワイトタイガー牙をむく

コンペイ糖タイムトラベルしてみよう

熊本市 北川 一進

子の遊び秘密の場所が一つあり

塗り加減さすが輪島と言う名器

余白には一句をそえて出す便り

先ず動くことからハビリすすめられ

熊本県 高野 宵草

ハネムーン土産はカタカナばかり呉れ

美容院で教わって来た塩加減

探し物妻が探せばすぐにある

散髪が済んだに客がまだ喋り

長岡京市 山田 葉子

帰るところあるから旅に出てしまふ

練り上げた粉の固さに妥協する

世話女房定年なんてありません

せかせかと追われるように子を育て

大阪市 亀井 円女

終る日の素適な笑いをとって置く

あるときは救いとなった亡母の呆け

野仏のほほえみに見た亡母の顔

変りもんでえびもメロンも嫌いです

尼崎市 中澤 向西

物価高ゆとりだんだん減ってくる

米寿祝い赤い座布団温かい

裏町を通ると温い風が吹く

せせらぎに投げた小石も冬の音

佐賀市 江口 万亀子

新しい絵馬に弾んだまんが文字
首まげた医者のおかげで早合点
ヨコ文字の表示わからぬ化粧品
愚夫愚妻魚の名前もよう知らず

高槻市 芦田 静江
狒犬がゆれてどんどの火が炎ゆる
風鐸の重み梅一輪を開かせる

島根県 渡部 好栄

豊作の匂いを鳥もしつており
落ちてゆく夕日を鴉が追いかける
飼主に似たのか早寝で早起きで
平凡な暮し見つめる古時計

西宮市 菊池 トミエ
北向のお地藏さんに正ちゃん帽
名水のブームに乗った過疎の村

広島市 中村 要

自分でない自分がいつも居る鏡
句読点うって引き際いさぎよし
白足袋が華やいで見える七周忌
脇役に叱られながら老いの旅

鳥取市 西村 黙光
冬の虹心の憂さをふっ飛ばす
立ち呑み屋の親父朝から酔っ払い

出雲市 原 章峰

黄水仙今年も笑顔で咲きました
句読点勝手に打って転げそう
国引きの浜で絵になるのは阿国
畳屋が畳干してる笑い声

和歌山市 山口 三千子
友達が結んでくれた赤い糸
妻や子に優しくなってきた怖さ

京都市 小林 英子

雨の音枕にしみる夜の鬱
マネキンが亡妻に似ているウインドー
春を呼ぶ淡雪しやれた詩人かも
戻れない橋と知ってるお六櫛

守口市 森川 春子
入院のつれづれナースの順位づけ
外来で入院仲間と花が咲き

兵庫県 東浦 砥代
あんな山のマンションに手が届かない
逢いに行く帯を選んでやつと寝る

客去ってきびしい父に又戻る

家計簿は赤へそくりはチャンと貯め

尼崎市

佐野六浦

紙テープ音も一緒にはがされる

アトムもう宇宙へ行つて帰らない

今日も又何処かへ落ちた流れ星

尼崎市

明壁敏之

二日酔い妻に気合いをかけられる

投げ入れる賽銭箱を覗きこみ

薬にも毒にもならん妻でよい

旭川市

朝倉大柏

埋もれ火を男の風が来て揺する

横道へ外れて気楽になる歩幅

成功の火花故郷へ来て揚げる

熊本県

岩切康子

念入れて白髪を隠す髪を梳く

白菜漬柚子の香りが暖い

愛犬は客を色別鳴き分ける

兵庫県

酒井靖子

お父さん父娘の句座をもう一度

やりくりの疲れは言わず米を研ぐ

客に來た母はこまこま注意する

八尾市

片上英一

ゆく年くる年唯しんと雪が降る

裏町にじつと待つてる招き猫

ライスカレーまだ売っている自由軒

寝屋川市

豊福路子

いさかいも笑い袋もある家庭

ぞんざいな言葉を亡母に叱られる

醜態を晒せばひとがよく見える

枚方市

山崎彩子

一病が待合室で友つくり

型通り賑わい二人の寒に入る

年毎に人恋う賀状多くなり

砂川市

大橋政良

のめり込む人情がある裏どおり

小説のような出合いがないものか

私腹を肥やす虫をおなかに飼っている

寝屋川市

井上すみれ

年賀状師の川柳はとっておく

そわそわを郵便受けは知っている

調子合わせ過ぎて帰りは腹が立ち

豊中市

村上とく子

お元気でよかった年賀状の友

タオル巻き指名手配を見る銭湯

そこ迄は言わないでおくピエロです

枚方市

森本節子

うれしきは冬至のあとの日の長さ

途中下車買物袋は手に余り

ドッグフードの年玉貰ううちの犬

香川県 松村 迷観子

デッサンに男の線が弱すぎる

眼が醒めて一人ぼっちの月と会い

人の子を叱る潮時だつてある

静岡市 中西 雅

夕陽落ち窓一杯に赤い富士

明日は旅カバン開け閉め外は雨

一二の三段から跳べたと赤い頬

和歌山市 田中 みね

孤独も又自由と思う独り旅

千三つのお話ふんふん聞いてやり

未来図へゆめを多彩にまだ五十路

鳥取県 伊吹 富恵

以心伝心便りを書けば便りくる

熟年の恋です消火器等利かぬ

俱会一処小さな汽車を乗りついで

大阪市 川原 章久

愚痴一つ言わぬ十指に笑われて

一鉢のポインセチアに夢の跡

耳鳴りが遠く近くで老いの曲

和歌山県 森 三枝子

ちよっぴりの伴せ下さい福袋

妻の座も時には崖に立たされる

突然の客へ飛び出す市場籠

豊中市 三宅 つえ子

昭和史のつづるひばりの声をきく

人事異動終る嬉しい悲劇かも

車椅子温い手の握手に馴れる

岡山県 土居 ひでの

燃えている命大事に寒椿

ウインドの草月流は空想家

抱きしめて退院の児の軽うなり

静岡市 浅子 まつゑ

黒玉の飴なつかしい小さき頃

家中を灯して夜の留守居番

枝払い春を待つ日の年の暮れ

兵庫県 奥野 テル

おにぎりの味に山家の詩がある

間の抜けた言葉で姑は和を守り

民謡も民謡も軒の深い里

鳥取県 石尾 かつ乃

夢に見たマンションなのに落ち着かぬ

人間の温さを知らぬ自動ドア

ぼんやりと座れば肩を借るトンボ

相生市 中塚 礎石

ベースアップ老いの反旗を下ろさせる

再婚へ拍手を送る子が一人

南天の実を欲しそうな鳥の首

岡山市 中嶋 千恵子

嘘まこと春をうらなう風に逢う

帰る子の背追いかける母の声
あいさつの敬語に舌がもつれ出し

川西市 野村 静雄

寒いから妻が帽子を買ってくれ
栄光の過去が言わせている自信

こんどいつくるのと孫が聞いてくれ

岡山市 森下 正子

母の独楽水子の方へ傾いて

程々にやくのも女の隠し味
ねじ捲いてまだまだ動く古女房

新潟県 高野 不二

値札見て絵を見て感心して帰る

一升持つて来て半分は呑む男
おにぎりの三角にぎったわけなし

熊本県 増田 一乗

立ち暗み死への恐怖を垣間見る

涙腺がゆるみ放しも老いの坂
血縁はこうも楽しい電話口

弘前市 村田 善保

陶匠の皿は御馳走知らぬ皿

壺一つ飾り小さな悦に居る
涙腺をゆるめる鍵が星にある

島根県 加本 義良

煩惱を潜り抜けたる雑煮餅
追憶の酒は演歌によく馴染む

通信簿の事は言わないお年玉

鳥取県 乾 隆風

西風に疑心暗鬼をつれ去られ
縄のれん潜る旦那になりたくて
じげおこし人があつまる種を播く

箕面市 中嶋 民子

立ち話そこは私の通る道

終電車ケーキの箱が忘れられ
算盤を弾いてけじめに目を瞑る

熊本県 立道 善太郎

米がなく寺の小僧になりました(昭和二年)
合わす掌の中に私の道がある

昨日よりまだあたたかい明日がある

岡山市 杉本 伊久栄

市場籠孫のおハツも頼まれる
針に糸通らぬままに針は錆び

まだ捨てたものでは無いと薄化精

鳥取県 西原 艶子

吸い殻へ男の影がまだ残り

水鳥も一対ずつで泳いでる
齢に似ず恋へブレイキかららない

広島県 森川 抜智

金魚草亡母が好きだから植える
音楽と花が好きです生きてます
飲んでゐる時が自分の世界です(酒三昧)

米子市 小西五十鈴

ジョギングの仲間に会おう登山橋

飲むよりも味付けにする酒を買う

欠けるのはどちらが先か夫婦箸

大阪市 平井露芳

いい夢を見たのにジャンボ当たらない

板のない蒲鉾どうにも落ちつけず

ああひばりひばりで年が明け

羽曳野市 福田満洲子

時代劇 疱瘡の痕が気にかかる

ご近所に配る千両育てあげ

初出費 家族そろって風邪薬

鳥取県 西川和子

険しい道を選び覚悟は出来てます

喪があけてほんとの笑い戻って来

あぜ道を行けばつくしに出くわす

鳥取県 山内芳江

責められて責めて互いにボロを出す

握手した票が予想を下回る

せわしさにまぎれて婚期迄逃す

鳥根県 菅田かつ子

寝しずまる町しんと雪が降る

綿ぼうし被り可憐な赤南天

去ってゆく日の寒さ身にしみる

北九州市 香月直平

溜まるのが嫌で毎日落葉かく

逃げ道を無くし大きくなるけんか

歳末や相も変らぬ募金箱

八尾市 向井しづ子

平戸には初春を舞う鳶美しい

オランダ村平和寿ぐ文化の灯

大観望中途であきらめ老夫婦

奈良市 米田芳子

一人旅してみたいよな今朝の空

おみかんも小粒を選ぶお方です

ガン検査他人の結果も熱が入り

松江市 松浦登志子

一度だけ言わせて下さい愛してる

雷が山陰の冬つれてくる

ふぐ鍋を命をかけて食べに行く

岡山県 江口有一朗

奥様の魅力チョッピリある気品

仕事ならぬジムで大汗かいて来る

本来の自分に生きよと庭の松

姫路市 谷清柳

朝が来る昨日と同じ朝が来る

開発の森に小鳥のひとり言

開けゴマ入ってみよか未知の園

寝屋川市 河合時弘

才女からたよりの届く春の幸

限界を知つてゐる亀のマイペース
雪を追う若さへ天も味方する

唐津市 山口 ふさ子

友の訃に寄せて

生前と変らぬ顔にまだ温み
睡る眼の滲む泪を拭いてやり
今生の訣れとなりし曳山囃子

堺市 山本 半 銭

猫の為に涙を流す家族なり
病人の孤独へ術もなく寡黙
病院の廊下辛抱強いこと

青森県 福士 ト キ

青春を語り明かした寮の窓
一本の藁にもすがる我が余生
シクラメン私の命知ってますか

静岡市 宇佐美 寿 美

梅を活け床の間からも初春匂う
旅プランはやる心が空を翔ぶ
移り気が女心の奥に住む

島根県 松本 聖 子

残業の足音冴える北斗星
急かすから小石にさえもけつまずき
書き初めは決意をこめて太く書き

岡山県 伏見 すみれ

凡人ですぐに妥協をしてしまい

都合上遠回りするワケがあり
客用のみかんは別にとつて置き

今治市 渡辺 南 奉

ひと一人殺し清張茶を入れる
絶好調 波高いほど燃えてくる
極楽に一番近い仏間の灯

岡山県 後安 ふさえ

初対面話してみれば縁つづき
風船でもらった種で咲く友情
やきもちもこんがり焼けば味が出る

東大阪府 岡田 寿美礼

はし柿の簾なつかし大和路に
初雪に想いふる里湯の町を
山茶花の紅艶めいて初春の雪

岡山県 牧野 秀 香

遠い友電話で年賀状に変え
お雑煮が好きだった亡夫偲びつつ
夕闇に洩れる明りに笑い声

静岡市 永倉 柳 華

子の手術母は心臓止まりそう
回復のきざし笑顔が洩れてくる
さわやかな汗は余生の万歩計

尼崎市 新井 朋 子

甘えたい時に私は一人です
夢食べて育った人の瞳です

イロイロとあつた気になる大晦日

出雲市

岸

桂子

ドングリの一つノツポで仲間割れ

花ばさみ花の命を無造作に

家中をひっくり返す孫軍団

静岡市

小木久子

いたわりのつもりがきつい声になり

賛成の手はまわり見てから上げる

肝心な話はせずに帰って来

鳥取県

中藤俊子

招待をされた葉書に金が必要

コッペパン食べた昔を子と語る

うたた寝へことさら響く鳩時計

青森県

波ただお

住み心地このあばらやが天下一

一幅の画のよう岩木山の初姿

玄関に靴が揃って誕生日

豊中市

滝北博史

針供養妻のうしろで手を合わす

図書館はカレイライズがうまかった

気の強い女に長いラブレター

堺市

井上たかし

諍うて互いに詫げる電話口

年金に合った歩幅のフルムーン

倦怠期外食先で出合う妻

出発点いたわる妻が旗を振る

佐賀市 古川一徳

まっすぐに歩いて仏の慈悲に触れ

片道は歩こう月が丸いから

兵庫県

倉垣恵美

昔むかしの同じ話を聞く身にも

孫が去にやれやれわたしの寝正月

越冬の虫たたき出す大掃除

羽曳野市

麻野幽玄

釣り上げた魚でさえも比較され

祈りとは他人を頼るにも似たり

人力車へ妻を乗せてる老いの旅

出雲市

森山健歩

見栄張ると警鐘は聞こえない

前向きに善処しますと茶を濁す

ザル碁ですなどと盤中殺される

唐津市

野田旭恒

泥水の白い花にも茎実る

飽きもせず飽かれもせずに喜寿の春

初夢を起こされ続き欲しい妻

鳥取市

美田旋風

冥土への土産話は急がない

金冠をはめて笑いのくせがつき

柏手を子らの分だけ打って来る

富田林市 山原昭水

母さんに育児聞いている長電話

鶯が今年は仲間連れてきた

酔ったとき七つぼたんを歌ってる

宇部市 中村三良

許すことに慣れて覚えたコップ酒

笑い袋を何度も開けて見る不安

妥協癖つけて背中が丸うなり

大阪市 家村高雄

町内の役二つ三つ煩さ型

婿殿に申し分ないけど泣き上戸

知らぬ間に入会してた後援会

鳥取市 萩原美雪

若葉マークの妻にハラハラさせられる

恋をするたびに変身する女

停年が準備もないままくるあせり

静岡市 大石たき

稼いでもお金の足の早いこと

何時来てもとんぼ帰りの次男坊

老友も持ちつ持たれつ助け合い

岸和田市 三輪通彦

信頼があるので羽目はずせない

山茶花がひとり気を吐く冬の庭

年賀状だんだん減ってくる余生

愛媛県 八塚三五島

転んでからのあなたがぐつと美しい
希望ある限りはいのち燃え尽す
腹を痛めた子だと信じた勇み足

竹原市 古田比呂子

小豆煮るあまったお餅小正月

いらだちのままに掃除機かける音

子をおいてちよつと青春映画みる

広島市 名和喜一郎

葬儀屋の手際のよさにみとれてる

家計簿に晩酌二合の規定あり

うちの娘もついに彼氏をつれてきた

藤井寺市 菊地繁男

なみなみと注いでやろう祝い酒

高々と子をさし上げて月の道

客席へ楽屋の目刺し匂うてくる

泉佐野市 真崎浪速子

寝転んで明日へ抱く夢でかくなる

横綱が勝てぬ相手のいる不思議

孤児の眼が祖国のネオンに酔っている

鳴門市 八木芳水

病める身に情けの真偽よく見える

捨て台詞もうジョークでは通らない

ひょうきんな落ちで笑いを呼ぶ落語

紀伊田辺市 染道佳明

へりコプターで降りて来たのは政治家や

ふる里の橋をどきどきして渡る
花だんごの串がぎょうさん溜まります

寝屋川市 北岡 波留吉

ベルリンも近くなったとコーヒ飲む

交番の茶が温かった俄雪

無人駅で客を見送る雪だるま

鳥取市 森山 豊子

思い出の中の片恋美しい

月冴えてぴーんと空気凍てており

河内長野市 岡崎 実

花活けて和服が似合うしとやかさ

血統書ない犬留守をよく守る

鳥取市 岩原 喬水

舞い込んだ一億円が狂わせた

モグラだけ減反の土守ってる

倉吉市 橋本 さつき

揺り籠の微笑星よりのメッセージ

冬仕度未練がましい葉を残す

唐津市 入江 喜久亭

友人の賀状に句あり詩があり

露天風呂独り眺める細雪

鳥取県 美浦 美代子

受けた毒矢をライバルそつと抜いてくれ

血のにじむ粘りで祝い酒となる

静岡市 増田 扶美

いつの間かお金が消える年の暮れ
大形の毛皮を選ぶ度胸よさ

島根県 福岡 博利

年賀状一筆そえて安らぎぬ

子のくれたワープロ手こずる古希の坂

茨木市 藤井 正雄

ジョギングは揃いのセーター夫婦仲

土産など気使いしない旅にする

米子市 小塩 智加恵

天ぷらを揚げてる時に鳴るチャイム

池の端怖い話を抱いている

岡山県 福原 悦子

雪の夜昔話で温め合い

ひたむきに生きて急がぬ子の巣立ち

十和田市 阿部 喜久江

退院日翔ばしてやった千羽鶴

程々の重石で漬物味を出し

鳥取市 池本 山人

ブルドーザーの窓に男の顔がある

竹トンボ隣の垣根こえてきた

藤井寺市 田中 孝子

鍵っ子の母子をつなぐ置き手紙

喉をうるおす山の清水は生きている

河内長野市 柏本 靖子

主婦の風邪家のリズムが狂いだす

なれぬ手で作る妻への卵酒

岡山県 富坂志重

猪口一杯のお屠蘇で地球が回り出し
嫁病んで老母が主役で皿洗う

岡山県 後安江山

宝くじもしやもしやと夢を買い

暮れ多忙その分ボーナス温い初春

出雲市 伊藤寿美

数の子も酒も女も好きな老夫

コーヒー店で会う約束を老夫とする

静岡市 三浦つね

単純に答えてくれる自動ドア

灰皿もぐんと大きな社長室

東大阪市 大平太一郎

孫からの賀状にやる気日々新た

腕白がお年玉には両手出す

島根県 川津幸夫

占いが気になり血圧また上り

小春日へ蠅いっ匹を持てあまし

箕面市 岩津岳夫

庭つきの家持たいと子の大志

宛名までワープロ増えた年賀状

鳥取県 中西智恵子

くすぶった噂汚職へ飛火する

箸置いて祝いの言葉へあらたまり

静岡市 青柳金吾
防衛費なんのかんのとこの平和
どん底の暮しの中で丸く生き

八戸市 島田昭治
テレビ機敷もつたいなくもただ独り
いつからかウソの勉強しています

泉佐野市 大工静子
険閉じ思い出辿る浄蓮の滝
夫逝きはこりをのせた将棋盤

吹田市 西岡豊
せっかちが輪から飛び出し走ってる
赤道を越えた便りを回し読み

鳥取県 木下芙葉
玄関で女房ボーナスひったくり
若き日は駄馬に似た汗かいた日も

芦屋市 根来敬
泥かぶるつもり朝の靴をはく
お静かに願いたいのがよくしゃべる

藤井寺市 中島志洋
公園を名園にする雪月花
寅さんの旅は終りの無いドラマ

神戸市 岩田信義
社内報トップは社長の指定席
京言葉真綿でくるんで針を刺す

大阪府 清水 水利 武
一刀両断斬られたのはエキストラ
狭い日本ゴルフ場が多過ぎる

八尾市 松本 芙美子

三ヶ日 体重計に蓋をする
くたびれて犬とゴロ寝の三ヶ日

静岡市 柳沢 たま

洗濯の出でない日には声をかけ
浄土でも聞こえてますか除夜の鐘

静岡市 西村 千代

風邪らしい誘い電話へ咳が来る
反抗期親の意見を背で聴く

岡山県 平田 たけよ

当る予感にいとむ宝くじ
和服着て正月らしくよそう老母

米子市 服部 朗子

年の瀬にリズムが崩れままならず
近況の甘えた声がしおらしい

富田林市 浦田 トシエ

初夢を神経痛が邪魔をする
若嫁のお料理並ぶお正月

藤井寺市 武部 敦子

新婚の夫婦ひやかす友が来る
仕合せな朝市のぞく宿浴衣

島根県 今川 三津江

山茶花に小鳥が遊ぶ枝がある
代参でお神酒頂く二人分

島根県 児玉 幸子

おしゃれ着も楽しく鏡にみてもらう
七草のおかゆ縁起を食べておこ

堺市 船越 重子

出初式カラー放水虹かくす
木枯しが手編みセーター急かせてる

米子市 門脇 晶子

一匹の金魚池からにげられぬ
うそつくと喉のどこかに傷がつく

高知市 山崎 一求

古い一人茅葺き屋根に雪積もる
東大を夢みて明るい塾の窓

八尾市 榎山 隆

大晦日どん兵衛かき込み旅支度
忘れたと言ってるうちはボケてない

大阪府 清水 絹子

三猿を使いわけする向い風
丸木橋夫婦になれば恐くない

米子市 中井 ゆき

遍路笠かむればやさしい顔になる
逃げだした小鳥を青い空が抱く

鳥取県 武田 照子

着せられた着物にごねる千歳飴

目の玉がとび出る様な金ひろう

唐津市 浜本 治幸

一年のドラマ始まる暦剥ぐ
叱るより涙ぐまれて戸が開く

岡山県 大石 あすなろ

おねだりの時は鼻声出してみろ

胎動に应えて母が語りかけ

奈良市 井上 大

影法師寄って政權を考える

年内無休でボーナス吸取られ

川西市 田中 喜俊

宅急便送って孫の声をまつ

年毎に意地を張り合う老夫婦

大阪市 堀口 欣一

ステッキを突いて出る日も三ヶ日

時は今銀行花の盛りなり

鳥取市 武田 帆雀

姉一人二世帯分の餅を掲ぐ

馬が合う理由は同じ脛の傷

豊中市 額田 明吉

蔵島神社に初詣して

大鳥居夜明けの干潮霧の中
くらやみの廻廊巡る祈願の群

鳥取県 近藤 秋星

告白をすれば不倫の恋になる

バレンタインデー来るな一番嫌いな日

大阪市 乾 哲静

密室の会議が時間食っている

悪友のいて人生が面白い

米子市 大田 みさと

小魚もみんなの期待背負ってる

馬の耳春のたよりを聞いたがり

流山市 神田 治

ひばりがかかっているから入る焼鳥屋

他人顔するのがうまい合せ柿

羽曳野市 徳山 みつこ

平和ですPL塔より見る円周

初詣神も疲れる欲深さ

吹田市 廣屋 利通

制服はあこがれた程甘くない

立前の筋で本音を聞いている

樺原市 西本 保夫

頭から不幸と決めてる相談欄

つきとめれば他人信じた方が負け

八尾市 橋本 信江

ストレスをお寺で解消リフレッシュ

我が娘より嫁を頼りにしています

静岡市 大村 正雄

アメリカの神に誓って結婚し

腕枕ドラマ終って目を覚まし

島根県 岩田三和
おいしいとほめられ今朝もお茶をつぐ
長老にされて乾杯はくの役

泉南市 坂根流水
ひい孫も廊下走って春あふれ
鐘の音に谷から雪も舞いあがり

寝屋川市 坂上高栄
除夜の鐘散歩の犬も立ちどまり
一皿のオデンに愚痴のコップ酒

富田林市 加藤みつえ
てつちりをうまいうまいと命がけ
元旦や亡夫の遺影と屠蘇酌みて

出雲市 高橋きよし
裕ちゃんの肝移島根を浮きたたせ
甦る古きしきたり出雲拳

鳥取県 今本早苗
人參の苦手な馬の貧血症
いくつ齡ふえてもお正月なごむ

唐津市 福島紀一
七草も今年は採らず買いますせ
消費税かかえたままに初日の出

島根県 山根峰雪
これでもかこれでもかと来るチラシ
日記帳のらん外に書いた三百句

大阪市 山北三三三
我が墓は地価高騰にあきらめる

幸せは金よと女の立話

鳥取市 中居武士
忘れぐせお年ですねと妻が言い
うぐいすも枝ぶりを見て止まるらし

静岡市 大神静枝
墨する掌に明日の夢を盛る倅せ
無関心を装っている独り芝居

松江市 原長三
宍道湖の平和を乱す鳩
足萎えてテレビでみてる初詣

八尾市 橋本龍典
お気楽に始めた趣味で棘にあう
十一士浮世の風は過去の過去

鳥根県 梅木梅園
木枯しに落葉すねてる無住寺
新年の計画わが家も多事多難

岡山県 三村美恵子
やれやれと思う静かになった部屋
よくしやべり羽もすっかり伸びて去に

鳥取県 前田一枝
午年に競走馬も勇み足
調子良い男泣かせる酒もある

倉敷市 斎藤進一
天皇制あってやっぱり落ち着くか
埋れたる昔は学者の種あかし

— 同人 吟

秀句鑑賞

— 前月号から

小出智子

お婆ちゃんも百人一首なら取れる

阿萬萬的

今の子供達にはお正月らしい遊びというのが無くなっているように思う。昔は家族や友達が集まって双六やカルタ取りなど、それがお正月の楽しみの一つであった。この句は久し振りに百人一首など囲んで生き生きとしているお婆さんの姿が表現されている。伝統のある遊びは引き継いでゆきたいものである。武蔵野の冬のカラスに馴染みなし

春城年代

都会の者にはカラスは馴染みの薄い野鳥ではあるが、たまに声を聞く事があってもあまり快く感じないものである。ましてやご家族の都合で馴染まぬ地で聞くカラスの声はさぞやと感じさせるものがある。「馴染みなし」と言い切っているところにわが家を恋うる気持がよく表現された。カラスは漢字の方がよいのではなからうか。

仁丹の大きさ僕の胆つ玉

谷垣史好

昨春秋以来体調を崩されて療養の身でおられる作者。病気をすると気弱になって何事にも消極的になってしまふ。そんな自身の現状を仁丹の粒に譬えられた。掌の仁丹を見詰める作者の姿を彷彿とさせる。

鯛 鯪 猫がこの頃笑い出す

川崎秋女

昔猫を飼ったのは鼠を取るためというのが多く、ベツトとして飼うにしても台所の隅に残り物など入れてもらつて汚らしく置かれてあるのを見掛けたものだ。それがこの頃ではどうだろう。猫用の缶詰もあつて、魚の骨などはもつてのほからしい。今にほんとに猫も笑いだすかもしれない。

ただ酒を飲んだ帰りが恐ろしい

相馬一花

ただ酒を飲んだのはさて、どんな顔振れだったのだろう。この句の場合は、ただ酒を飲んだ作者自身の心の有り様ではなからうか。気前よくなつて二次会で大散財をしてしまふ男の世界の話。

一票でお返しします消費税

高杉鬼遊

一月二十四日、国会は解散した。二月十八日は、選挙の投票日と決められた。揉みにもんだ消費税をこの作者は一票で仕返しをすると言う。消費税の句は多いが、こんなにはつ

きり意思表示した句も、この作者ならではのものだ。

遊ぶ場所ないけど塾はたんとある

河内天笑

かなり有名な大きな塾から、横町のちよつとした一部屋で教えているものまで、今やほとんど塾は増えつつある。それにしても思う存分に子供らしい遊びの出来る場所はあまりにも少ない。今の世相を端的に批判している。反省はあの世へ行つてからします

この句には、生きたいように生きている作者の姿がある。川柳塔の碑も建ったこととてあの世でまた聞かせてもらいましょう。

噂されるうちは認めてもらっている

矢野佳雲

良い噂にしろ、悪い噂にしろ、噂をされるうちは、存在があると言う。噂もされなくなつた時、本当の寂しさがやってくるのだらうか。

名園鑑賞きつちり座る位置がある

松川杜的

名園なればこそ、鑑賞する位置こそ大切。物静かな人のひとときが偲はれる。

鬼の霍乱などと治つたから言える

吉岡美房

人間は生身だということを、この頃実感する。それだけに共鳴させられる一句である。

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

西口 いわゑ

毒のある花を手折ってみたくなる

萩原 美雪

ただ美しいだけの花を、何の障害もなく手に入れるよりも、少々困難でも毒も針もある花の方に興味が湧いてきます。

母さんを囲んでむかしむかしなど

新正子

お母さんは昔話をされる時、弾んで目が輝やいてきます。面倒がらずに、こちらまで弾んで聞いてあげる。唯一の親孝行なのかも知れません。

あれからは人の痛みがよく判り

池森 子

人の痛みは、自分が遭遇してみないと本当のことは分かりません。朗かな彼女ですが、何かを突破されたことと思います。

迎え傘あなた待ってた訳じゃない

高杉 千歩

あなたを「旦那様」、待っていたのには間違

いありません。でもあなたに濡れられて風邪でも引かれたら大変、また、入院さわきなど起こされましたら、後の被害の方が甚大なのであります。

面つけてさらりと流す美辞麗句

藤井 高子

もうひとりの自分になれば、日頃使いたない言葉もすらりと出る。世渡りの上で、時には必要な氣もいたします。

肩ポンと叩く気易さ酒になる

森脇 和子

雑踏の中で肩を叩かれ、振り向けば久し振りの悪友、以心伝心、スナックか縄のれんに足は向いている。きつと楽しい酒が二人を包んでくれたことと思います。

一病が夫婦の絆深くする

松本 一郎

夫婦のうち、どちらかが病む。ましてや入院などされると、片方は必死で看病する。病氣されてみて、しみじみ共に健康でありたいといったわり合い、愛の絆も深くなります。

負けて勝つ妻が握っている手綱

東浦 砥代

負けて勝つ—難しいことです。でもご主人を天狗にさせてうまく事が運べば、操縦の仕甲斐があるというものです。

苦勞性なのか悩みの種つきず

山口 三千代

ほんとうにいろいろあります。対人関係、

家族、はたまた嫁いだ娘の事まで、悩みのあるうちはまだ若いのだと思おうとします。でも実際には、何もない方が楽でいいだろうな、と私も思います。

禁酒禁煙情けを知らぬ医者之声

山田 保蔵

酒好き、たばこ好きに、医者之声は地獄の声に聞こえます。でも天の声と承知の自身に對しても腹立たしく思っておられます。

お茶漬けの相伴をして夫婦です

吉田 比呂子

残業でおそく帰宅されたご主人へ、一人で食べられるよりも二人の方がおいしい、奥様の思いやりのほのぼのとしたものを感じます。

日記帳軽い戦が伏せてある

北山 好笑

夫婦の小さな諍い、自分との戦い、五七五との戦いもあることと思います。軽いと言われておられますが、本当はそうではないんです。戦はまだまだ続きます。

涙拭くハンカチ貸して手を貸さず

木村 貴代子

友達、もしくは子供さんかも知れません。泣く膝は貸しても、お座なりの言葉や手を貸したりしては、かえって本人のためにならない。ぐつと我慢をしておられる。友情もしくは母心だと思います。

見たほどに近くなかった虹の位置

朝倉 大柏

銀河系

河内天笑選

鳥取県 江原 とみお
風花がロマンチストにしてくれる
忍の字に似る婆ちゃん歩きぶり
隙だらけのおとこと隙のないおんな
和歌山市 桜井 千秀
どうしてもごまかせなんだのは自分
サイコロにわたしの道を聞くことも
米子市 八木 千代
雪降れば雪ひというになる私
生涯を月との契り守りぬく
鳥取県 新家 完司
神の子が生まれた夜に酔っぱらう
こいさんもどっか遠くに行かかった
米子市 林 荒介
テリトリーパーン屋はパンを焼いている
時雨して冬の音楽胃に溜まる
砂川市 大橋 政良
十指みな違う答を持っている
かつとなるポイントへ火をつけられる

宝塚市 丸山 よし津
障害者に生き方学ぶボランティア
一病のかげり文学好きにする
名古屋市長 藤井 高子
心臓の止まる話を耳打ちで
もみ手するたびに指紋が落ちこちる
尼崎市 春城 年代
十指みな放てば心軽くなる
老いしかな冬に負けるチャンチャンコ
和歌山市 内芝 登志代
はずされたレールへファイト湧いてくる
失敗談さらし爆笑させる酒
鳥取県 西浦 小鹿
ふり上げた拳に雪が降ってきた
ゆっくりと雪の重さをてのひらに
米子市 林 瑞枝
心ゆくまで痛みを語る海がある
第九聴く一年分の耳洗う
堺市 山本 半銭
ふかふかの布団に札を言うて寝る
沢田研二と漂っている午前二時
鳥取県 小谷 美つ千
誘惑に負けるわたしにもんげんだ
今年こそ君を夢中にさせてやる
鳥取県 土橋 はるお
肝臓に赤いランプが点きました
跳び起き易いセンベ布団に寝ています
和歌山市 堀端 三男
澄んだ瞳に会って告白してしまう

紳士面した意地悪がたんと居る
今治市 月原 宵明
厚い胸ついていくよりほかはない
好きな人の癖の一つがなつかしい
和歌山市 青枝 鉄治
野地蔵も耳栓が要る選挙戦
ぼろくそにけなしてくれる友がいる
豊中市 田中正坊
黙々と馬券が歩む冬の街
山動くボーランド チェコルーマニア
倉吉市 野中 御前
太鼓の音きくと先祖が目覚ます
酸性雨森のみどりが悶えだす
青森市 工藤 甲吉
雪しんしんすることもなく人想う
外は吹雪でコーヒを熱くする
川西市 野村 静雄
がみがもと妻に言わせる思いやり
大阪は照れくさそうな雪が降り
尼崎市 春城 武庫坊
冬濤の怒りあの島ソ連領
春近し木の芽音符をはじき出す
堺市 近藤 豊子
シクラメン鉢にあふれて冬おわる
UFOが来てさわがしい世紀末
弘前市 村田 善保
老骨のわたしに花の種を蒔く
言わないでよかった本音抱いて寝る

大坂市 亀井 円女
言い訳がうまくなったよ厭です

大坂市 榎本 落児
サングラスをはずせきれいな青空だ

八尾市 向井 しず子
大賛歌失恋中の声枯らす

十和田市 斉藤 島
ビフテキの皿で火傷をした小指

唐津市 久保 正敏
ポリグラフお前つべこべ言うでない

寝屋川市 堀江 光子
迷い道ひよいと陽の照る湖に出る

島根県 小砂 白汀
くすり漬けにされまい僕は生身だぞ

和泉市 中川 楓
あの人が居て温かい皿になる

大坂市 町田 達子
執念の水が飛ぶ飛ぶ法善寺

川西市 松本 ただし
大正の鱗がとれぬ深海魚

高槻市 川島 諷云児
職退いて兎を脱いだ訳でない

和歌山市 西山 幸
鼻の差を軽く考えてはならぬ

米子市 青戸 田鶴
流された時間は無駄と言ひ切れぬ

大坂市 今西 静子
百葉の長と長生きしています

堺市 宮本 かりん

一応は花を持たせてやりましょう

大坂市 神夏磯 典子
この二人きつと喧嘩をするだろう

姫路市 大原 葉香
片カナの花の名前はすぐ忘れ

羽曳野市 麻野 幽玄
そういう事にしときましようと思われ

黒石市 相馬 一花
銀行で「ハイ」と返事をする教師

名古屋 大林 曲ん手
五十肩何人にもしない癖がつき

守口市 森川 まさお
なん遍も計り犬小屋作る父

豊中市 江口 明光
病院もホテルも出来たお犬様

大坂市 富上 朝世
大霊界観てしばらくを善人に

出雲市 板垣 夢酔
混浴は腰の曲つた人ばかり

和歌山市 山川 克子
只今のトーンが違ふから慌て

箕面市 椎江 清芳
万歳を何度も叫びたい別れ

西条市 片上 明水
地下足袋が足に合うので故里が好き

京都市 松川 杜的
初恋の人には逢わぬ方がよい

豊中市 三宅 つえ子
ノートを開いたら白い蝶が立つ

米子市 沢田 千春
小春日に淋しい心竿に干す

尼崎市 奥山 美智子
華やかな過去に浸つて出遅れる

西宮市 奥田 みつ子
無人島を探しに紙の舟を折る

和歌山市 松原 寿子
モナリザの微笑をかりてさようなら

和歌山市 森 茜
恋人に会つてきたには険がある

米子市 政岡 日枝子
父の座を春陽の方へむけておく

有田市 松井 かなめ
透きとおる空へ策なく病んでいる

米子市 新正 子
木枯らしにぬるめの燭がもの足りぬ

西宮市 西口 いわゑ
友達がおいしい言葉おいて去り

大坂市 稲本 凡子
いざという時の写真を選つてます

出雲市 吉岡 きみえ
パズルまだとけずに春の夢を追う

和歌山市 田中 輝子
癒えてきた傷で都会をふり向かぬ

米子市 小西 雄々
五百羅漢と一緒に折る花を買つ

堺市 桜沢 あかり
夫の目に止らぬほどに瘦せている

長男につける鎖は太い目に
高田 美代子

お望みとあらば手弱女演じよう
和歌山市 木本 朱夏

ポケットに一つ残したほめ言葉
出雲市 久谷 孝吉

バタバタと組んで畳んで葬式屋
堺市 井上 たかし

ご破算で願ってからの分がわるい
鳥取県 さえき やえ

かくし味みたいな知恵を出す女
箕面市 岩津 岳夫

あっさりと譲られ一瞬考える
寝屋川市 江口 度

ことごとと無病演じる豆を煮る
米子市 白根 ふみ

硝子器のひびが気になる世紀末
大阪市 塩田 新一郎

健康な駄馬で大空翔る夢
出雲市 竹治 ちかし

花占い想い出してはならぬ人
羽曳野市 田中 透太

真剣に六法全書読む詐欺師
海南市 三宅 保州

おでん炊く鍋で孤独が煮え詰まる
寝屋川市 坂上 高栄

顔ぶれを見てからルール決めている
西宮市 林 はつ絵

松原市 小池 しげお

蹟いた傷あとと見せて意見する
鳥取県 土橋 螢

目を開けて朝がくるのを待っている
奈良市 井上 大

人生は自分で選ぶ逆指名
広島市 名和 喜一郎

ガイドから原爆を聞くアメリカ人
河内長野市 岡崎 実

負け犬にわれを重ねる定年期
鳥取市 岩原 喬水

敬老の集い七十まだ若手
茨木市 堀 良江

金髪に皮ジャン中身日本人
伊丹市 樫谷 寿馬

へりコプター予定して出る冬の山
有田市 生馬 芙美子

過疎の村嫁入りの荷が大ニュース
大阪市 家村 高雄

終盤戦舌も上手に廻り出し
藤井寺市 武部 敦子

二度の職弾みをつけて坂上る
仙台市 川村 映輝

一億を使いこなせぬ過疎の村
今治市 越智 一水

出向がイヤなら辞表書けと言う
広島市 森川 抜智

サッチャーに負けじと土井が背のびする
大阪市 中西 兼治郎

玉砂利を踏む大臣に異議が出る

配達を泣かす新聞ひやくページ
羽曳野市 福田 満洲

年金を孫と一緒に待っている
八戸市 島田 昭治

募金箱きれいな声の箱に入れ
大阪市 大福 留吉

この村の坪値聞き出すサンクラス
橋本市 岸本 木魚

菓子買うて済まない声で消費税
岡山県 小林 妻子

わたくしの闇に明りをくれた賞
河内長野市 植村 喜代

父の血が流れて啖阿切る娘
米子市 金山 夕子

悪人になれず小っちゃな店に生き
大阪市 大野 武太

ラグビーのほとばしる血が欲しくなる
鳥取市 西尾 呼風

なまじつか知って背筋が寒くなる
芦屋市 根来 敬

オシメした孫がおしゃまな口を出す
岸和田市 島崎 富志子

一言が胸きジーンと来たと
倉吉市 奥谷 弘朗

挨拶のこの人にある別の顔
寝屋川市 岸野 あやめ

タイムマシンの中で亡夫とデートする
岡山県 松本 元江

静岡市 渥美 弧 秀
詩があり音楽があり柳友がいる

兵庫県 倉垣 恵美
表札も旧家を背負い苦しそ

和歌山市 福本 英子
見栄を着たミンクを喰う暖冬異変

岸和田市 古野 ひで
古希まじかまだあれこれと夢を抱き

和泉市 西岡 洛 醉
極楽も地獄もいらぬ今が好き

藤井寺市 中島 志津
途中から小声になった娘の電話

名古屋市 越村 枯梢
イニシャルが同んなじだっただけの縁

今治市 矢野 佳雲
しかめ面していて運を呼べますか

竹原市 信本 博子
独り旅風のささやき聞きながら

米子市 小林 てい子
シクラメン咲いて私はまだ素顔

八尾市 片上 英一
冬を越す君は淋しい熱帯魚

寝屋川市 平松 かすみ
大木に何時かは育つ縄電車

相生市 中塚 礎石
女一人だまされ続け多情なり

茨木市 藤井 正雄
上野駅東北弁の交差点

岸和田市

三輪 通彦

病名を隠す嘘なら許されよ

鳥取県 田村 きみ子
花の咲く視界にボチを埋めてやり

西宮市 瀬尾 六郎太
煙草やめた僕も僕もで居づらうて

和歌山市 山口 三千子
冷やかしのつもりが鴨にされました

大阪市 渡部 さと美
要らぬ頃になって銀行貸すという

岡山県 富坂 志重
胃カメラに札が言いたい安堵感

米子市 田中 亜弥
芸のない私こまめに生きている

和歌山市 古久保 和子
笑顔よしそんな嫁さんもうてこい

笠岡市 松本 忠三
融通のきかぬ夫と今日までも

寝屋川市 宮尾 あいき
良いナースうちの息子にや嫁がいる

神戸市 岩田 信義
結婚はいつだったのと指折る子

唐津市 山口 ふさ子
つい昨日来たよな初春がまた巡り

唐津市 浜本 義美
門松に留守を頼んでゆくいで湯

広島県 田村 新造
旗日には律義に旗を掲げて老い

羽曳野市 徳山 みつこ
厳かに葛城の山初茜

羽曳野市 吉川 寿美
今様に七草粥へ雪割草

北九州市 香月 直平
喪中とは知らぬ賀状もありがたし

唐津市 入江 喜久亭
帰省子の土産の地酒先に着き

唐津市 福島 紀一
とりたくない齢をだまってお受けする

弘前市 波多野 五楽庵
シナリオになかった雪の物凄さ

和歌山市 坂部 紀久子
詰めるだけ詰めて年越す冷蔵庫

米子市 中井 ゆき
どの絵馬の願いも聞いて梅の木よ

米子市 光井 玲子
お年玉孫はとつきにかしこまる

米子市 石垣 花子
寝た切りの正月だけとお目出度う

鳥取市 美田 旋風
ありったけ欲をかかえて初詣

豊中市 滝北 博史
カレンダー今年に記号変えてみる

大阪市 津守 柳伸
ハブニング年末年始くすり漬け

豊中市 辻川 慶子
棧橋のドラマ島から雪になる

枚方市 山崎 彩子
健気にも開かんとする冬のバラ

投句先 川柳塔社事務所へ(川柳塔用箋に3句以内)

荀香のむ

八木千代選

冬が降り立つ 少し方角まちがえて

富田林市 池

森子

方角をまちがえたのは、冬の方が作者なのか。両方ともに目測をあやまったせいだと思うことに。毎日のいとなみは、意識してみれば、のるかそるかの繰返し。その判断がほんの少しはずれても、冬は待ったなしに降りてきます。もつとも、この冬さん。すぐ退いてくれるかも。

水一杯あれば涙は飲み込める

大阪市 西出 楓楽

飲み込めると自分に思いこませるのも、生きるための知恵でしょう。その水が人の情けであっても、天と地によって醸された風物であっても、素直に受け入れて自己の気力とする訓練は必要です。そうしなければ暮してゆけない日々が多すぎますもの。川柳に向かえば、その水が頂けるような気がしてきます。

逝きしもの みな美しき雪となる

鳥取県 さえきやえ

新しいループで浄土見つけたり

西宮市 林 はつ絵

逆さ絵にすればわたしに向く刃

大阪市 田中 弘子

見逃がせぬ10%の雨予報

米子市 川上より子

煮大根 母の言葉に嘘はない

名古屋 藤井 高子

わが胸の奥のおくなる 水の音

高槻市 河瀬 芳子

水の心よ水の深さよ肩が泣く

藤井寺市 高田美代子

すこし淫らになってわたしを解き放つ影だけが塀の向うから帰る

かくれんぼ みんなかくれてひとりぼち

寄らば大樹 ならば大樹にならんかな

鞆の漕げない友と乗るシーズン

つまずいた私へ鐘のひしひしと

しんしんと冬 歳時記を開いても

冬の木の仏のようなおだやかさ

吹いて吹いてまあるいシャボン玉の中

海峡を越えても村は見つからぬ

余計なものを見るから険重くなる

物差しをいくつも持っている同居

白装束 裾のまつりがまだ出来ぬ

花束を抱く みしらぬ風が吹き抜ける

山茶花の紅ひとひらの思がえし

すっぱりと傘寿の傘にこもる父

種明かしして下さった恩おもう

一つ傘たよれる人と行く枯野

今を逃がせばもう戻っては来ない風

ばらの絵は時につめたい顔をする

鳥瞰図 中ほどにある死を想う

歪な風とねんごろになる曲り角

忘れてはならぬ人です お月さま

狂い咲く花かげいっそ潔し

終生を通す嘘なら許される

和歌山市 木本 朱夏

米子市 政岡日枝子

茨木市 堀 良江

和歌山市 森 西

松原市 佐藤 奏月

堺市 板野 美子

和歌山市 西山 幸

大阪府 向井しづ子

米子市 中井 ゆき

八尾市 高杉 千歩

西宮市 奥田みつ子

大阪市 鈴木 節子

倉吉市 淡路ゆり子

大阪市 島村美津子

島根県 松本 文子

米子市 石垣 花子

和歌山市 田中 輝子

西宮市 門谷たず子

米子市 寺澤みど里

西宮市 西口いわゑ

大阪市 富上 朝世

和歌山市 桜井 千秀

出雲市 吉岡きみえ

尼崎市 春城 年代

和歌山市 砂山千枝子

樂しみを作ろう冬が永いから
 ゆすらないで夢さくらんば皆落ちる
 生きている事の不思議な朝の月
 拾いましょう大地に落ちている愛を
 地に花を咲かせわたしも土となる
 顔を洗う 旧知と札を篤くして
 衣食住足りて心の貧しかり
 ポケットの吐息なかなか出ていかぬ
 隣との塀高からず低からず
 春です 右と左を確認し
 お金さえあれば百万本のバラ
 杓子定規捨てられなくて眠れない
 スイトピー 匂う小さな部屋にいる
 落し蓋 言うてきかせる事がある
 生とは何 八十路に近い身に冬日
 天国へ履歴書などは要りませぬ
 今朝もまた鏡とグルになる私
 豊かさと引きかえるもの大き過ぎ
 飛びこんで行けない海と走馬灯
 天国から見えてくれたから今日がある
 老いの身に合ったリズムを模索する
 ラッコ割る貝はおとぎの国のもの
 スペアボタン 出番ないまま終りそう
 甘えてる猫のころを大切に
 ぬいぐるみ過保護の果てに捨てられる

米子市	青戸	田鶴
倉吉市	橋本さつき	
岡山県	松本	元江
和歌山県	松原	寿子
鳥取県	松本伊都子	
米子市	林	瑞枝
米子市	稲葉	冬葉
寝屋川市	野中	御前
倉吉市	丸山よし津	
宝塚市	小塩智加恵	
米子市	山川	克子
和歌山市	中塚	君子
姫路市	染道	佳明
田辺市	吉川	寿美
羽曳野市	大神	静枝
静岡市	池田寿美子	
貝塚市	新	正子
米子市	本間満津子	
大阪市	津守	柳伸
大阪市	福士	トキ
青森県	森山	豊子
鳥取市	片岡智恵子	
富田林市	小木	久子
静岡市	内芝登志代	
和歌山市	神夏磯典子	
大阪市		

弱虫で自分を逃げた日もあった
 初霰を意識 白菜甘くなる
 新雪へつかけて出るポストが遠い
 思わない金が入ると歌が出る
 詫びた鉢からふところ深く芽吹くもの
 アイラブユー たった五文字のメモでした
 決断がつかずに今日も終電車
 大屋根を守る男がいてくれる
 足音を高く国道歩いてる
 言い訳をしてると嘘になってゆく
 夕景色 病院ぐらしなればこそ
 もう梅を観る約束が出来ている
 山こえて娘に一言を言いにゆく
 忘れ上手な母で楽しく生きている
 人に逢う やはり自分をよく見せて
 帯足してタスキを切つて娘が嫁ぐ
 母はいつでも黒子の味をはめている
 どの墓も花取り替えて晴着なり
 疲れた 慣れた階段踏みはずす
 どん底になれて鬼とも手をつなぐ

米子市	光井	玲子
出雲市	園山多賀子	
和歌山市	福本	英子
堺市	三浦	和子
米子市	白根	ふみ
米子市	平松かすみ	
寝屋川市	武部	敦子
藤井寺市	金山	夕子
米子市	山崎ひさ子	
倉吉市	古久保和子	
和歌山市	栗谷	春子
吹田市	堀	いくの
大阪市	富坂	志重
岡山県	丁坪サワ子	
姫路市	西原	艶子
鳥取県	高橋千万子	
堺市	小谷美つ千	
鳥取市	徳山みつこ	
羽曳野市	本庄	福子
京都市	東浦	砥代
兵庫県		

投句先 千 683 米子市花園町14-8

八木千代

▼訂正 一月号の「少年のたじろぎに似たフォルティシモ」
 は、森茜さん（和歌山市）の作品でしたので訂正いたします。



花

と

私

◇女性同人アンケート◇



心に花を

宮西弥生

カナダのビクトリアに行った時のこと。花のブッチャード・パークを見てからの私は、その素晴らしい花の虜になってしまった。世界の国々の花を世界の人々に見せる花園である。今年は幸福なことに、日本での花博が待ち遠しく、あの感動が再び甦るのである。

それからは我が家の猫の顔ほどのペランダに、沢山の花が並ぶ毎日になったのである。花を育てることは、非常にむずかしい。愛しては枯らし、寒暖に気くばりを忘れては枯らし、苦勞が絶えない。水やりや肥料を与える

時は花に優しくお話をすると聞く。花は育てる人のこのころを知って咲くそう。

一つだけ残念に思うのに、大切なハイビスカスをすっかり枯らしてしまった事がある。蕾のままではぼろりと落ちる。それに気付いた私は、花屋さんに落ちた蕾と葉を一枚見せたのである。何とタニという虫に侵されていたのである。無知だった自分が腹立たしく、「花さんごめんなさい」と、今でもあの可憐な姿が忘れられず、胸がつまる思いがする。

それ以来、勉強しようとなHKの園芸テキストやテレビの園芸時間等と、いよいよ病みつきはじめてのである。

昏に歌を、心に花をと私は花に囲まれ、花に元気づけられ、今日も健康で花に見送られて職場に向うのである。

あじさい

栗谷春子

あじさいの花咲く頃のこと。

例年になく花の乏しい年であった。それならとりわけ美しく咲いてほしいものをお願い、手入れの末、その期待にそむかず、青いINKの色も鮮やかな花が咲いてくれたのである。それなのにある日の夕方、外から帰ってみると、残らず花だけがブツブツと切られていた。表に面した庭の手をのばせば届く所ではあったが、あまりの仕業に胸ふさぐ思いがした。

その夜おそく、訪ねて来た幼い女の子とその若いお母さんがあった。さんざん叱られた後かして、いきなり、「ごめんなさい」とうつむいたのでわかった。外から帰ってみると、見事なあじさいをちぎっておママゴトのごちそうにしている。うちの花とすぐわかったらしく、お詫びにと、いたく申し訳なきを。つい先刻まで煮えたぎっていた怒りは、もし通りがかりの大人の仕業だったらというのであった。

「それを言いに来て下さったの。」

大人でなくてよかった、とほっとした。

「切ってしまったて、どうすることもできません。

あまりもつたなくて水盤にみんな浮かべて眺めさせていたでいます。」

その言葉について「ありがとう」なんて言ってしまった私。何年も前のことだけど、毎年想い出すあじさい色の想い出である。

梅

奥田みつ子

花にはお店に並んでいる丹精こめた高級花から、道端の名も知らない小花まで、それぞれの美しさがあってどれも好きですが、特に寒風に負けず、凛と咲く梅に惹かれます。それも白梅の蕾、うっすらと緑がかった丸い蕾の健気さ、気品に打たれます。

その白梅の蕾を複雑な想いで眺めた日を、昨日のことのように思い出します。娘がどうしても進みたい大学があるからと上京した時のことです。その受験の日、家にいても何となく落ち着かず、天満の天神さんにお詣りしました。別に受験の神様だからと言うのでは

なく、以前、この近くに住んでいて、子供たちも氏子として、ここへお宮詣りもし、時々遊びに来ていた懐かしい所だったからです。

境内の梅がちらはらと綻びかけていました。

「女の子はいずれお嫁に行つて親許を離れるのに、何も学生時代から遠くへ手離すことはない」と言う周りの声。でも娘が進みたい道であれば……。受かつて欲しいし、受かれば手許を離れてしまふ。娘の希望と親のエゴの絡む複雑な想いで眺めた白梅の蕾でした。

白梅の蕾の丸さ娘は果立つ

みつ子

先日、久しぶりにお詣りした天神さんの境内は、数多くの猷梅で美しく整備され、以前は目立たない所にあつた芭蕉翁の句碑が、新しく植えられたいろいろな種類の梅と並んで、どっしりと据えられていました。

行年や薬に見たき梅の花

芭蕉

君子蘭

淡路 ゆり子

花の芽を数えてあきぬ朝が来る ゆり子
老後の楽しみはこれしかないーと言う私ですが、あいにく一月、二月は花の咲いた鉢も

少なく、淋しい思いをしています。

少ない鉢の中で、沈丁花は小指大の紅い花芽を沢山つけています。二月半ばになれば、甘い香りを漂わせて咲いてくれることでしょう。この日の来るのを、雪の中で待ちわびています。

四月から花博が大阪で開かれます。私はカタカナの名前の花は、発音も難しく、覚えにくいので、あまり好きではないのですが、二百万株以上の草木や花が、小さきまま、世界中から日本へどっと集まって来ますので、テレビに釘づけになってしまひそうです。カカナの花の名前も沢山覚えて好きになります。

花の名を覚えて花の虜です

ゆり子

娘の婚家から君子蘭の鉢を戴いて六年、毎年違わず、大型の素晴らしい花を咲かせます。それには、一年中の管理の苦労もあります。

この花から、自分で種子を取ることに成功しました。種を播いてから五年、育つたのは一本ですが、小さな葉を両側に三枚ずつ重ねて元気に家の中で春を待っています。君子蘭は、八枚以上の葉が出揃わないと花芽をつけません。

この先、もしも、花が咲いてくれたならば私は、だれかれとなく、種子取りから育てて

来た、長い年月の苦勞を自慢話にすることでしょう。

花言葉抱いておんなの長い間 ゆり子

姉と若松

岸 野 あやめ

花と私——と思う時、最も鮮やかに思い出されるのは、床の間のうすばたの若松と、その前に美々しく飾り立てられた長姉への結納の品々でございます。それは昭和十七年の春のはじめの事でした。この戦争中によくも、

と思う立派な結納一式でしたが、肝腎の若松は十七歳の私の目にも、何となく心細く頼りなく見えました。当人の姉は、早朝から美容院と着付けに忙しくて、若松を活けるのは意な花屋さんに任せつ放しにしたのです。その事がとなたかの口からお花の先生のお耳に入り、「折角あの手を持ちながら、こんな時こそ自分で自分で活けてくれなかった……」と大層、御不興を蒙った、と次姉が後々まで嘆いたものでした。

それが一芸に精進する心構えだと本当に理解するには、当時の私は子供すぎましたが、

思い返せば大人の世界の入口を垣間見た、あれが始まりだった気がします。

人間の天命は致し方のないもので、長姉は結婚生活一年半の後、短い人生を終りました。が、もし今まで寿命があれば、きっと華道の師匠として生きる道を選んだと思います。

もうすぐ花と緑の万博が始まります。だんだん前景気の盛り上がって来たのが、肌で感じられます。私も大阪の人間として、是非とも成功して頂きたいと心から希っています。皆様、花と緑の万博できっとお目にかかりましょう！

無常の花

木 本 朱 夏

何年か前に植えた銀木犀が、我家のささやかな庭に初めて白い小さな花をつけた日、私は十三年間の結婚生活に終止符を打った。

やせた庭の片隅で何年も忘れられていた木槿が、初めてひっそりと白い花を咲かせた朝、あつけない父が逝った……。

父の遺産

土 居 勝

一九八九年は昭和から平成への変動の年で、昭和天皇をはじめ松下幸之助氏ら著名人が亡くなり、多額の遺産が話題になりました。金も地位もない私の父も亡くなりましたが、父の遺産は、耕花の名で五十年に及ぶ川柳活動で得た多くの柳友とその集積の『笹の花』『奴唄』の句集。

過疎の田舎の路傍に長い間、慈しみ、支え合った残された母に、有るか無いか分らない未知の来世へ向けて呼びかける次の世があったら妻よまた逢おうの句碑を残し、次の世までの夫婦の情愛の大切さを教えてくれました。辞世句——安らかな地下三尺の奥に帰る

の句のように、安らかに浄土へ旅立ちましたが、最後の死の床に私を呼び、息も絶え絶えに

「自分の川柳などは問題ではない。もっと大切なことがある。それは友情である」

心を病んで入院中の人を見舞つての帰り道、石像のように表情を強ばらせたまま、終始物言わなかったその人の心のうちを思い、うつすらと涙ぐみながら歩いていた時、馨しい花の匂い。

立ち止まってみれば、灰色の西洋館の庭に泰山木が一本、貴婦人のように気高く白い大輪の花をつけていた。

ついに心開かぬまま、その方は、ある年の十二月三十一日の黄昏時、紀の川のほとりで割腹自殺をして果てた。

花の想い出

澤田千春

私の家の前は、広い広い荒野原です。夕方荒野いっぱい、月見草が語り合いながらゆれています。その花の中に立てば、淋しき、心ぜわしさは、いつしかやさしい心になってゆくのです。秋には、その荒野にコスモスが咲きみだれ、花にたわむれる赤トンボ、思わず、『ゆうやーけこやけえの赤トンボ』と、口ずさんでしまいます。おばあちゃんの好き

真冬 山茶花が点々と真紅の花びらを散らすとき、一瞬、私はその方の流した血の色を幻に見るときがある。

失意の日、私をあたたく抱きしめ慰めてくれた限りなくやさしい花達

滅びゆくもののいのちの儚なさ、美しさ、哀しさを秘めて、今も私の心に無常の花が咲き匂っている。

木槿散る諸行無常と言うけれど

な子守歌でした。

我が家のささやかな庭にも、山茶花が土を染め、母の植えたろう梅がほのかに匂い、父の大切にしていた八重樫もふくらんできました。れんぎょう・リラ・白木蓮・ばら・あじさい・水仙等、どの花にもあたたかい想い出がいっぱいです。

また秋、私の誕生日には、大山耕水高原のりんどうの花が、便りをくれるのです。逢いにゆく私に、容赦なく巻きつく野いばらを切り払いながら、熊笹の中からりんどうは、沁みするような深紫の花で私を迎えてくれます。そして、れんげ・菜の花の咲く小道を、毎日幼稚園児を送ったのも想い出の一つです。

春の紀南、静峡へ

いらっしやい

川柳しんぐう吟社

〒647 新宮市熊野地1丁目6-12

大矢十郎

と、どんな財産にも代えられない人生訓を私に残してくれました。
世知辛い時代に、父の大事にした友情の大切さがひしひしと感じられるこの頃です。

故土居耕花長男勝氏
亡父供養として

金一封拝受いたしました

川柳塔社

このように花に囲まれた私の標語『花いっぱい夢のあふれる町づくり』が国体標語花の部に入選し、花との絆が、また深くなりました。花は私の想いに素直に応え、精いっぱい美しく咲いてくれます。花に謝ったことも幾度か、これからも、花のようにあかるく、あたたかい心でくらしたいと願っています。

花博への期待

丁 坪 サワ子

「花は愛惜に散る」という言葉がある。花は人を樂しませるために咲くものでもなく、人を悲しませるために散るのではない。年々歳々、種族保存の自然現象を四季に応じくり返しているに過ぎない。花の万博では、単に花の美しさ、珍らしさを賞味することなく、人と花との共存を真剣に考えてみたいと思う。投書を抜書きいたしました。四月一日から開催される花の万博には、世界の国々から色々の花が、それぞれのメッセージを持って親善使節としてやってきます。華やかな期待に、家族揃って待ちわびております。広い鶴見緑地には、「街のエリア」「野原のエリア」「山のエリア」が設けられ、それぞれに楽しさを

味わわせてくれることでしよう。情熱的な熱帯花、楚々と可憐な高山花、我が国の優雅な菊花、どの花からも私たちに語りかけてくれる「コトバ」を聞き分けたいと思っております。

兎小屋で一坪の庭さえありませんが、嫁は大の花好きで、玄関の両側へプランターを並べ、四季の花を咲かせて楽しませてくれます。チューリップが可愛い芽を出し、水仙が白い気品の貌をかしげますと、「お母さん、お母さん」と呼んでくれます。人が生きてゆく上になくしてはならぬ花とのお付き合い、結婚式の花束、誕生日、病氣見舞、または遺影を包む白菊、それぞれに花は喜び、慰め、哀しみの言葉をくれます。花博を通じて世界の方々との交流が広がれば、どんなに素晴らしいことかと心が弾みます。

懺悔の記

西 出 楓 楽

私の花好きは、人後に落ちないと自負している。けれど、花は私を好いていてくれるかというところどうも私の「片思い」らしい。

二、三年前の初冬のこと、友達の日さんか

ら宅急便でプレゼントが届いた。ダンボールの中味は、生き生きとしたシクラメンの鉢植えであった。ぎっしり根元を詰めた葉の間からニョキニョキ細い茎が伸びていて、その先一本ずつに、幅広い真紅のリボンを結んだような花をつけている。

日さんの心遣いは、わが家の玄関をパツと華やかにした。私はうれしくて、陽の当る位置に鉢をしょっちゅう移動させ、花や葉にからぬよう細心の注意を払いながら、水も肥料もたっぷりやって大切に育てた。

「春まで次々花を樂しめます」と説明書にあるのに、一か月ほどで花も葉もだりとして元気がなくなってきた。原因がわからぬまま、私は懸命に世話をし続けた。けれど状態は悪くなるばかりであった。ある日、近所の人から、水や肥料のやり過ぎで、もう根が腐ってしまっていると指摘された。私は日さんとシクラメンに心の中で詫びながら、鉢を処分した。

その後、日さんが遊びに見えることになった。私はこのことを言いくく、捜し回ってよく似た鉢植えを買ひ、身替りにした。

そうとは知らぬ彼女は、嬉しそうに言った。「差し上げたお花、上手に育ててくれてるねえ」「まあ…ね」小さな声で、私は答えた。

辞典あれこれ

川柳こぼれ話

田中正坊

二月号の本誌に「川柳と辞典」について一筆したが、書きおとしたことが多いので、もう一回、おつきあいがいたい。まず大型の国語辞典のことだが、やはり新しいタイプのものとして『大辞林』(三省堂)をつけ加えておきたい。また、辞典を使う場合、本文だけでなく、巻末の「付録」というか、「資料」にも是非、目をとおしてほしい。

たとえば、先に紹介した『日本語大辞典』(講談社)は、カラー版の特色を最大限に生かして三五〇色の色名辞典が四色印刷で掲載されており、私にとってはとても重宝である。また、『角川漢和辞典』は、中国の文様・芸能・建造物を図版入りで解説しており、これも役に立つ付録だと思う。

漢和辞典にふれながら古語辞典について書かないのは、片手落ちというべきだろう。やはり和語(やまとことば)を正しく理解する

ためには必要であり、大野晋ほか編の『岩波古語辞典』が手ごろだと思う。

つぎに外来語辞典は、実用的でコンパクトなものが多いが、私は戦前に購入した荒川惣兵衛著『外来語辞典』(富山房)を今でも愛用している。古今の文献から一万語をセレクトし、原語と出典を明らかにしたもので、資料的価値が高いが、今では古書市でしか入手できないだろう。外来語に関しては、昔から関心を持っているので、次回に「川柳と外来語」についてまとめてみたい。

ついでに珍しい辞典としては、岸本末彦編『現代常用語辞典』というのを持っている。大阪教育大学を退官して女子短大の教壇に立った編者が、日常語までいちいち説明しないとかわかってもらえないという情けない経験から自費出版されたもので、やはり自分用の辞典は、自分でつくるのがベストだろう。

このほか、四字熟語については、そのものズバリ真藤建志郎著『四字熟語の辞典』(日本実業出版社)があるが、岩波ジュニア新書の『四字熟語集』の方が使いやすい。さらに大阪弁の『辞典』としては、牧村史陽のライフワークである『大阪ことは事典』が講談社学術文庫の一冊として刊行されている。

おわりに、有名なビアスの『悪魔の辞典』

(岩波書店)で「辞書」の項を引くと、「一つの言語の自由な成長を妨げ、その言語を弾力のない固定したものにするために案出された、悪意にみちた文筆関係の仕組み」とはいうものの、本辞典にかぎり、きわめて有用な製作物である」とあった。

奈良県川柳大会

日時 4月15日(日) 正午

会場 漢国神社会館―近鉄・JR奈良

宿題 「夫婦」 古川 洋子選

「池」 井関 滋啓選

「偲ぶ」 巽 玄策選

「膝」 松本 多加選

「椅子」 中村福太郎選

「縫う」 吉田美紗子選

席題 1題 阪本 高士選

会費 1000円(発表誌呈)

*欠席投句 500円同封、左記へ

4月10日必着

〒630 奈良市北市中町七一

杉野睦朗宛

■ ずいそう

ひな祭り

布施 幸子

金屏風を背にしたおだいりさま、おひなさまを主役に、三人官女、五人ばやし、右大臣、左大臣、隨身、衛士らが従い、桜と橘、お道具類が勢ぞろいした段飾り。雛人形売り出しの季節になると、人形店はひときわ華やぐが、値段も負けず華やかで、「おかず代にしたら何カ月くらい食べられるやろ」と現実人間の私は、つい計算したりする。

三月三日は桃の節句。ひなまつり。女の子がすくすく育ち、早く良縁に恵まれて、幸せなお嫁さんになれますようにとねがうこの行事は、なにか始まったのだろうか。

調べてみると古代中国の「上巳^{じょうし}」の習わしにたどりついたが、ふしぎなことに女の子とも人形ともかわりはなかった。

古代中国では、三月の、初めての巳^みの日に、水辺に出て身を清め、持っていた酒を飲む

風習があった。

晋の時代、国王が川辺に出て、春げしきをもてながら御酒を召しあがった。そうして、水が曲り流れるところに盃を置いて帰ったところ、国がおおいに発展した。「三月の上巳の日、蛇のように曲りくねる水辺に立つて祈り、お酒を飲むと運がひらけるそう」とみんながまねするようになったのが、上巳の習わしだという。

このことは「上巳の祓^{はら}い」「曲水の宴^{まひ}」としてわが国に輸入され、宮中の行事となった。それまでにおこなわれていた「農事をはじめの物忌み」や「祓^{はら}い」の祭事といりまじって、旧暦三月上巳、のちには三月三日の行事として続くことになる。日本の祭事にはこんな形をとるものが多い。

曲水の宴は、平安時代、清凉殿の庭をめぐる小川のあるところに貴族が座っておこなわれた。川上から流れてくる盃が、自分の前を通りすぎぬうちに和歌を詠み、おもむろに盃をとりにあげて酒を飲みほす。「めぐりみずのとのあかり」ともよばれた雅びな催事は、「流しそつめん」ならぬ「流し酒」で、殿方には結構な行事といえるが、作歌と抱きあわせだから気らしく酔ってはおられない。盃はおかまいなしに流れてくるけど、上の句すら浮か

ばないといった、私のような人もいたようで、それかあらぬか、いつのまにやらすたれてしまった。（現在は、京都市南宮の行事として再現されている）

一方、上巳の祓の祭事であるが、帝ご自身は川辺へお出ましにならず、陰陽寮から奉った人形が代理をつとめた（この人形がいわばおひなさまの元祖である）。帝は、その人形で体を撫で、息を吹きかけて、ふだんのお召物とともに下げ渡されると、侍臣が川原に運び、祓いの式のあとで川へ流した。

源氏物語の「須磨の巻」にも、光源氏が春の海辺に出て、旅の陰陽師に上巳の祓いをさせる場面がある。上巳の祓いにしても曲水の宴にしても、皇族・貴族といった特殊な人たちの催しことだったようだ。

わが国の農家では、ちょうどこのころに、「山磯遊び」という風習があった。「三月三日」「四日の悪日」などといって、三月三日、四日は「働いてはいけない日、家にいてもよくない日」として、山や海、川に出かけてこちそうを食べ、酒を飲んだ。今の暦でいえばあたかも桜の見ごろ、「お花見」のルーツである。

山磯遊びの風習は、やがて中国からきた上巳の習わしと混じりあって、一般でも形代、

つまり身代わりとして素朴な人形を流すようになる。鳥取地方の流しびなの行事などは、そのなごりといわれている。

ひな鳥、ひな菊、ひなあられなど、「ひな」と聞けば小さな愛らしいものが浮かんでくるけれど、形代としてのひな人形の先祖は、草や藁、紙、布を使った等身大のものが多く、水に流されるのが本来の役割だった。

ところが、流しびなをする人が増えるにつれ、川に流すのがさしつかえるようになり、海まで運んで舟で沖へ送ったりしていたが、そのうち近くの寺へ納めて祈祷ののち処分してもらおう、という考え方に変っていった。

室町時代には、上流家庭どうしで人形の立派さを競うようになり、そのうち寺へ納めるのも惜しくなって「家で毎年おまつりすればいいじゃないか」と飾ることに重点が移っていった。臨機応変、都合のよい理屈だと思っけど、だからこそ形を変えても古い行事が伝わってゆくのかも知れない。

さて一般、といってもごく一部の金持ちの家にひな人形が飾られるようになったのは江戸時代である。金にあかして豪華な材料を用い、等身大のみこととおひなさまを誇る町家も出てきて、幕府から華美をいましめる触れ書きが出たりしている。

小さなひな人形に統一され、『女の子の幸せを祈る桃の節句』として広まりだしたのは明治になってからであり、よそへのプレゼント用にも使われたのだが、華やかな人形はまだまだ金持ちだけのもので、ふつうは手づくりの紙びなとか色紙、せいぜい地味な『めおとびな』一対が分相応とされた。

今は、誰でも飾りたいと思えば、どんな立派なおひなさまを飾ってもかまわない。美しいひな祭りがたのしめる豊かな世である。けれど、行事本来の姿をかえりみれば、人形店にたてつくようだが、華美に流れるのはどうかと思う。

無理して高価なひな人形を飾ったからといって、幸福満点の一生が保証されるものでもない。逆に、戦時に子供時代を過ごし、ひな祭りの思い出に乏しい私にしても、おかげさまでよい夫に恵まれたのだから。（ということにしておこう。）

夜市川柳募集

課題 「影」 中尾藻介選

ハガキに3句 3月31日締切

〒593 堺市堀上緑町2-9-2

河内天笑方 堺川柳会

全日本川柳宮城大会

日時 6月10日(日) 午前10時開場

会場 松島中央公民館(宮城県松島町)

会費 三、〇〇〇円

宿題 第一部(事前投句、5月10日締切)

「言葉」

ちば東北子選

「時計」

加藤 翠谷選

「結ぶ」

渡邊 蓮夫選

3・5×18センチの句箋1枚に1句ずつ記入。各題2句、無記名、封筒に住所氏名を明記し、投句料一、〇〇〇円(定額小為替、現金書留)同封。

投句先 〒542 大阪市中央区谷町7丁目1-39

新谷町第二ビル二〇六

日本川柳協会大会係あて

宿題 第二部(当日出句、締切正午)

「踊る」 古川 一高選

「重い」 藤沢 岳豊選

「温もり」 西田柳宏子選

「約束」 本山 哲朗選

各題2句、各部の各題とも未発表作

入る

吉川寿美選



立て札が読めぬ芝生の二人づれ 輝子
 父母在ます山の辺りへ入る夕日 右近
 一言を耳に入りたい春あらし 芙美子
 入れ詰めた荷物情けの母が居る 早苗
 背を向けた隙間に入る寒い風 白峰
 入腰を入れて余生の虹がさす 艶子
 投入れの器に母の影がある 狸村
 四捨五入わたしを拾う神もあり 芳水
 一升は入る血筋を継いでます 可住
 中傷の噂のままで冬に入ると たつみ
 手を入れる水の温みも春のもの 京子
 玄関を入ると母の顔になる(蘭) 正子
 世を拗ねて冷たい風を入れて住み 愛論
 写経してそこから深い禅に入る 多賀子
 大門から入れる男の肩の幅 雀踊子
 追伸へ慕情も少し入れて置く よし津
 大入りの噂を聞いた馬の脚 美代子
 山門を潜り仏の掌に入る 四郎
 破顔一笑柩に入るときにする 雄々
 掌に入る小さい幸を握りしめ 高夫
 立入り禁止入りたくなる好奇心 理瑛
 それからの出入り緊迫感がある 冬葉

いい話は内ポケットに入れておく しげお
 山に入る樵は山の木と歌う シマ子
 もつれ糸他人ははさみ入れたがり 砥代
 入りこんだわたしへ人間とりもどし 恵美
 愚痴一つ入り崩れる目玉焼 文平
 入口で鬼と仏と鉢合せ テル
 計算が入るとこんがらがると 高子
 B面に入れてあるのは自信作 和子
 入口にいつも置いてある聖書 笑風
 隠し持つ本音を入れた玉手箱 博子
 雑兵の入る戸口は別にある 清柳
 コンパスに入ると強い顔になる はつ絵
 簡単に入れる踏絵さえふめば 度
 甘言がすんなり入るから怖い 重人
 男達磨にたましいの目を入れる 螢
 句読点入れると愛が醒めました 保洲
 入ったから別の天地となる茶室 正坊
 浅瀬から入る知恵なら持っている 裕美
 玉手箱けむりのほかに入れたもの しげお
 自画像へ真赤な線も入れてある はつ絵
 人
 入り日燦々冬の命がまた燃える 元江
 地
 引金の視野に仏が入り込む 玉恵
 天
 紙ビナの背なへ命も入れて折る 砥代
 軸
 万燈会亡母と語らう灯を入れる

耳

天正千梢選



耳底にしっかりと閉じてある秘密 可住
 君だけという耳打ちは信じない 佳雲
 福耳を賞められてつい恵比須顔 太一郎
 ざつばらん耳もとの囁きは嫌いです 理瑛
 四面楚歌耳をふさいで寝るとしよ 元江
 ライバルの耳に悲鳴は届けまい あやめ
 誉めそやすことばに耳がむずがゆい 豊
 福耳とおだててやおら奉加帳 亭
 耳ふさぐニュースが紙面汚す朝 京子
 同居して耳をふさいで生きてます 京子
 耳遠い母が顔色先に読み 寿恵子
 ゴシップが大好きな耳壁にある 宵草
 聞き耳の癖が抜けない調律師 南奉
 善人を丸出しにした遠い耳 芙美子
 耳よりな話にいつも騙される 三男
 馬の耳あまりよくよしなさんな きみ子
 例えはの話が耳の底につく 白峰
 耳元で言うから秘密めいてくる 鉄治
 戦友の雄たけび消えぬ耳の底 夢酔
 耳打ちへだんだん眉が上り上がる 忠雄
 ついとかかと小耳を貸したけが来る 高子
 壁に耳内緒話はすくにもれ 悠泉

佳

福耳は愚痴を聞くのは苦手です
補聴器を外した耳がかゆくなる
多賀子
ただけが僕の足音聞き分ける
雀踊子
聞く耳は持たぬと父は背を向ける
重人
耳掃除してよく聞こう天の声
よし津
初耳といってお喋り聞いてやる
旋風
文明が女の耳に穴をあけ
ちかし
イヤホン入院室のエチケット
一進
四五人の耳を通って来た誤解
史風
イヤリング心の揺れが隠せない
有一朗
母としていつもやさしい耳を持つ
笑風
地獄耳きれいに掃除しています
蜚
半分は嘘と知ってる地獄耳
杏村
倅せな耳でいい事だけ聞え
遊峰
耳うちをされた仲居は席を立ち
兼治郎

難聴の父は長寿の顔を持つ
シマ子
目も耳も確かで判断誤らぬ
美代子
年寄りの耳学問に教えられ
ちよ
いい話訊く補聴器をつけ直す
悠泉
麻酔からさめて確かな医師の声
輝子

人

補聴器を外して静かに仰ぐ空
明吉

地

耳寄りの話を聞いた紙コップ
正坊

天

シヨパン聞く耳もあります主婦として
愛論

軸

耳痛い話は聞かぬ反抗期

緑

河内月子選



赤い芽が緑になって春の風
寅さんが土産にくれた草だんご
温室は緑緑にむせ返り
翔んでゆく毳は緑の風の中
チラシずっしり地球の緑食い潰す
しつぱりと緑にぬれて森を出る
人間も虫けらもみな緑ずき
緑なす大地へ虫も嬉しそう
芋虫がみどりに酔うて動けない
キャベツ食う虫も緑に染めて春
笹の葉にたまごを産んで勇退す
念願の庭絨緞の青々と
子育てのように楽しい庭の芝
一点の緑大樹になるいのち
無造作に踏んでいいのは畠の麦
緑奪ってまたも大きなゴルフ場
緑地帯出れず男が吠えている
左遷地の酒と緑に根を下ろし
地球から緑が消える酸性雨
故郷の緑いっぱい目に溜める
ベランダの鉢の緑に救われて
一鉢の緑をふやす冬の部屋
笑風

ピクニック緑みどりであうまいめし
凍て土を割った緑へしゃがみこむ
ゴルフ場の芝生にだまされないうに
地球儀の緑だんだん薄くなる
喪が明けて緑の風になって来た
指先を緑に染めて茶摘み唄
伐ってから緑化運動熱をあげ
また緑削って地価をつり上げる
乱伐の緑オゾンがへっていく
炎えつきて散ってもみたくし常緑樹
緑便へ夫婦で走る医者者の門
裸木が緑の夢をみて眠る
新緑の径ハミングが空へ抜け
目も肌も緑に染まる草いきれ
新緑の頃の裾はよく喋り
シマ子

佳

一本のバセリ弁当引き締める
みつこ

裏長屋所せましと植木鉢
新緑にそっと自転車横たえる
どの花も緑の衣よく似合い
地球儀の緑の帯がくずれかけ
裸木がじつと抱いてる緑の芽
冬大根葉っぱのついた荷が届く
開発の美名で緑削られる
赴任地のみどり人間とり戻す
軸

人

裸木がじつと抱いてる緑の芽
輝子

地

冬大根葉っぱのついた荷が届く
かなめ

天

開発の美名で緑削られる
通彦

軸

赴任地のみどり人間とり戻す

初歩教室

題 — 微笑

辻 白 溪 子

今回の課題は、やや作句しにくかったのか、締切間近になって大量に投句があったので、大変であつた。句の内容から、微笑よりもほほえみと表現した方が無難であつたと思つ。着想のつかみにくい題は、特に推敲を繰返す事が必要であると感じた。

微笑していつもの客は冷奴

章 久

(冷奴いつも微笑で出す板場)

ほほえみがつけをかさ上げる始末

芳 水

(ほほえみが勘定書へ付いてくる)

その微笑次へのステップ秘めている

宏 安

(余裕ある微笑が次の出方待つ)

微笑みを絶やさぬバラが先に売れ

美恵子

(花束のバラに微笑を添えて売り)

ライバルがしてやつたりと微笑する

富 恵

(ライバルの微笑へ口惜しさが残る)

あの微笑何か魂胆有るらしい

志 重

(魂胆があつて余裕のある微笑)

モノリザを真似て鏡が吹き出した

円 女

(モノリザのほほえみ鏡の似ない顔)

微笑んであの世行きたく常思ふ

ひさ子

(微笑んだままで死にたいなと思つ)

ライバルの微笑の中にある闘志

絢 子

(ライバルの意識が顔へ出る微笑)

紀子さまの微笑み花のほころびに

秀 香

(紀子さまの微笑みカメラ待ち構へ)

ホステスの微笑本気にお人好し

金 吾

(ホステスの微笑へ本気になつて惚れ)

ついつられ微笑み返した敵の陣

尚和子

(迂闊にも敵へ微笑みしてしまふ)

微笑まし生れたばかりの猫五匹

美 子

(猫好きの微笑み五匹も子が生れ)

ほほえみで迎えてくれるボーナス日

時 弘

(微笑みのサービスポーナス迎えられ)

酒呑んで微笑むことを忘れない

小 鹿

(返盃をほほえみながらしてくれる)

幼な子の微笑時を忘れさせ

一 枝

(うつぶなが少し和らぐ子の微笑)

客席の微笑子役がまたとちり

岳 夫

(客席の微笑がかえつてきた子役)

五十余年微笑の面もすこしずれ

彩 子

(五十余年微笑も少しずつゆるみ)

病床の友へ微笑み見舞いする

艶 子

(思ったより元気と見舞いに微笑され)

営業の微笑と知りつつ眉を下げ

方 子

(営業の微笑が揉手を続けさす)

モノリザの微笑に耐えてる案山子

つえ子

(モノリザの微笑が迎えている洋間)

おそれ入る微笑たたえて遠会釈

静 子

(微笑だけ交わす会釈が物足らず)

ほほえんで女は怖い事を言う

日和子

(ほほえんで指輪が欲しいと妻が言う)

候補者の作り笑顔を冷たく見

とく子

(候補者の微笑が握手求めて来)

もう馴れて微笑で払ふ消費税

織

(消費税分を微笑でまけておく)

微笑して振り向いた女思い出し

信 一

(振り向いた微笑へ妻がしつとする)

肚決めた微笑一歩もゆずらない

保 夫

(肚据えた微笑が胸に辞表抱く)

妻の笑み疲れがとける終電車

君 江

(終電車妻の微笑へ気がゆるむ)

お年玉受取る迄の孫の顔

春 風

(微笑んで孫が受け取るお年玉)

飢餓の子の頬は微笑を知らぬまま

みつこ

(微笑みを忘れた飢餓の子が瘦せて)

初孫の微笑私がばあちゃんよ

侑 里

(初孫の微笑が見たくて上京す)

運動員選挙前だけ微笑する

呼 風

(運動員の微笑はバイトという選挙)

微笑の娘に惹かれて今日も茶房通い 繁男

(行きつけの喫茶微笑の娘に惹かれ)

深水の筆の女はほほえまず すみれ

(深水の美人画微笑の顔が無い)

春風が少女の微笑のせてくる 喜代子

(春の土手少女の微笑が風に乗る)

万遍ない微笑が手を振る選挙カー 一乗

(選挙カー微笑を街へ播いて過ぎ)

老いてからわかる微笑の節料理 しづ子

(旬料理の味へ微笑む老夫婦)

美しく微笑んでみる孫相手 太一郎

(好きな事させて微笑む孫の守り)

ライバルの微笑に負けて座をすべる 敬

(ライバルの微笑に自信剥がされる)

町中のポスター私に微笑する 福子

(ポスターに微笑をされている車内)

喪があけて忘れた微笑かえり咲き 澄子

(喪があけて微笑が戻ったマニキュア)

シャッターのチーズの声を見逃さず 露芳

(シャッターのチーズ微笑を揃えさず)

微笑する友の遺影が語り出し ふさ子

(微笑する遺影へ語りかけた友)

みどり児の微笑心にくい込まれ 豊子

(みどり児の微笑へ母性愛が湧く)

微笑んだ遺影に聞きたいことがある 義

(微笑んだ遺影に無言で悟される)

バレたかな妻の微笑が気味悪い 昭治

(微笑みの妻に秘密がこぼれぬ)

ほほえんで会見の紀子さんおめでとう みつえ

(紀子さんの微笑シャッター見逃さず)

紀子さんの微笑に富士の山も晴れ 喜与志

(紀子さんの微笑へ車窓の富士も晴れ)

生き抜いた母微笑んでうなずいた 美代子

(苦勞した母の微笑に励まされ)

モナリザの微笑にも増す母の笑み 志華子

(母さんの微笑はモナリザを超える)

いい夢らしい微笑子の寝顔 三津江

(いい夢を見たのか寝顔の子の微笑)

微笑んで借金虫にいらっしやい 高雄

(微笑んで借金左程に苦にならず)

ハイチーズ揃って微笑写真館 美恵子

(シャッターの注文一度に微笑させ)

初撮りに孫子も揃って微笑して 登代

(微笑する孫子の中にいるシャッター)

補聴器へ微笑をくれて通じあう 芙美子

(補聴器の微笑へ心が通じ合う)

微笑の胸にだかれん死出の旅 高栄

(微笑みのままで抱かれて息が切れ)

微笑され会釈返して考える 三千子

(とり敢えず会釈返している微笑)

微笑みの中に闘志が隠される 幸枝

(微笑みの中の闘志を気付かせぬ)

初テレビどのチャネルも微笑溢れ サワ子

(タレントの微笑が多い初テレビ)

微笑んでベンチで独り彼女待つ 明吉

(待合わすベンチに期待がある微笑)

ほほえめば昔の恋も蘇る 圭坊

(ほほえんで過去の楽しい恋にふれ)

あきらめず小犬ころろ従いて来る 隆雄

(ほほえみを見極め小犬が付いてくる)

微笑もつかつに出来ぬ若い寡婦 金吾

(いつからか微笑忘れた寡婦の眉)

微笑して杜氏若さの艶かくす 章久

(出来栄へ杜氏ほほえむ酒の唄)

今回の着想・表現が秀れている句

窓口の微笑寒さをやわらげる

モナリザの微笑で宮家へ嫁がれる 美恵子

火を抱く男微笑も絶やさない ふさ子

ダイヤには熱い微笑がまといつく 軒太楼

微笑みを返してくれる駅弁屋 小鹿

私の句

微笑んで試合を終えた握手する

パチンコの出玉微笑が続かない

◇

題「誘う」 3月15日締切(5月号発表)

宛先 569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

ハガキに3句以内 辻 白溪子

平成二年

新春おめでとう会

1月15日・大成閣

「成人の日」の晴着姿でにぎわう一月十五日は、川柳塔社恒例の新春おめでとう会。会場の大成閣には、定刻の午後一時前から同人誌友が続々とつめかけ、大広間にあふれる八十人の盛会となった。

兼題の投句は午後一時半に締め切られて天笑氏の司会で開会、島根・鳥取・岡山など遠方からの参加者の紹介があり、栗主幹のあいさつの後、披露が行われたが、「ボーズ」の三才は全員が遠来組、馬の三才はみな女性という結果となった。

つづく懇親宴では、年一回の交流の機会とあって、テーブルを縫って献杯や歓談がくり広げられ、次々と登場するカラオケの美声に酔った後、全員が輪になって童謡を合唱し、別れを惜しみながら帰途についた。(正)

(記録―射月芳・みつ子) (清記 楓楽)

出席者・森子・理瑛・元江・紫香・きみえ
多賀子・文子・完司・柳宏子・諷人・螢・光子・シマ子・鉄治・杜的・松川芳子・メ女・小林英子・妻子・寿恵子・いわゑ・みつ子・花梢・栗・透太・凡九郎・雄々・寿美・勝美・たず子・笛生・節子・薫風・正坊・千秀・みね・三千子・一二三・洋敏・智子・英一・諷云児・萬的・しげお・熊生・華子・素身郎・鬼遊・冬葉・維久子・保州・形水・はつ絵・美房・登志実・房子・トメ子・公子・美智子・遊美・三男・登志代・天笑・月子・みのる・白溪子・由多香・荒介・瑞枝・楓楽・寿美子・射月芳・鶴丸・可住・吐来・太茂津・奏月・朱夏・金太・雀踊子

「ボーズ」

河内月子選

無頼漢のボーズも板についてきた
完司
ボーズしてみても鏡は騙せない
吐来
華やかなボーズに油断してしまふ
美智子
黙秘権眠ったふりをしていきます
螢
票狙うボーズと肚は透けて見え
鉄治
どんなボーズしてるのだろう試着室
三男
記念写真係に囲まれハイボーズ
勝美
花道で決まるボーズへ成駒屋
透太

正月のボーズ馬鹿チョン持つて出る
笛生
へそ曲りひとり混ってハイボーズ
天笑
ハイボーズ目立ちたがりやのVサイン
勝美
大胆なボーズへカメラ照れている
鉄治
哀願のボーズに弱い親でした
房子
ボーズだけ公約無視の自民党
遊美
かつこいいボーズがすこし気にくわぬ
いわゑ
泣き羅漢のボーズに自分見えています
千秀
大胆なボーズで妻が昼寝する
諷云児
ボーズとる鬼の笑顔が哀し過ぎ
公子
新内閣しっぱかしくてハイボーズ
天笑
母さんのようこぶボーズ知っている
由多香
こんなボーズでお化けふんわり出るそふな
文子
風に揺れる柳は春を待つボーズ
二三
亡父に似る海のボーズを見に出掛け
瑞枝
したたかにロゲンになってみるボーズ
諷人
ヨガのボーズ見ている私ねじれそう
金太
国民の為のボーズが鼻につき
花梢
ボーズして美人がバスの待つている
射月芳
大胆なボーズで迫る魅惑の夜
みね
あの笑顔単なるボーズだったのか
金太
チャップリンのボーズにだけはかなわない
はつ絵
一連のボーズで水仙香を放ち
シマ子
流石はモデル慣れた仕草でハイチーズ
みね
幸せなボーズで嫁と妥協する
洋敏
飴一つ貰うそれぞれボーズして
はつ絵

消えてゆく雪のポーズを見ておこつ
惚けたポーズすると人間よく見える
求愛のポーズ鶴にはかなわない
どの鶏もおなじポーズで卵産む
色男のポーズで花を買いに行く
赤ん坊のポーズ命を主張する
おおげさなポーズで彼に口説かれる

馬

阿萬萬的選

馬小屋にスポーツカーを入れている
好きな娘が出来てあばれぬ馬になる
裸馬洗う小川も春になる
トラクター入れて曲り家馬が居す
若駒が翔ける牧場は初春の音
馬だつて好きな人には首を寄せ
ペガサスよ少女も白い羽根になる
そんなこと知らんと馬の耳動く
饒舌は聞き飽きました驢馬の耳
風の彩見たくて馬の瞳をのぞく
唐三彩馬百態に初春めぐる
駄馬は私に歩調あわせてくれている
馬子唄がきこえてきそうな七曲り
母馬をはなれず草をはむ子馬
二頭立ての馬車に誓いが乗せてある
雑兵の馬で流れにさらえぬ
歓声に勝つた馬の耳は知り

荒介
楓楽
奏月
きみえ
完司
熊生
月子
完司
月子
紫香
薰風
金太
トメ子
いわゑ
栞
多賀子
楓楽
みつ子
奏月
雀踊子
光子
森子
たす子
柳宏子

駿馬にも駄馬にもならずマイペース
馬頭観音宿場町に残る堂
地吹雪の羅白に馬さし待っている
若駒が駆け抜けて行く早春譜
月冴えて駄馬の祈りが深くなる
春駒の土鈴も飾る初節句
薬の馬だから田舎の人が好き
駄馬でない自信だまつてメガネ拭く
乗りかえた馬もやっぱり走らない
スマートさ無いが轡馬の強い意志
駄馬で良し家族へなつき荷を運ぶ
曲り家に馬も家族として暮し
裏方に徹した父の馬の脚
よいことはちゃんと聴いてる馬の耳
弁解をじっと聞いている馬の耳
道草の楽しさを知る駄馬で良し
駄馬でよし義理人情に弱い馬
駒よいなけ父の鍔型を抜けて跳べ
駄馬は駄馬なりの足跡子に残す
ペガサスの眼には平和な空の青

透太
雀踊子
天笑
房子
芳子
みつ子
諷人
熊生
透太
シマ子
白溪子
シマ子
可住
鬼遊
美智子
朱夏
理瑛
寿恵子
たす子
萬的

川柳塔用箋(一冊二〇〇円)

送料が変わりました。

一冊二五〇円・二・三冊三六〇円

※数量がまとまれば、(ゆうパック)に
にする方がお得です。

鳥取県川柳大会

とき 3月25日(日)午前10時開場
ところ 鳥取県東郷温泉「水明荘」
(JR「松崎」駅から徒歩5分)

兼題

「息」 角田 千秋選
「吹く」 山本あけみ選
「池」 中原 諷人選
「鳥」 林 荒介選
「梨」 宮脇 銀嶺選
「大きい」 金築 雨学選
「鉢」 浜野 奇童選
「伏せる」 西出 楓楽選
(各題2句)午前11時半締切
※席題はありません

会費 1500円(昼食・作品集呈)
投句 欠席投句は、1000円を添え
3月15日までに左記へ

〒682 倉吉市上灘町112

奥谷 弘朗

鳥取県川柳作家協会

本社 二月句会

二月七日(水) 午後六時

メンズファッションセンター

六年ぶりの大雪から一転、お彼岸ころの陽気に包まれた中で開かれた二月句会は、一月に続いて九十四名の参加という盛況。おはなしは、冬が大好きな山男の板尾岳人氏。古本屋で見つけた『番傘川柳一万句集』からラジオの話、NHK川柳近畿大会、そして金剛登山と、例によって豊富な話題が展開された。

珍しく某主幹が所用で欠席されたため、兼題「粒」は、花の万博協賛・番傘全国川柳大会PRのため、多数来会された中から森中恵美子さんが選を担当、紫香副主幹が兼題最終の選者をつとめた。

初出席は吉村雅文(寝屋川市)楊井二(雨塚市)小林トメ子(大阪市)伏見喜代子(大阪市)のみなさん、月間賞は西出楓楽さんが獲得した。

(進行)天笑 (受付)千秀・正子

(記録)月子・みつ子

出席者―理瑛・元江・太茂津・結実・武庫坊・千秀・後藤正子・笛生・翠公・鬼遊・保州・飄云児・白溪子・悟郎・幸・福本英子・萬の・眉マ・二南・狸村・紫香・美智子・規不風・シマ子・雅文・喜風・小路・射月芳・天笑・月子・柳宏子・いわゑ・はつ絵・みつ子・杜的・小林英子・達子・満津子・典子・仙吉・凡九郎・利武・重人・憲太郎・房子・勝美・柳影・悦郎・甘平・一高・タン吉・公一・トメ子・白兎・楓楽・文秋・作二郎・恵美子・洋敏・幹齊・冬葉・愛論・東雲・喜代子・美津留・章・庸佑・美房・絹子・英壬子・白洋・安藤寿美子・度・元紀・昭子・美代子・勝晴・正坊・透太・章久・智子・吸江・頂留子・奏月・八斗録・英一・光代・寿美・薫風路子・雀踊子・一二三・寿子・岳人

席題「とんとん」 芳地理村選

酒ビールとんとん出せと酔つてはる 庸佑
息つく間なしにとんとんわんこ蕎麦 英一
間太鼓とんとんと鳴る寒稽古 章久
翔べぬ男がむやみに太鼓打ち鳴らす 太茂津
親の気も知らずとんとん進む仲 甘平
とんとん駆け雪も男も火の祭り 作二郎
つまらない話へとんとん寄つてくる 凡九郎
とんとんと退職金を喰う息子 美津留
とんとんと噂どおりになつて行く いわゑ
とんとんと太鼓も派手な天理教 甘平
とんとんと呑んで好きなら好きと言いなはれ 千秀

とんとんと去る日に秋の矢が刺さる 元紀
過疎に来た嫁がとんとん生んでくれ 章
言うことがあればとんとん言いなさい 八斗録
とんとんと話大きくとんとんタルマ 透太
とんとんと鳴らす太鼓は春の音 元江
窓際の椅子にとんとん近くなる 飄云児
面影を追えばとんとん遠ざかる みつ子
地上げ屋がとんとん街を消している タン吉
紙の鶴ととんとんふえてゆく折り 後藤正子
果しない欲にとんとん流される 満津子
踏きを知らずとんとん行く怖さ 美智子
無為無策ととんとん月が欠けて行く 杜的
とんとんと祭り太鼓が背なを打つ 結実
ぜい肉がとんとんとれて春近し 月子
子と話す距離がとんとん遠くなる 飄云児
親だけがとんとん進んでいる縁談 いわゑ
横着者をとんとんふやす電化品 天笑
憧れがとんとん増えて困ります 智子
太鼓鳴る好きな男の音で鳴る 恵美子
とんとんと拳手先生が好きだから 翠公
縁倒し花博ととんとん進みます ダン吉
とんとんと進む私の道だから 昭子
とんとんと飲めとは腹を切るつもり 小路
とんとんと女とこまで強くなる 規不風
ふる里の山がとんとん崩される 武庫坊
ライバルをとんとん抜いてほくそ笑む 元江
とんとんと山を動かす女たち 月子
いい夢はとんとん胸に溜めている 恵美子

元紀 章 八斗録 透太 元江 飄云児 みつ子 タン吉 後藤正子 満津子 美智子 杜的 結実 月子 飄云児 いわゑ 天笑 智子 恵美子 翠公 ダン吉 昭子 小路 規不風 武庫坊 元江 月子 恵美子 狸村

席題「金塊」 川島 諷云児選

金塊でなんや安眠しています
 小道具の金塊運ぶ映画村
 金塊をつかんだとこで目がさめる
 金塊の匂いを知らぬうちの大
 金塊を見つけた話夢でした
 金塊は地下の倉庫に入れたる
 金塊をすこし持つてゐるおばあちゃん
 金塊で手錠を一つ作ろうか
 一億の金塊村が起こせるか
 金塊はドラマの中でよく見えてる
 金塊が見つかり龍宮が騒がしい
 金塊へ意欲を見せるサルベージ
 金塊をよもやの場所から出してくる
 山に埋めた金塊カラスが番をする
 金塊は黙つていてもうちにある
 金塊の息子が二浪しています
 インフレが来るぞ金塊買いにいく
 もらうなら金塊よりも札がよい
 本物の金塊抱いて寝てみたい
 金塊引揚げ意地とロマンのある男
 欲があるから金塊を信じてしまふ
 金塊を運ぶ河童は絵になろう
 見せたら減るように金塊展示され
 一度金塊を見に行こうか佐渡ヶ島
 現実に戻り金塊あきらめる
 金塊が出て来たそんな他所のこと
 金塊を持たせてもろた事がある

重人 狸村 いわゑ 鬼遊 透太 透太 月子 太茂津 甘平 狸村 雀踊子 雅文 勝晴 シマ子 小路 幹齊 射月芳 トメ子 福本英子 萬的 正子 規不風 杜的 太茂津 紫香 天笑

鑑定の極印深く金の艶
 金塊はわたしの夢にも出てこない
 龍宮城にも金塊はなかったぞ
 金塊の町瘦せ馬は野に帰る
 金塊を埋めずめた亡父の地図がない
 朱印船の金塊抜け荷を知っていた
 金塊を抱いて死んでもつまらない
 過去帳の伏せ字金塊かも知れぬ
 金塊を見てるだんだん腹が立ち
 金塊も隠してあった鬼ヶ島
 木簡に金塊とあり雪が降る
 誰も信用しない金塊を持つてゐる
 金塊をみつつけに海へ出たまんま
 金塊に勝る子がいる孫もいる

兼題「食べる」

福浦勝晴選

笛生 幹齊 一高 作二郎 規不風 元紀 満津子 保州 惠美子 雅文 作二郎 白兎 月子 諷云児

食べるだけたべて喋って娘は帰り
 ひと電車遅らすうどん食べている
 食べることしか考えぬ冬炬燵
 それぞれがそれぞれ食べる朝の膳
 エスカルゴ食べてシャンソン酔い心地
 政治家の嘘を食わない票握る
 食べのこす事を覚えた自己管理
 山海の珍味もてなすシャンデリア
 蟹食べる夢中へ猪口は忘れられ
 金の卵を生むかも知れぬ食べ盛り
 会費ふんだけばきつちり食べてくる
 お茶漬サラサラ本当の自分とり戻す
 飽食で童話にならぬ雀たち
 節分に残った豆を食べている
 食べころと母の小包つづく愛
 残飯を食べるベットのが見当らぬ
 手の込んだ野菜は食べぬ息子たち
 放哉のころで食べる独り飯
 半世紀も働き今日も食べてます
 草食のあかしを化石に残す龍
 三分粥ははが食欲取り戻す
 すき焼きは嫌い贅沢いうている
 夢食べてまだまだ胸をふくらます
 マドンナは喋る食べるにコンバクト
 グルメ旅終わつてからの海苔茶づけ
 トンボリのカラスグルメを食べあせり
 三杯もちらりと嫁の目が動く
 さてどれに箸をと迷う京の膳
 蟹食べに行く山陰の深い雪

元江 正子 冬葉 福本英子 憲太郎 二三 天笑 雅文 白漢子 元江 洋敏 楓 正坊 惠美子 千乃子 柳伸 月子 瑞枝 妻子 どんたく 荒介 笛生 みつ子 翠公 新正子 頂留子 千秀 甘平 笛生

ハンバーガー フライドポテト バックパック 勝 晴

兼題「水道」 春城 武庫坊選

水道がひけて忘れた水の味
胎盤に繋がる水道の蛇口
水道がもれてる飢えの音をして
何回も砥を洗って来た蛇口
共同水栓人情あつち島の人
蛇口いっぱい不満の妻は荒れている
水道のホースへ親子の笑い声
水道も春兄の噂を聞かぬまま
下水工事わが家の前で予算切れ
立札に水道完備とある野原
蛇口全開議事堂の泥流す
長男誕生水道料も跳ね上る
蛇口から鬱がもれてる夜も更ける
水道の水は敬遠する茶の湯
焼跡で水チロチロと泣きし頃
水道のうまさ外遊してわかる
底辺の修羅うたいづく下水道
妻は留守水道の水飲んでおく
寒風へ水道管の不整脈
水道が通った夢を見る砂漠
朝シャンが長引き水道瘦せている
水がめの琵琶湖汚れていく怖さ
街に住みカルキの匂いに馴れました
水道がこんなに美味い二日酔い
水道になって忘れた水の恩
お湯の出る蛇口に甘えすぎないか

信義 荒介 幹齊 荒介 萬的 千万子 愛論 惠美子 結美 絹子 はつ絵 光代 敬 右近 仙吉 美智子 幸子 寿美子 冬葉 白洋 シマ子 笛生 勝美 諷云児 みつ子 美代子

水道のカルキに慣れた街育ち
水道もわたしも錆びて来た蛇口
水道がひけ変わりゆく村の色
貧政の水道が掘りガスが掘り
名水と言う水道に住み馴れる
飽食の暮しを嘆く下水道
その内に蛇口から酒でるだろう
水道になって水神さま忘れ
下水道文化の淵が引つかかる
公衆便所の蛇口こわれたまま冬に
選挙カー降りて水道探しに行く
水道もテレビもついて今も過疎
焼跡に水道だけが生きている
水道のルーツに沈んでいる我が家
革命の種子を運んだ下水道

兼題「粒」 森中 惠美子選

節分の豆は一粒ずつ食べる
小粒ながら明日へ春が回り出す
一粒の種が妥協をしなくてくれぬ
マスカット一粒ずつにある主張
大粒の涙をわらう達磨の目
粒ごとにおんなの吐息抱くダイヤ
監督の頭離れぬ粒摘み
金平糖の一粒ずつが持つ野心
小粒でも六神丸にあるパワー
一粒の山椒明治の母が居る
大粒の悔し涙は腕で拭く
粒よりと言うから謀反したくなる

重人 寿美 満津子 甘平 柳影 典子 ダン吉 奏月 元江 笛生 作二郎 美代子 美房 満津子 武庫坊 八斗 寿子 美智子 寿美 結実 楓楽 翠公 武庫坊 小林英子 杜的 諷云児 達子

くらわんか番傘

創立十周年記念川柳大会

日時 4月22日(日) 午前11時開場
出句締切正午

会場 枚方温泉・イベンティ21
(京阪電車・枚方公園駅すぐ)

TFL 0720-4110021

座談会 鈴木如仙・加藤翠谷・松岡十四彦・森中惠美子・中田たつお

司会 住田英比古

宿題 「選ぶ」 山本 翠公選
「深い」 保木 寿選
「妻」 上田 斗六選
「手紙」 岩井 三窓選
「仲間」 橘高 薫風選
「明るい」 龜山 恭太選

事前投句 「ころ」 磯野いさむ選

※事前投句は3月末日までに〒572 寝屋川市成田東が丘15-1 丹波三千子へ

会費 2000円(合同句集・昼食呈)

懇親宴 5000円(大会終了後、同会場で開きます)

金魚とお喋り孫のご飯粒
粒となり山頭火が行く芒の野

一粒の重みたしかな可能性

ご飯粒を勿体ながり嫌われる

一粒の麦たらんとす多喜二の忌

一粒が重たい冬のさくらんぼ

飢餓の子の涙はいつも粒になる

一粒万倍昔ばなしになりそうだ

その内に米粒きつと怒ります

粒選りの真珠にランクつけられる

豆を選る一粒ごの子守唄

大豆の涙ばろりと悔いている

粒よりの梅ざしと来た母の文

粒あんの甘さにいつも騙される

三百メートル走れた頃の一粒よ

めし粒のついたズボンで逢っている

睡眠薬ひと粒持っている安堵

一粒の麦が聖書の中にある

ジャンタンの粒友情をたいせつに

ゴマ粒が爆ぜる身より大きい音をたて

小粒でも根性があり冬の天

けし粒と真珠の粒とどう違う

みんな小粒になって家族の灯を守る

不揃いの粒で世の中間白

花博の粒はレッスンしています

立春の金魚めし粒余さずに

てのひらの豆を数えてまだ死ねぬ

仁丹をこぼさしきくなるばかり

ひとりの部屋に豆が転ってる寒さ

小路

萬的

保州

福本英子

正坊

結美

薫風

太茂津

ダン吉

荒介

太茂津

度

トメ子

笛生

元紀

月子

理瑛

幸

奏月

美代子

悦郎

薫風

緑良

昭子

幹子

作一郎

一高

智子

恵美子

兼題「互い」

黒川紫香選

お互いの短所が許せない別れ

お互いがどうもどうもで通じ合う

童心にかえり互いに鬼は外

お互いに胃袋をもつ飲み仲間

お互いに年を取ったとクラス会

お互いに腹さぐってるぬるい酒

お互いにケチで友情続いている

お互いに顔見合わせる電話ベル

お互いの短所知ってる夫婦箸

フルムーン互いに少し派手を着る

札束にぐらり互いの胸の内

過ぎた人でした互いに言う離婚

迷い箸互い違いに遠慮する

無口でも互いに夫婦通じ合い

お互いに逢いたくなってる別居

お互いに欺し欺され夫婦です

北南互いに地球の上なのに

お互いをだいたいと思うかすみ草

凡々とお互いさまの箸茶碗

病室の親切お互いさまにする

お互いに背を流し合う嫁姑

葱坊主も互いに背伸びしてござる

お互いに息抜き出来ぬ棒グラフ

お互いに馬鹿な奴だと思ってる

へそくりのありか互いに知っている

お互いに意地張りあって別れない

君と僕の恋にも互いの壁がある

幸

雅文

柳伸

章

房子

月子

太茂津

正坊

雀踊子

保州

愛論

一二三

太茂津

白溪子

小林英子

洋敏

典子

奏月

荒介

笛生

風云児

萬的

千乃子

透太

保州

房子

幹子

お互いに悪友と言う仲の良さ

お互いに勝手なことを言い過ぎる

お互いの歳はふれずに冬火花

お互いに話し出すのを待っている

お互いに弓矢を捨てた老夫婦

年寄りが互い違いに過去を褒め

遺言のことを互いに口にしている

約束はないが互いに信じている

お互いに父より長く生きている

愛しあう互いの影絵美しい

お互いに骨拾い合う気で暮し

お互いにひとりお寺の塀づく

お互いに老けたと思う久しぶり

互い違いに出動をして夫婦なり

川柳塔社常任理事会 (2月1日)

▽四月の本社句会を羽原静歩句集『雪月花』

発刊記念句会とすることを決定

▽榎本路児(大阪市)長谷川司(大阪市)芳

鉄心(守口市)松川芳子(京都市)の四氏

の同人推薦を了承

▽川柳塔社業務運営規定案について審議

▽本社句会の出席者を増やす方策について各

自から提案があり、審議

▼本社句会期日変更について▲

会場の都合により3・4・5・7月の本社

句会の開催日が次のとおり変更されます

3月8日(木) 4月6日(金)

5月2日(水) 7月6日(金)

満津子

透太

奏月

小鹿

悦郎

二南

恵美子

満津子

作二郎

美智子

右近

恵美子

楓楽

紫香



菊田いさむさんを悼む

黒川 紫 香

一月三十一日、菊田いさむさん突然の訃を聞く。まさかと思う驚きと二月二日のお葬式に参列して現実の切なさをひしひしと感じました。噫悲しい哉。

いさむさんは、お仕事の関係で川柳塔への投句並びに本社句会の出席は久しく遠のいておられたので、ご存知の方も少なくなつたのではないかと思います。

川柳雑誌社時代、私の後任として句会部長を担当され、よく麻生路郎先生のお宅へ伺つたものです。その後、川柳塔では同人として常任理事、そして参事として尽力していただいております。はたまた、阪急電鉄社員として私及び小池しげおさんと阪急川柳会を盛りたて、現に亡くなられる直前まで、社内誌川柳欄の選者として指導されていました。数年前亡くなられました同人の西川善繁さんはお弟子さんでした。

実直で気取らない性格は、名部長として司会にも定評があり、路郎先生お気に入りの一

人でした。顔を見せられぬようになった最近でも、お住いが洛北にあるため、京都塔の会の吟行にはいつも元気に参加しておられました。

あらゆるスポーツに堪能でしたが、野球とゴルフがうまく、特にゴルフの腕は確かだったようで、晩年、阪急系列の丹波にあるり溪開発ゴルフクラブの責任者として赴任されることになり、奥地のため、車でなければ行けない所なので、六十の手習いで運転免許をとり、自ら運転して通勤される努力家でもありました。

永年、私と会社で机を並べ、いさむさんのことをよく知っているだけに、本当に悲しいことです。心からご冥福を祈ります。合掌。

法名 圓明院釈顚男

遺 句（阪急社内誌から）

あとはもう通院でいい試歩の足
やや褪せたコートで金を借りに来る
表彰式永年添うた妻と居る

川柳展望60号山陰大会

とき 4月8日(日) 午前10時半

ところ 松江市・ホテル一畑

会 費 一五〇〇円

題と選者(各2句・正午締切)

兼 題

「家」

金築 雨学

「水」

若草はじめ

「恋」

安藤 亮介

「遠い」

八坂 俊生

・雑詠(事前投句)

天根 夢草

・雑詠(当日出句)

橘高 薫風

寺尾 俊平

柴田 午朗

中尾 漢介

時実 新子

席 題

(1題)

* 雑詠は各選者に同一句を出さないこと

* 事前投句はハガキに2句を書いて3月

20日までに左記へ(投句は無料)

〒689-24

鳥取県東伯町徳万597

新家 完司

川柳展望社

■各地句会だより

川柳塔きやらばく

林 瑞 枝

「川柳塔きやらばく」というのは、華やかな女性ばかりの会と聞いているが、どんなわけがあるのかと問われることがある。そのキャラボクの樹は、山陰の誇る雄峰、大山の山領部一帯に生育する常緑針葉樹で、季節の移り変りの激しい山の四季に美しい緑をたたえ、秋には赤い可憐な実を結ぶ。八合目あたりにはキャラボクの純林が続いて、雄大な山の姿をかもし出している。

昔語りになるが昭和三十六年、女性十名が某日・某家に集まり、決選投票で名付けられた「米子きやらばく川柳会」が、現在では「川柳塔きやらばく」の名で全国各地の川柳界でささやかれ、名が通ってきたようだ。

定例会は毎月第二水曜日、公民館研修室で開く。会員は四十二名だが、専業主婦は少なく、仕事を持っている者が多い。米子商店街で手芸店・小間物店・陶器店・洋装店・装

身具店・画材店を開く人、会計事務所、書道家、舞踊家、教師エトセトラ。それぞれに多忙で、例会に集まるのは二十数名だが、兼題二題・席題一題で、選者は川柳塔同人があたり、披露の後で没句の検討会をやり、みんな楽しんでコーラスやダンス、民謡を踊ったりする。

そして年一回、毎年十二月の第一日曜日、

「川柳塔きやらばく忘年会」を開いており、昨年十二月三日、第二十五回目の忘年会を行った。『投句拝辞』という厳しさを、兼題



十一題を出題、選者は出席のお客さまの中から当日決定ということ
で、選者に
あてこんで
作句する
という器用な
芸当はでき
ない仕掛け
となってい
る。

会員一同、
胸をワクワク
クさせなが
ら待つ大会

場は、米子駅に近い「米吾ビル」で、大阪から橘高薫風先生ほか七名、四国から瀬戸大橋を渡って若草はじめさん夫妻、広島から小島蘭幸さん父子、岡山の岡田千茶さんほか八名、倉敷の田中好啓さんほか四名、新見の多田あや子さんほか二名、出雲・平田・松江・鳥取・鹿野・倉吉・赤碕・東伯等々百数十名という予想以上の参加を得て、昼弁当を急遽、追加注文という嬉しい悲鳴となった。

満場の拍手に始まって盛会御礼あいさつ、祝辞、花束贈呈、金屏風を背にした選者の入選句発表は緊張そのものでしんと静まり、じつと耳を傾ける会場風景。

別れたいひとの喉の白さよ一葉忘
一匹の蝶が男の部屋で死ぬ 千茶
生きたときをときどき振り返る 芳子
ある予感バスを一台遅らせる 鬼遊
母の眉日にちくずりを信じよう 射月芳
深海魚 君もそんなに淋しいか 惠美子
秤の上で妻のハミングまだ続く 正坊
にぎやかな貨車が出て行く妻の喉 はじめ
入選句の一部を紹介したが、力作ぞろい
で圧倒された。忘年会は会員総出で、歓迎の歌
や踊りや芸の演出で楽しく過ごした。今回は
平成二年十二月二日、ぜひともご参集のほど
をお待ち申し上げます。



1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
 今日は23日締切。
 担当・玉置重人

おっぱこ川柳会

松村迷観子報

この辺で折れたい助け舟を待つ
 嫁が来て倅は近く遠くなり
 助手席が私に似合いの座り場所
 近よって見ても解らぬピカソの絵
 負け犬に助け舟出す親心
 四国路も近くになった瀬戸の橋
 近況を一筆添えて出す賀状
 木枯しが財布の中も吹いている
 助かった話の本がよく売れる
 近親の人みな無事で春を待つ
 近よると嫌だと鏡しわをよせ
 近くに居るだけで温もり分かる人
 瀬戸の橋出来たばかり知らぬ人
 カイワレに句という字が書いてない

川柳東大阪

森下

愛論報

慌てても海は昨日と同じ青
 しまいまで聞かずに走るあわてもの

悦郎
 頂留子

OLの自由が三十親慌て
 青い目の彼氏を連れてくる慌て
 慌てると言う本人が慌てて
 落ちそうな帽子看護婦手さびしい
 亡母の忌を弔うように椿落ち
 黄昏に落穂を拾う子らの唄
 金箔の落ちた仏像に手を合わせる
 Vサインの子を待つ母もVサイン
 サインだけで売る商法にある打算
 箱書にサインが生きた書画骨董
 往復切符買えたらあの世に行こう
 柿の葉の切符で乗れる縄電車
 つらい涙をおんなの城で拭く
 書齋へは子供も入れぬ父の城
 城いらぬ槍が望みと黒田武士
 切符持ち鬼が待つてる曲がり角
 ギリギリの招待券をくれる奴

川柳化粧槽

植村客遊子報

地藏さん守って過疎で老いている
 好きな事に使うお金は惜しくない
 世渡りを嫁から習う新時代
 コスモスも来年此処にビルが建つ
 迷信だとそう簡単に割り切れぬ
 二人して笑えば尚更面白い
 薬屋根の温き故郷という安堵
 五時から男が夜をかつ歩する
 夜遊びの証拠はいらぬ花名刺
 そもそもは屋台で知った縁でした
 席ゆする勇気がなくて寝たふりし
 姿見のオバタリアンへぞっとする

隆 慶 三 度 柳 喜 猪 美 晋 勝 文 孤 公 不 辰 愛
 論 士 宏 風 郎 吾 美 秋 舟 一 二 藏 久

聞き合わせ褒め過ぎたのも気にかかり
 信貴の山張り子の虎が首を振る
 喜べば福が又来る人の常
 荒れ性の手が早秋を知っており
 ジャンボくじ当らぬ夢の予約券
 片付いた事にして聞く除夜の鐘
 瓜ふたつ親によく似た男の子
 正調の民謡を聞く故郷なまり

堺川柳会

宮本かりん報

嘉 姫 女 好 花 遊 永 客
 子 章 峰 楽 遊 子

朝霧をついて着陸渡り鳥
ケセラセラ突き当ってもケセラセラ
夢の中好きだと言つてくれました
御機嫌な朝だ茶柱立っている
当りどこ悪いと炎える不発弾
憧れの色を話せば褪せそうで
集つて人のぬくみを重ね合い
空っぽの頭でコーヒが旨い
遠景の丘に憧れ秘めてある

南大阪川柳会

中川 滋雀報

雪こんこ不思議な話してあげる
不思議なことに春には春の花が咲く
好きな事すると不思議につかれない
不思議にも瘦せる薬でやせました
ギャンブルの儲け不思議な羽根を持ち
手の内をすっかり読んでいた不思議
少しずつ無理が溜つた蟻地獄
母としてときどき無理をしてしまふ
無理するな明日もあるよと石を積む
につこりと笑つて女無理を言う
素人の恐さは無理を押しつける
無理通し心のヒタが深くなる
あの頃の無理胃カメラに思い知る
ネクタイをゆるめ紳士の面外す
体力の衰えを知るゆるい坂
忘れ物あたまのねじがよくゆるむ
スバルの父氣にくぬゆるい坂
白曜の朝寝心地のよいゆるみ
ネジゆるんだままが程良い嫁姑
帰省ラッシュゆるい流れに逆らえず

東雲 都子 星子 凡子 あかり 春香 月天 天笑 奏月 度月 頂留子 真柳 喜風 シメ子 滋雀 智子 善信 和子 勝美 ハル子 岩信 楓楽 庸佑 鬼遊 憲太郎 寿子 文江 清水

飼犬に噛まれる寒い日のルール
輪の外でルール違反をくり返す
口止めは飴玉ですむ子のルール
窓明けてルールを変えな若い風
夫婦というルールの中で老いている
ブレスはルールを守る方が負け
どっちにもとれるルールで又もめる
上品な言葉できつ釘をさす
上には上馬鹿は一人じやなかったよ
上からの圧力口をつぐませる

倉吉川柳会

渡辺 吾告報

二の舞を演ずるうちは生きている
使われる立場になつて知る情け
てきばきと何でも捨てるうちの嫁
ホーナスを使いきれない夢を見た
てきばきと母がほだいたもつれ糸
時々百点もらう夢を見る
使えらと入社時から目をつける
椿落つとして二の舞三の舞
てきばきとこなしマドンナ幹事長
母さんの来た道娘には歩かせぬ
ジャズソング歌う二階の音に慣れ
花嫁も我が家の味に慣れて来る
二の舞の次はててこ舞だろ
ヨーロッパ序の舞二の舞三の舞
ゆつくりと慣れてながいおつきあい
何遍も同じ轍を踏んでいる
離婚印てきばき押せるわけはない
時差呆けという贅沢なボケもある
あるときは寒い世だねと薔薇が咲く

作二郎 冬葉 柳伸 トミ子 雀踊子 新造 柳宏子 公一 章久 文秋 康志 碧水 千代子 和枝 雄々 次男 喜美子 京子 満春 秋女 瑞枝 ゆり子 とみお 石花菜 完司 荒介 御前 独歩 菩句

三幸川柳教室

桜井 千秀報

さりげなく慕情おさえる別れ道
琴の音が誘うがままに想夫恋
慕つてた先生飲めば泣き上戸
面倒見よいとメダカも慕い寄る
慕い寄る小犬無職の手に甘え
北風に思慕の絆が纏れ出す
遠い日の思慕が眠っているタンス
ビリで出た有名校を鼻にかけ
一字だけ有名人の名をもらい
スターの座について孤独を強いられる
名を馳せた人の墓石がわびし過ぎ
名工の寺社に残したノミの跡

玉枝 幸実 結実 三千子 高夫 又好 美子 美美子 晏 孝子 千枝子

佳句地十選 (前月号から)

羽津川 公乃 選

奥様のビールと知らぬ御用聞き
ガラス拭くはつきり明日が見たいから
引き金を引く合図ならまだ出さぬ
隠れみのにする友達がいってくれる
父のない家から先に陽が暮れる
神様の眉にはいつも気を使う
集金に來たのに菓子とお茶が出る
訥弁な人だと印象に残り
金のいる話になつてみな黙る
好色の虫を一匹胸に飼う
美代子 正枝 いわゑ 文子 千代 諷云児 智子 紫香 洋々

名を上げて故郷の土踏みしめる
無駄はよく企業整理へのつて秋
足跡の無駄は数えぬことにする
無駄のない男が好きで正誤表
摂理には無駄などないと言葉散る

オーバーヒートしそうな一意見など
子の部屋をまた片付けで叱られる
無駄なこと一つもしないのも悲し
ぶらぶらと歩いてうまい話聞く
ぶらぶらとして渋柿甘くなり
ぶらぶらと来て鳩の群れ驚かし
ぶらぶらと来たが帰りは遠い道
ぶらぶらのつもりが犬にせかされる

川柳塔きやらぼく
政岡日枝子報

転ぶたびゆっくり立てと亡兄の声
幸せを薄く伸ばして終の章
石をはね小さな幸が庭に咲く
小春日に幸せそうな猫のひげ
虹の彩抱いて幸せ追っている
幸せの種が芽吹いた巡り逢い
幸せの絵を描きに発つ二人旅
幸せの唇またたく間に流れ
陽に抱かれ幸いっぽい花の精
幸せを隠したいけど瓶がない
しあわせはうどんなの長さ胡椒の味
幸せに皿をみがいて母となる
てのひらの幸は逃がさぬよう握る
幸せな笑顔 王妃となる指輪
幸せを皆で分けて身が軽い
思いなおして幸せな色に仕立てる

桂 香 鉄 治 千 秀 保 州 公 子 かなめ 重 次 親 路 和 子 正 雄 茜 可 笑 智 水 庵 夕 子 日 枝 子 朗 子 ゆ き 紫 泉 て い 子 花 子 玲 子 千 春 智 加 恵 八 重 子 や え 亜 弥 登 栄 恵 子 ふ み

今ここに五体が動く生きている
幸せか宅配便が聞きに来る
母の振るタクトに幸福論がある
掌に残る小さな幸を落とすまい

川柳岩出

小倉

アサ報

福相で一生涯で世を送り
紙切りの至芸へ拍手とまらな
千代紙の折り千羽の鶴が舞う
学期末紙の知能で縫れたす
頂上へ登り切れずに去る無情
後退り描にかぶせた紙袋
霜踏んでジョギングに出る白い息
風向きも手の鳴る方へ去って冬
芳りの言葉空しい紙風船
残留孤児一通の手紙に母泣かす
福の神今日も笑顔でおむかえに
捨てたがき過去は私の生きた張り
去って行く靴音冷めた耳で聴く
一葉の葉が母の日に残る

岩美川柳会

羽津川公乃報

玉串を捧げ今年の厄払う
勉強すると約束させたお年玉
悪玉がいるからドラマ面白い
玉の汗働きすぎを責められる
そろそろと仏の道が見え始め
凍結児育ち始めて波紋呼び
着物きて大和撫子とり戻す
和服着るおんなの肩にあるゆとり
原点に還ってもつれ糸を解く

富美子 正 子 瑞 枝 千 代

忠 雄 瑞 穂 綾 子 和 子 春 子 義 美 永 年 ア サ 愛 子 喜 市 千 代 子 昌 子 精 子 与 呂 志

長 治 美 代 子 單 車 大 漁 民 子 芳 江 公 乃 美 恵 子 忠 良

点取り虫ママが大事に飼っている
童貞のときに泳いだ川がある
おだやかな川から海に出て生まれ

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

孫に似たナースに痛さこらえてる
眼帯が取れて嬉しい帰路の娑婆
耳慣れた頃は廃れる流行語
紅という字を習う雛の宵
ボーナスを数えに入るWC
火山灰昔はここまで降っていた
贈賄と言っ程でなしお年玉
集会にランクをつけて来る代理

西宮北口川柳会

林

はつ絵報

古い二人過疎をまもっている囲炉裏
顔二つ持つて乱世をのし歩く
二日酔昨日の嘘が胃にたまる
山門の仁王が睨む初詣
合鍵があるからもっている自由
白い手にすこし油断をしてしまふ
初めての手話が通じた交差点
手の内のカードわかれは唯の人
言葉なく手を握りしめ友見舞う
手をたたき夫が私をすぐと呼ぶ
母の手を転げた毬がよく弾む
所詮他人とおもふ冷たい手を離す
孫の手はいつも小さくあたいたかい
手を温めおむつを替えてあげている
宇宙より重い命の人と住む
宇宙人にさらわれたよう一家消ゆ

照 女 螢 由 多 香

タ ミ 幸 夫 朴 竜 四 郎 高 明 旭 恒 虹 汀 正 敏

萬 的 武 庫 坊 め 女 圭 坊 夜 船 い わ ゑ 園 歩 香 子 ト ミ エ 江 美 た ず 子 河 芳 子 京 童 は つ 絵 み つ 子 よ し 津

泣き笑いそして宇宙に生きている

宇宙からやがて農家の嫁が来る

月の土地までは地上げ屋手を出さず

宇宙から見れば点にもならぬ僕

宇宙から来たのか甲虫羽休め

にぎりめし頬ばりながら宇宙論

たこ焼に言いたい事がたんとある

見たような景色見てきた美術展

ちびた駄囃し見話を持ってくる

ラムネ飲んでから言訳を考える

始まる終点がない母の愚痴

手を合わす日課へ鬼も近寄らず

世界中日の丸立てて家に無い

煮え切らぬ男の好きな阿弥陀くじ

着ぶくれを互いに猫背笑い合い

善い種播いて神の暗示が吉と出る

年賀状また友達が増えました

追討ちに初荷の法被春の陣

手際よくことを運んでいる無口

色メガネ外すと恐うこともない

お年玉ママが貰って離さない

雨水をどこで宇宙が溜めるのか

川柳ささやま

遠山

可住報

珍客にされて無心を言いそびれ

疑いが消えてうれしい酒を酌ぎ

それからの涙が消える愛消える

ライバルを追い越し越され鞭とする

消えそつな民話を野仏抱いてはる

二人なら越せる火の輪へ寄せる肩

灯が消えた島に炎えてる娘が独り

芳子

石舟

三男

東角

杜的

正坊

白溪子

諷英子

光代

伊三郎

保州

春蘭

千世子

美智子

紀雄

千秀

嘉矩

しげお

急用で来た本論は金のこと

年越せたベッドの息を見る安堵

越して来た八十年にあるドラマ

嬉しくて明日を夢見る灯り消す

故里の酸素は消えず水が澄む

急用へ足袋のこはせが横を向く

明日の夢乗せると消えるシャボン玉

八尾市民川柳会

飯田

悦郎報

酒飲みめの年始回りも断われず

借金のことわりも書く年賀状

目出度くも姓が変わって来る賀状

部下一人年賀に酒をさげてる

待っているのは一枚の年賀状

白陀助に年賀のことば口ごもる

上司まだ乾杯欠伸しています

乾杯で父を泣かせた披露宴

肌で感じるそんな乾杯してみたい

乾杯で早く消えたい二人です

地球儀をくるりと回し乾杯す

許してやろう乾杯してやろう

石段を駆け抜けて行く白い息

石段の一段ずつに試される

石段が遊び場だった童唄

石段の一段ずつにある祈り

石段を登る度に捨てた欲

山寺の鐘石段を降りてくる

馬持参合戦に出るエキストラ

優しげな目で疾風の足を見せ

悪人が乗ると馬はよく走る

大向から声かかりそう馬の足

素水

百合子

千代子

きし江

富美

文平

可住

春堂

雅士

頂留子

シマ子

冬葉

作二郎

正好

章

泰

三男

一志

一高

宏子

柳伸

喜風

朝子

信博

しんじ

悦郎

和子

種馬が空の青さに満ち足りる

甲狀線ホルモン補給で脳が冴え

冴え渡る月を背にした道祖神

明日見えぬ冴えぬガラスを身てぬぐい

もつすぐに生れる二人へ月冴える

霊峰を映す水面の冴えたる蒼

包丁が老舗を守る腕の冴え

川柳塔とつとり

岩原

貯めている噂暮らしはつつましい

年金をほそぼそ貯めて孫にやり

貯まるのを待たず銀行追つてくる

老いらくの恋へ年金貯めておく

ボロボロの鎧に貯めている不満

年金が少し貯まると飲みに行く

馬の脚いつか主役の夢で耐え

馬蹴りにあつぞマドンナ手を出すな

競走馬秋になっても肥れない

馬乗りで遊んだ親を見離せぬ

馬年にあやかり一蹴りしてみたい

ライバルを追い越す天馬見付けたい

生き馬の目を抜いてかた帰郷する

マイカーを預け宴会飲むつもり

忘年会ライバルも呼ぶ年となり

宴会が済んで幹事は急に酔い

宴会であつばれ敵の酒を呑む

しんしんと二人の宴雪になる

割り勘という宴会へ下戸をつれ

川柳泉尾

吉川

寿美報

重人

美津留

弘直

東雲

美幸

隆

とみを

粗粒

林太郎

一枝

由多香

帆蜩

俊路

砂山花

侑里

艶子

秀和

旋風

大漁

多可志

友夫

喬水

山人

圭一郎

洋々

ほんの少し毒気あるから味がよい
 寒い朝一杯のコーヒーで暖をとる
 貢繰る音も微かな秋夜長
 再雇用踊り疲れてきた雀
 乗り越しの不覚さりげなく引き返す
 税通知重たく雪がのしかかる
 やせ犬の肩を哭かせて雪やます
 雪の朝晴れた高野が美しい
 一まわりしたお歳暮の御帰還だ
 お歳暮の人氣をつむむ包装紙
 音たてて時代の流れ過ぎてゆく
 音もなく忍び寄るのはガンと老い
 雑音に惑わされずに咲いた花
 音のない女一人の風の音
 朝の音朝の匂いに起こされる
 音沙汰の無い子を元氣だと思ひ
 公害の聞こえぬ音に悩まされ
 階段の上で他人の顔が住み
 異動時期ひしめきあっている階段
 人生の長い階段のぼりつめ
 身の程を知るのは階段降りる時
 危険とは地獄に近い階段よ
 御仏の導く階段罪を消す
 螺旋階段一部始終をみてしまひ
 食欲に生きて階段踏みはずす
 螺旋階段キミの心がまだ見えぬ
 降る雪のびようびようとして譬女の三昧
 童唄でんてまりの碑を見付け
 国際電話二人の絆深くする

いくし川柳会

奥山美智子報

靖子 まち子 あさこ 満洲子 きよ子
 美南子 義一 シマ子 三世 淑子 洋子 敦子 弘子 シメ子 美津子
 (幸)文子 三千代 途子 良子 功子 マリ子 美代子 はつ子 寿美 トミ子 白水 伴子

紀子さんの納采祝い初句会
 貧しくも輝く朝だハイチーズ
 寒風の航路に輝く北斗星
 輝いた過去を背負っている重荷
 輝いた過去が時折邪魔をする
 寂しくもないが輝くものもない
 輝きのあるうち辞表の墨をする
 イミテーション輝き過ぎるので困る
 輝くものに母の日の母の背
 少年の眸が輝いて宇宙論
 境内にシヨバ割り待っている焚火
 境内を穢してならぬ仁王門
 境内を斜めに抜ける土地の人
 かくれんぼした境内が狭くなる
 境内を目安にしている万歩計
 再会のときめきワインレッドかも
 マラソンのスタート苧を洗うよう
 人不足と言うがギャンブル人の波
 薬飲む夫婦で痛み分ち合い
 別れ際やさしい言葉添えておく
 お屠蘇祝つてやっぱりコーヒ欲しくなり

川柳藤井寺

高田美代子報

伊三郎 保蔵 女 芳子 歌子 嘉矩 諷云児 白漢子 杜的 はつ絵 正一 しげお 紫香 天樹 いわゑ 英子 石舟 柳影 園歩 美智子 萬的 悦子 友呂志 美房 敏 義一 志洋 治子 三郎

幸せは金ではないが金がいり
 胸に穴あけて終った恋ひとつ
 金欲しい人をだまして金欲しい
 狭き門金の力でこじあける
 終りから出発点に立たされる
 重役の兄弟妻がまた姉妹
 本当の終りは石の下にあり
 ひと言にワザビ効かせて締めくくる
 終電車面面相が並んで
 炎と燃えた花の終りは地に帰る
 冬霧に溶けて終止符打った恋
 恋終る残照胸に秘めたまま
 老いの趣味終りはないが進歩ない
 終章のきれいなドラマ考える
 回らずにどこに淀んでいるお金
 今日も無事ラストの灯り消す安堵
 お茶漬の音さらさらと年暮れ
 金余る国で細々暮らしてます
 金持ちの国で地球も熱を出す
 純金の表札にしようかなとおもふ
 黄金の日々が枕を通り過ぐ
 終電が続く戦士の二日酔い

翠洋会

中西兼治郎報

きよし 吸江 宗一 たかし 修六 みのる 比呂志 寿美子 美佐 和美 彩 雅美 敦子 正枝 婦美枝 信二 祐男 須美 一屯 和子 美代子 兼治郎 宣司 絹子 みよ子 凡子 英一 恭昌

嘘も方便仏さまも言うてはる
 少しずつコロソボ刑事嘘剥がす
 自分に嘘ついて自分に負けている
 両の手にみかんまだ欲し孫の顔
 まちぼうけ動く木馬をみつめてる
 税務署へ今年も嘘をつきに行く
 卒業写真まだ壁知らぬ青い風
 幼な子ももうそ言えなだけ知恵の伸び
 蜜柑たべながら落語を聞いている
 青写真だけは出来てるマイホーム
 話半分嘘がとっても面白い
 農政に策なかりしやみかん山
 人妻に心が動く春の雪
 赤ちゃんの動きをあきもせずながめ

高槻川柳サークル卯の花 辻白溪子報

すすむ 正雄 楓 良江 照子 為子 さと美 綾子 登志美 光子 みつ子 いつて 正坊 鬼遊

体重計スリムになって今日ものる
 ひと言ですむ口実に馴らされる
 騙されておこう八十路の勘たしか
 いつからか歌詞が抜けてるかぞえ唄
 電話口母の鳴咽が漏れて来る
 上げ底の菓子を買わない旅土産
 男はいつも下手な口実考える
 賀状書く騙されたけど別れたけど
 手を切った女が漏らすスキヤンダル
 ころよい疲れ夫の腕枕
 羅漢群像人を騙せる顔はない
 京の旅視界にいつも塔がある
 スタイルが気に入り薄着しています
 お祝儀を挟む隙間が帯に有る

京都塔の会

松川

杜的報

房子 節子 静江 美智子 芳子 志子 芳子 作二郎 正坊 磔 萬的 杜的 風云児 紫香 白溪子

冬の雲津軽の海を越える鳥
 越えて来た峰を仰いで見る夕陽
 同伴で帰って来いと許す父
 せかせかと注ぐとお酒がこぼれます
 同伴ばかりでとお通夜のようなバスツアー
 罰が当たると大正っ子は信じてる
 極悪人と呼ぶだけでは済まされぬ
 オバQの口から漫画が呼びかける
 二度の職もつ人生の山は越え
 熟年のペアルックでデザイナーショー
 同伴の妻涙ぐむ受賞式

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

紫香 べ女 風云児 いわゑ 杜的 年代 白水 白溪子 飛鳥 倫子 明治 典子 康子 柳風 小鹿 静歩 喬水 たつみ きみ子 勝見 孝恵 紫泉 節子 妻 幸子 邦俊 螢

さて何を探していたのかも忘れ

岸和田川柳会 植山 武助報

代理にも頭数だけ要るリボン
おふくろの味には誰も代れない
十二月 代理の用が多すぎる
代理人が来て慰謝料がはね上る
鍵っ子が母の代理の米を研ぐ
謝まれば許す氣でいる父の眉
もう一人の自分を許す孤独の夜
仕様ない方ねで許す小さい罪
許し合いの労わりあって共白髪
舞う蝶に心許した花の芯
トラブルを無事に治めた友の顔
一度だけ許しころがる雪達磨
今日の無事喜び告げる仏間の灯
戦乱を無事生き伸びた古希の顔
厄払い祝いか還暦無事迎える
分教場帰りにみんな見舞つて
手伝いの人くる前に掃除する
孫連れて港めぐりの船に乗る

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

くたびれた靴が主を待つて朝
心臓の高鳴りおさえ口火切る
夢もあり希望も持つて口火です
末席がけろりと口火切らされる
イガの中でじつと耐えてきた自信
冷戦へ口火の種をさがさねば
敗退の口火となつたりクルート
使いすてカイロの愚痴が聞えます

弘 朗 喜久子 すみえ 武助 初太郎 ひで 狸村 一弥 白光子 通彦 甘平 希久志 射月芳 浪速子 富志子 ダン吉 けい子 さよ子 笑子 ヒデ子 好栄 聖子 智重子 はるみ 歳栄 民子

イガのある言葉のうらはは丸かった
弱点を見つけたカイロは優しくて
イガ脱いで熟年の栗飛びはねる
なべ鶴の傷心天を向いて鳴き
火の粉あび生体移植の口火切る
色づけはイガも何時しか妊りぬ
無理強いをするからイガに突きささり
うかつにも火のないカイロに氣をゆるし

川柳塔まつえ

恒松 町紅報

賽コロに集う孫らの初笑い
一の目のない賽コロを持つている
振り出しにもどる賽コロばかりもつ
賽の目を信じひたすら春を待つ
賽コロの転けたところが正念場
負けいくさ賽の目はかり気にかかる
古びたコハゼ輝く母の足袋
駅伝で輝く汗がふかれぬ
逆運に強い女の輝く瞳
以下同文そんな輝きだつてある
美しい写経の文字が輝いて
浮氣した風電線が描まえる
空に舞い糸からまった風の恋
けんか風日本は平和だと思ふ
なまぬるい風がきらいな冬の風
二十一世紀へ父と子の風もつれ合い
初夢は見えてはけない女のこと
初夢にうなされていろくでなし
とりとめもない初夢で忘れま
初夢がよくて一日上機嫌
いいいいびきいい初夢を見てるだろ

鈴江 惠美子 かつ子 北斗 博利 世利 清泉 白汀 房小 鹿子 小みえ 秀子 多賀子 妻苗 友枝 芳枝 たつみ 米子 満江 清志 煩惱児 雄々 寿美子 代仕男 静恵 静江 章峰

川柳塔わかやま

牛尾 緑良報

仲よしに会うドングリを握りしめ
鍋囲む二人に言葉などいらぬ
母に成る日の陣痛は避けられぬ
成し遂げて王座の席に居る孤独
馬鹿に成ることも覚えた宮仕え
名を成して土堀を高く高く積む
和解成立互いの意地を笑い合う
宝物大事に大事に母に成る
もう今は花を選ばぬ蝶になる
逝つた児と仲よしだつたつくしんぼ
仲よしの炬燵が今日も引き止める
仲よしの土へ光らす鉄の先
一病と仲よく過すこつ覚え
孫と仲よしママに内緒を聞かされる
仲よしと妻に言えない女がいる
仲よしの演じさせては妻が上
仲の良さ保つスーパは届かない
一步一步と仲良くゆく私
鍋割れておんなの忍が洩れてくる
冷戦の妻はやたらに鍋磨く

幸三子 長子 文子 舞吉 鶴丸 登志子 日出子 与根一 町紅 裕美 三男 武雄 栄美子 鉄治 稚代 登志代 英子 豊太 輝子 光代 公子 信子 結実 正博 愿 阿サ 三千代 信秋 紀美女

新婚の香りお鍋が美しい
鍋焦げた臭いで切った長電話
鍋つく男の顔は隙だらけ
何事も無くておでんが煮え上る
鍋の蓋わたしあなたに合わせます
老夫婦一度の鍋で二三
豊かさに手鍋の門出忘れ去り
ストレスでお鍋ピカピカ磨いてる
ナアお鍋美味しい味を作ろうナ
鍋底に女の愚痴がよく溜る

穂田 豊作

穂田 豊作

穂田 豊作

赤信号ばかり出すのも母心
耳を下さい悲しい私の願いです
衣食住足りて貧しくなる心
耐え抜いた心の掛け橋長島の橋
幸せな心に鳴らす古希の鈴
真心が拙ない文に乗り遅れ
心もちゆとりが出来て旅にも出
勤ける幸せ心も軽い朝
心底から笑うことなし耳しいて
摩訶不思議奇妙キテレツ心かな
心には母の無形の遺産あり
あれこれと心積りで仕事溜め
年取れば心の友が居て欲しい
舌足らず誤解招いた話し合い
怒らせばチエツと舌打ちしかめ面
舌先三寸言いつつまれて秋の風

いさり火川柳会

尾崎三代治

デマ一つ平和な街を吹き抜ける

八重子

新刊書ばかり買ってくる女

柳公

ストレスをモカの香りに消してみる

洛醉

千寿子 紀久子 照子 桂香 克子 忠 瑞穂 遊美 凡九郎 三枝子 豊作 三香 柳香 八恵子 真女 みつる 和江 文古 珍妙人 進一 静子 健太郎 美乃留 行江 一咲

消費税不満の風が吹き荒らす
吹く風のままだに終った鐘を聞く
口笛を吹いてときめきやわらげる
民主化の風が地球を吹きまくり
バーゲンに鼻息荒く手が伸びる
白い息の向うの春が待ち遠し
寝息から今日の疲れが漏れてくる
駒つなぎ川柳会 里

小路報

悪だくみ山吹色も添えてある
策士とは知らず告白してしまつ
腹の立つ言い草顔は笑つとく
旦那より腹のすわって居る女将
クロスワードの答えヒントに策がある
事なかれ主義で前例ばかり言つ
本気にさせた女のだまし舟
禪寺の廊下の艶から冬になる

東雲 冬葉 幸治 頂留子 文秋 重人 雀踊子 萬的

火祭りの艶めく髪に好きと言つ
愛着の度は聞かずとも石の艶
秋潤歩腹は自然に空いてくる
どないしても収まりまへん腹の虫
サラ金へ万策尽きた顔がくる
東洋平和と心にもない策略で
例えはの話に嘘も少しある
肩こらぬ旅の友する小冊子
独学ですり切れるほど本を読む
例のない話へ印がたんといふ
土壇場にならぬと腹がすわらない
それからの話は腹のさぐり合い
老兵の経験物言う策に乗る
根回しが効いた確かな打開策
祖母の出し都にのぼる古い壺
本名を忘れて生きる釜ヶ崎
おじいちゃん大好き絵本読まされる
良い例が身近にあると論される
例題が良すぎタルマになっている
新刊書ばかり買ってくる女

武士 智恵子 由多香 孝人 三代治 豊子 伊都子 英一 翠公 正好 章久 甘平 遊美 勝一 善信 射月芳 浩一郎 比沙胡 隆二 悟郎 白兔 憲太郎 寛然坊 恒明 庸佑 柳公

駄法螺吹きゆとり見せるが火の車
通帳にまだ残高があるゆとり
春を呼ぶまず戎さんで福貰い
宵戎福笹担ぎ子が走る
お参りはテレビですます十日戎
福笑い一年分の糧稼ぐ
幸せのバズル解きたい初戎
祝電を打って半分始めている
補聴器を掛けて祝詞を聞いている
平穩を何より祝う新世紀
お雑煮を祝い童にふと戻る
祝日の日の丸遠慮深くゆれる
狭みを外して祝いの席にする
初夢はお札の山に迷いこみ
一里塚越えて焦らぬ丸木橋
百度舌願いがひとと深くなる
お正月ぬくもるまな母の席
まだ夢をいくつも描いて古希の新春

敏之 紫香 寅之助 向西 夢之助 保蔵 弘治 歌子 六浦 澄子 いわお すみ 定人 石舟 十四郎 美智子 昌子 武庫坊

洒落言つたつもりへ意味を尋ねられ

しげお

ノドボトケこ一番にたじろがぬ

重人

有難いお水邪心を捨てさせる

与呂志

どの顔も恵美須さんです大浴場

鉄心

慢心をえぐるチャンス待つ刃

本蔭棒

一泊でいのち洗つてきたいで湯

金太

真相をえぐつたペンは剣に勝ち

一步

高卒が億積み上げられてプロへ行く

美津留

くつろぎの宿で出会つた無愛想

雅巢

えぐられた言葉で一つまた学ぶ

凡九郎

スキヤンダルえぐる鋭いペンさばき

天平

糸を引く通りに踊る奴唄

敏

生き甲斐は文庫本読み酒を呑み

亮太

パート主婦朝の片付け分単位

正之

今日もまた新聞種を蒔く市会

柳弘

子に臓器えぐつて渡す強い父

幸一

カラオケのおはこを磨き新年会

哲流

マイホーム ローンが済んだ笑い顔

鈍泉

中流の意識を笑う家計簿

比呂志

温泉地惚れた病を引き寄せる

比呂志

川柳たけはら

森井

青居報

幼裕

二歩

美介

菁居

蘭幸

静水

ヤスエ

俊夫

ふさ枝

浪子

ひとりでもおはようおやすみ言つて寝る

房子

娘の暮らして親見て安堵する車窓

栄恵

八十の歩幅に合わす無二の友

喜美子

胃カメラがなんぼ呑んだか聞いている

喜美子

道連れが出来て嬉しい舞扇

喜久恵

ちよこを手に独り思い出秋深し

喜久恵

住職がくれた筆庵字は読めず

清水

吹きだまり木の葉の私語を聞いてみる

一枝

ささやかであるけど金を貸してある

愛子

一億の権利を買つたジャンボくじ

節夫

初春の海足りないものは酒だろう

笑子

傷ついた羽を繕うわが家の灯

淑子

神話消えた海からやはり陽は昇る

博子

靴の紐しつかり結ぶ二度の職

比呂子

年寄りの大仏様は見当らぬ

新造

本番になるとどじ踏む太郎冠者

一路

よか年を迎えてここは筑後なり

静風

さようならは軽く言いたい冬の塔

伸子

ささやかな親切をして住き日かな

親杏

肩車して虹の橋見えています

みつ恵

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

坂道で子に手は貸さぬ父である

石舟

昇り坂奈落の底がかすんでる

明吉

あのひとに逢えろと思う春の坂

正坊

箱のひかり持つて回つた古茶箱

登志実

箱の中から愛の言葉を小出しする

きく子

本箱の隅に青春蹲る

落児

箱入りも桜咲く頃嫁になる

富子

小説やないんヨ箱詰にされてはる

凡九郎

小さい箱もらつた方が得だった

とく子

五色豆の箱の色にも京の春

萬的

どの箱に入れたか全部開けてみる

寿美子

どきどきと受け取る指輪らしい筈

英子

人事異動社宅はみんなどきどきし

メ女

人を恋うトミノ倒しが続いている

作二郎

湯の街へバス乗り継いでJR

白溪子

長旅の情緒はやっぱりJR

杜的

駅内にやたらと増える屋台数

圭坊

この辺へ買出しに来たJR

しげお

JRになろうが変らぬ旅の道

明光

注意する母も昔は終電車

博史

取り込むに惜しい冬日の未だ高く

登代子

中年の迷いで風邪をこじらせる

風云児

廃屋にポツリと青い目の人形

よし子

風化した野仏の目にある悩み

つえ子

来年から貯金に妻も笑い出す

花村

川柳はびきの

塩満

合掌の正座嫌がる膝小僧

シメ子

忙しいのは釣を見てる人

志洋

空っぽの皿は返せぬ腕自慢

絢子

川柳はびきの

塩満

元年は税 税 税に明けて暮れ

かつみ

また巡る開戦の日の風化して

健三

髪の毛を染めて手軽な若返り

葉子

近道を通してきた靴の泥

トミ子

総選挙また身構える消費税

たけし

孫にやり嫁から返るポチ袋

志津江

紅葉の下でポーズをとる老女

敦子

日の沈む向うの山に過去の人

伴子

孫が来るから忙しい三ヶ日
身を守る範圍で酒を飲んで
東欧の政変で地図良く覚え
子が通る道の茨を掃わねば
画布にある女は彩を知っている
豆を煮る母に寸時の隙もない
幽車を回すコーヒー濃ゆくする
切り株に座ると父が近くなる
例外をいくつも抱いて生きている
ケーキ屋が笑い止まらぬクリスマス
簡単に山を削っていませんか
死のセールズ戦争の火を売りにくる
駆け引きは金の卵の契約金
ゴミの山いつか仕返す積り
沈黙が金とだんまり決めている
山幾つ越えれば見える春の海
ゴミだつて力合わせて山となる

むらくも川柳句会

藤井

明朗報

末一 美津留 白水 美代子 与呂志 比沙胡 重人 隆 吐来 利武 金太 美津子 悦子 丹吉 みつ子 泰子 敏 正朗 芳子 秀子 文子 峰雪 幸子 幸江 三津江 ゆき子 義良 幸夫 梅園 克子

日曜日父さん馬に早変わり
母米寿はれ着は赤いちゃんちゃんこ
新年に平和日本と書初める
祝う喜寿うれしい顔で大きな輪
今日もまた神の恵みの大いなる
新年の孫の書初めはめておく
母の手が縫い上げていく娘の晴着
川柳塔鹿野みか月(新春) 土橋 螢報
どこまでも思い出の道温もりで
もう会わぬまた逢いたいと月の道
子猫らふ獣の道で迷うな
真実をたずねる道に雪が降る
わたし夢中にさせた男よ死ぬがいい
夢中になった私を許す風に逢う
泳げない母が助けに飛びこんだ
守らねばならぬ土です夢中です
辞書にすむ老眼鏡が夢中です
何にでもなりきる孫がうらやまし
恋のゲームに夢中で出口見失う
新しい店に阿呆の列がある
新種ですと花屋の口のにせられる
道草をくった男とつ残して翔んでいる
逃げ道をひとつ残して翔んでいる
人の声聞くまで道を急がねば
父さんの頭の上に道がある
長楽満年この道まっすぐ行きなされ
右ひだり矢張り私の道を行く
呑むひとの素通りできぬ赤提灯
残り火を燃やしまぶしい母の絵よ
どんぐりの小道歩いて日が暮れる

よし美 ふみ女 林蔵 是代 久仁 武衛 明朗 螢報 さつき 美つ千 公弘 小鹿 二代 八重子 由多香 野草 正恵 武子 洋々 八重 幸枝 みさ子 敦子 坐牛 観洋 大全 明美 美美 美美

忍びゆく道はちゃん調べてる
道端の可愛い花にささやいて
まぶしい心をじっと見つめてる
元旦や心の年は若くして
雑草でも無駄には年を取つてない
道草しころんでしまったあやのちゃん
見てよ見て新しい服着てるのよ
荷物落として少女が道にまよつて
この道に賭けて今だに無位無冠
怠ると蟻の道さえつぶされる
馬の足花道などは歩かない
駆け出し行道きたいほどに道が呼ぶ
いつか来る道も近いぞトコイシヨ(圃)正子
道づれになりたい人を捜している
大道無門それなのに国境がある
細手道雪もためない風が吹く
風船よ空にも道があるんだね
この道は自然に天の河へ出る
気疲れのせいか遠い道である
エンピツの先でぞぞつて来た道だ
対立をしない眩しい花が好き
昨日とおなじ道には雪が降っていた
この白い道も運命線の中
生き残る道をひたすら走るだけ
★いずも川柳社は、いずも大賞に吉岡きみえ
いずも賞に渋谷久代、同友大賞に金村和子、
同友賞に神田治の各氏を決定、川柳ささやま
社は、ささやま賞に①奥野テル②森脇和子③
北川とみ子、丹波柳壇賞に①西脇富美②森脇
和子③池田法斉の各氏を決定した。

孔美子 喜与志 茂 くに子 小あき子 保子 富恵 静生 正道 正子 百合子 苦句 夕峰 風人 荒介 盛桜 隆風 汲香 千代 螢

柳界展望

集録 敏・武庫坊



★大阪川柳人クラブ初代会
長故金泉萬楽氏の句碑が大
阪市阿倍野区北畠の阿部野
神社境内に建立され、一月
二十一日、西尾葉会長ら四
十余人が参列して除幕式が
行われた。「お祈りのあと
のみくじを信じたし」の自
筆の色紙を御影石に刻んだ
もので、一同献水の後、北
畠会館で直会が開かれた。

★大阪川柳人クラブは2月
12日、大成閣で開いた第6
回総会で、第12回全日本川
柳大会賞および川柳大賞を
授賞した高杉鬼遊氏（本社
常任理事）に優秀作家賞を
贈った。

★NHK学園川柳広島大会
（1月28日）の堀口北斗選
「備える」で信本博子さん
（竹原市・同人）の次の句
が特選に選ばれた。
フェスティバルに備えて
鳩を飼いならす

★平成元年度いずも大賞に
吉岡きみえ氏（本社同人）
が受賞。作品次のとおり。
考えて考えて卵ひとつ生
む（久家代仕男氏報）

▽同人消息△

■宮口笛生氏（本社常任理
事）は奈良市七条自治会の
会長を永年にわたってつと
めた功績で1月23日奈良市
長から感謝状を授与された。
■谷信夫氏（松山市・本社
同人）はこのほど、雅号を
「真風」と改めた。

▼お便り▲

■内海幸生氏（本社参事）
「マウンツクックから軽飛
行機でタスマン氷河の上に
降り、氷河の雪を食べて絶
景に見とれています」。
タスマンに言葉奪われて
いる絶景

■谷垣史好氏（常任理事）
「その後、一進一退ながら、
徐々に良い方向に向ってい
ます。それでも先日の雪の
日なんか外に出ると息苦し
くなり、モグラの如く家の
中に潜んでいました。春が
待たれます。体重はもう少
して41キロです」。

■「川柳塔」霊碑のご報告
ありがとうございます。
主人（小西無鬼氏）もお仲
間に入れて頂いたことと喜
んでおります。

▼訃報▲

兵庫県篠山町 小西富士子
■菊田いさむ氏（本名勇・
京都市・本社参事）は1月
31日、心筋梗塞で死去、61
歳。告別式は2月2日、自
宅で行われ、薫風・紫香・
杜的・求芽氏らが参列。

▽訂正△

■2月号の路郎賞・川柳塔
賞候補作品中間発表の61ペ
ージ中段3行目、仲どんた
く氏の句は、「三猿のしびれ
が切れてしゃべりだし」の
誤りでした。

▼お詫び▲

■4月号課題吟の課題が、
2月号に発表したものと1
月号に予告したものとが異
なり、投句者にご迷惑をお
かけしたことをお詫び申し
上げます。（編集部）

新同人紹介

樹本 蔭児
薫風・寿美子・正坊推薦

長谷川 司
敏・金太・比呂志推薦

芳鉄 心
敏・金太・比呂志推薦

松川 芳子
紫香・杜的・白漢子・萬的推薦

3 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 1 時から 脱 皮・一 対・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分 〒661 尼崎市南清水11番 1 号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手 3 枚
堺川柳会	4 日(日)午後 1 時から 嘘・薄い・浮く・うしろ	堺市総合福祉会館 4 階和室 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 未 定・墨・抱 負	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後 6 時から 局面・意外・酒・偉い	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南 2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後 1 時から 塗 る・ぬるい・布	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後 1 時から 卒 業・会 社・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩 5 分 〒663 西宮市高木東町 9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手 4 枚
富 柳 会	15日(木)午後 1 時から 土 産・未 練・見 栄	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	15日(木) 正午から 資料・広告・企業・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩 5 分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚 各題 2 句
南 海 川 柳 会	16日(金)午後 6 時から 職務・後任・会話・波紋	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	18日(日)午後 1 時から 人並・手抜き・味・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
南 大 阪 川 柳 会	19日(月)午後 6 時から 教える・困る・添える・解く	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後 1 時から 絆・カップ・動く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩 5 分 〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊
川 柳 東 大 阪	24日(土)午後 6 時から 裏・すぐ・広い・石	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西 5-6-23 桑原喜鳳 句会費 500円 投句料 62円切手 3 枚
駒つなぎ 川 柳 会	26日(月)午後 6 時から 歳月・思い出・道・ありがたう・さようなら	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
岸 和 田 川 柳 会	29日(木)午後6時半から 窓・場 所・花	岸和田市上町町会館 南海線岸和田南東徒歩10分 〒596 岸和田市上町 7-36 植山武助

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円 (62円切手 5 枚)、各題 3 句以内

原稿送り先 〒597 貝塚市地藏堂53番地 5-1-401号 宮園射月芳

編集後記

☆三月と言うと受験生はもちろん、その家族の方々も大変な時である。受験と言えは戦前、軍国主義の華やかなりし頃、歴史一本槍というのがあり、私達も神武、綏靖、安寧……などと歴代天皇の名前を暗記させられたものであった。

☆終戦後のある日、大谷短大で歴史の教鞭をとっておられた戸田古方さんが、これでやつと本当の歴史をお話できるようにになりましたと言っておられた。

☆今では、久史八代とか言うて第二代から第九代までの天皇を架空だと言う学者も出てきて、神武天皇の海道東征を応仁天皇に置き換え、それ以前の大和に住んでいた人達を駆逐、または配下におさめたと言う人もいます。

☆去る二月二十五日には、路郎、生々庵両先生の句碑

を訪ね、また、四月には阿部

野神社の境内に路郎先生の

「夕桜……」の句碑が皆さ

んのお力添えで除幕される

運びになっている。阿部野

神社と言えは、先に清水白

柳さんや金泉萬葉さんの句

碑もあることだし、楽しく

諸先輩の方々は、柳論をた

たかかせていることだろう。

☆川柳はいつまでも、柳樽

の枠にはまっているもので

はなく、時代と共に変化し

生きつづけるものであり、

句碑とは、句主が生きた世

代がはつきりと現ざれいて

なおかつ句碑の前に立った

私達に、何時までも何かを

教えてくれるものだと思っ

ている。

☆私も長い間、川柳の作句

を続けているが、さて句碑

にでもして残せるような句

がとなると、考え込んでし

まうのである。皆さんはどうだろうか、お互いになお一層の努力をと思うこの頃です。

▼「政治家の寄付は罰則をもつて禁止」の政府公報が自治省の名で大新聞の広告に載った。いまさらわざわざ処罰の対象になりますと教えて頂かなくても重々承知いたしております。そんなことは現職の政治家諸氏にお伝え下さればよいことであって、税金を使つての新聞広告は、いま問題の消費税もこんなふうに使われるように思われて心もな

い。国民を代表して国政に参画される高邁な方々の次元の低さを見せられたたうで情けない。

▼粗大ゴミ、生ゴミ、濡れ落ち葉などと言われているかつての産業戦士のことを最近「スパッツ」と言うらしい。スパッツの存在そのものを知らない私には比喩が通じない。年々歳歳人同じからずではないが、流行語は時々刻々の速度で変わっている。そんなことは表層的な流れであって大したことではない。しかし知りたい。註（女性下着の一種

で肌にびったりくっついて暖かくない。そんなものまで作って売れるのが、現代社会の豊かさである。使い捨て同然にされたスパッツは哀れである。企業優先、企業依存の政治も結構ですが、スパッツあつての繁栄を忘れてもらつたら困ります。「私は自民党が結党以来のドン底と言われた危機の中で総裁に選ばれ、地を

はうような努力を一生懸命にしてきた」と総理は言うが。

★三月は「弥生」といい「桃月」ともよぶ。そして

三日はひな祭り。また八日は、国際婦人デーで、三月

というとは何となく女性

の月のイメージがつよい。

ひな祭りの由来については本号の布施幸子さんのすい

そうにくわしいが、国際婦人デーについてはあまり知

られていない。この日が制定されたのは一九一〇（明治四十三）年で、今年はず

うと八十年目にあたる。

★その年、デンマークのコペンハーゲンでひらかれた第二インターナショナルの第七回大会の席上、ドイツの婦人運動家クララ・ツェトキンが提唱したもので、「婦人にも参政権を。男女同一労働同一賃金。完全な母性保護。児童の教育・給食の国費負担」などのスローガンがかげられた。その後、婦人の地位向上のためのイベントが各国でおこなわれるようになり、日本でも一九二四（大正十三）年に最初の集會がひらかれている。

★このころ、川柳界は女性の進出がいちじるしく、男性たじたじというところだが、もつともつと持てる力を発揮してほしい。その一つの試みとして、本号を「女性同人特集」とし、エッセイ・選・鑑賞などに可能なかぎり女性に登場していただいた。さていよいよ四月から「国際花と緑の博覧会」が開幕する。（正）

作品募集

初歩教室「誘う」(3句)辻白溪子担当

課題吟
(3句)「振る」
「コップ」

森田 推
下中 江
愛笑 清
論風 芳
選選

茴香の花(3句)

八木 千代
選選

銀河系(3句)

河内 天笑
選選

水煙抄(10句)

黒川 紫香
選選

川柳塔(10句)

西尾 紫葉
選選

5月号発表(3月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

6月号課題吟「泥」「消す」「電波」

○同人費・誌代などのご送金は、川柳塔社会計室(高杉鬼遊方)へお願いします。

〒581 八尾市中田2-302

振替口座 大阪 8-33368

誌代 半年分 3,800円(送料共)

1年分 7,500円(送料共)

〒545

発行所

川柳塔社

電話(06)691-6914番

振替口座大阪8-33368番

編集兼
発行人

藤原 西尾

童心 社

印刷所

藤原 西尾

童心 社

平成二年三月一日発行
平成二年三月十五日印刷

定価 六百元(送料51円)

本社3月句会

兼題 おはなし
「残る」
「機嫌」
「そのうち」
「貞」

席題 2題 当日発表 各題2句以内厳守

投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと

各業ごとに裏面に必ず氏名明記。

投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。

西尾 小出 宮内 河内 天笑
選選 選選 選選 選選 選選

兼題 「宝」「雪」「月」「花」

日時 3月8日(木)午後6時
会場 メンズファッションセンター3階

中央区内本町1-11 電06-941-1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

本社4月句会 6日(金)

兼題 「宝」「雪」「月」「花」

NHK川柳作品募集

課題「待つ」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 3月10日締切

投句先 大阪市中央区馬場町3-43

NHK大阪放送局

「ラジオセンター」川柳係

発表 3月25日(日)ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「猫(ねこ)」 橘高 薫風 選

ハガキに3句 3月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階

西日本文字放送 川柳係

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町 1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5



蘇饅は、ふくれて大きくなることや、丸々とふくよかな
形から子孫繁栄、福徳円満のシンボルとされています
現在、中国では正月や誕生日などの行事に中華饅頭(餃
子)をつくって祝う習慣も定着しているようです



家庭円勝まん

戎橋筋本店・有名百貨店・
地下街でお求めください



蓬策